

---

# GOD EATER -PL/RAYERS-

阪川ヨシカズ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GOD EATER -PL/RAYERS-

### 【NZコード】

NZ2274Z

### 【作者名】

阪川ヨシカズ

### 【あらすじ】

それは、神を喰らう者の物語。いや、神を喰らう者『たち』の物語。

フェンリル極東支部、通称：アナグラに、初の新型神機使いが現れる。……『一人』。そして、それに導かれるように新型神機使いはさらに集まる。

予定された時計の針は、徐々に狂い始める。さて、狂っているのは世界か、アラガミか、あるいは、人間か。

そして彼らに待つは、神々の楽園か、奈落の底か。

## 1 · PLAYERS (前書き)

これはフィクション。こんな世界は存在しない。だけど、それは未来のことかもしれないし、遠く遠く宇宙の果てで現在進行形で存在しているのかもしれない。

それにはかわらず、あなたはこの物語を否定することができます。あなたの中の『ゴッドイーター』の世界を、壊されたくなれば。すぐ立ち去ることを勧める。

大丈夫、世界は無限に存在するから。

## 1 · PLAYERS

NOW LOADING . . .

〔READY . . .〕

フエンリル極東支部、通称・アナグラ。旧型神機使いは多くいるが、未だ新型は一人もいない。

・・・だが、ついに適合候補者リストの中に、新型神機に適合するものが現われた。

この出来事は一日とせずにアナグラ内に広がり、話題の大半はそれに関連するものであった。それほど、新型は重要視されているのだ。

「新型が入つてくれるけどよ、俺たちの立場はどうなつちまつんだ？」

「焦るなよ。先輩面してりやいいんだ、俺たちや。それにしてもさ、

「

新型が一度に一人も入つてくるなんて、珍しいこともあるんだな。

## 【陸月ケイスケ】

足が、震える。それとも地面が揺れているのか。そんなことは分かり切っているが、この足の方がおかしいに決まっているんだ。あとは、あとほここに、手を置けばいいんだ、手を置く、手を置け。それで終わり。たったそれだけで、すぐに終わる。一瞬で、一瞬で終わる、そうに違いない。

だから、ほら、さあ。早く終わりにしてしまおう。何のために、親父とお袋を説得してここまで来たっていうんだよつ。ほら、早く

だけど、強張った体はそう簡単に動いてはくれなかつた。

やうこいつ思案していると、スピーカーから声が聞こえた。それは、女性の声。

「どうした？ 貴様は『ゴッドイーター』となるためにここまで来たのだろう？ それなりの覚悟を持つてここまで來たはずだ。ならば、この程度のことができるなくては困る。これからは任務はもつときついだらうからな。

忠告しておく。覚悟がないのならこりからさつきと立ち去れ、そんなちやちな覚悟でこの仕事をやっていけると思つなー。」

その言葉を聞いて、胸が苦しくなつた。俺の覚悟つて、この程度だつたつて。もしも、このまま帰つたら、帰つてしまつたら。俺の家族は、どう思うかな。

親父は俺の決断を聞いて、ただ一言、好きにしろって言った。だけどそれだけじゃなくて、その選択に後悔はないか、って訊いてきた。

あの時の俺は、自信を持つて縦に首を振つてたけど、今の俺はどうなんだろう

お袋は、……最後まで反対してた。だから、縦に首を振つてくれるまで、俺は何度も何度も頼んだ。そして、最後の最後にようやく、半ば呆れながらも笑つて了承してくれた。

そして今からちょうど一週間前に、神機に適合したという報せが家まで届いた。それはもう、俺は手放しで喜んだよ。その時の母さんの顔は、やつぱり呆れていて、それでいて悲しげで。

それから今朝、家を出るときになつて、よつやくお袋がまともに話してくれた。いや、話したというよりは、俺に忠告した。

『死に急ぐなんて本当に馬鹿ね。一体誰に似たのかしら、ホントに…。いい？ 絶対、死んじゃダメだからね。遺物で戻ってきた日にはあの世まで殴りこみに行つてやるから、覚悟しておきなさいよ』

「覚悟、か。俺の覚悟は、こんなもので、この程度で、破れる？ 一瞬の痛みで、俺の覚悟がぶち破れる？」

なんだよ。どうして、この程度で俺の覚悟が打ち砕かれるなんて、思つたんだろうな。本当に馬鹿みたいだ、俺つて。

「俺の、覚悟は……この程度じゃない！」

俺はそう嘲り笑つて、右手を機械の上に、差し出した。

その刹那、爆ぜる音と共に、これまでに味わったことのない、能動的苦痛が腕から体中へ駆け回る。その痛みは体中から汗と涙と喘ぐ声となって搾取された。

いつそのまま、樂にしてくれ。そんな考えを頭の中から追い出す頃には、痛みは最初から存在しなかつたかのように鎮まっていた。

そして、機械の蓋（？）が持ち上がり、俺は腕に輪つかのようなものが嵌まっていることを確認する。そして俺の決意を見届けたかのような声を耳にした。

「決断が遅い。任務中は瞬間的な決断が必要とされる、少しの判断の遅れが命取りだ。 フェンリル極東支部へようこそ、……新型ゴッドイーター」

1441 訓練所エリア廊下

### 〔睦月ケイスケ〕

エントランスへ戻る途中、おそらく俺より年上の奴とすれ違う。そして、すれ違う時に彼は質問した。

「急に訊いてすまないが、何をされたんだ？」

どうやら、彼も神機の適合者のように、今から腕輪をつけに行くようだった。そして、正直に答えて不安にさせるか誤魔化すか迷つた挙句、「全然どころか一切痛くないようなことをされる」と、はいはい冗談ですけど何か？ みたいな感じで答えた。

「そうか、それならよかつた。感謝する」

そう言つて彼は行つてしまつ。

思えば、これが俺とあいつ

の初対面だった。

1442 エントランス

【陸月ケイスケ】

少し迷いながらもエントランスに到着する。アナグラの中は想像よりも遙かに広かった。

さて、指示が出るまで待つていればよかつたんだっけ。ソファーにでも座つていようか。

つと、既に座っている人がいた。とりあえずその横に座ることにする。見る感じ、同年代のようだ。服は、ああ、居住区で今流行の服だったような。

「ガム食べる？」

「えつ？」

唐突に尋ねられ、少し焦つてしまつた。

「えつと、ガム？ ガムね？ えつと、貰えるものなら貰つておきたいな」

俺がそう答えると、彼はポケットを「ソソソソ」とするが、…どうやら今食べているので最後だつたようだ。それを聞いて俺の口から少し溜め息が漏れる。

「それで、誰だ？」

俺はまず聞くべきだつた質問をいまさら口にする。さすがに一言目から「誰だ？」は失礼な気がしないこともないが。

「え？ ああ、俺はコウタ。藤木コウタ。少しばかりだけど俺の方

が早かつたから先輩つてことで」

「それは認めない」

これでも競争心は人一倍なもので、意固地つて言われても仕方ないよなあ。

# 「ひちの15歳だぜ」

「あ、じゃあ同じ年つてわけか、お互いよろしくな」

それを聞いて、少し安堵する。正直、俺よりも年上の奴ばっかり  
だと思ってたからな。といひで、いつになつたら指示が来るんだろ  
うな。

彼の言葉をさえぎって、突然、施設内に悲鳴が木霊する。受付やらあけじけやらからだわざわと声が上がったが、

な  
な  
なんたよ  
今  
の  
二  
「

卷之三十一

あ、あれ、椅子が遙れてる？

۹۷۰

505

ここは落ち着いてひひ否定しようぜ、お、俺っ。

「だ、大丈夫だと、おももも、おも、思ふうつ……」

そして、騒がしかつたエントランスに静寂が訪れる。だ、誰か何とか言ってくれよ、怖いって。

と、エレベーターから一人の女性が出てきた。……第一印象。でかい。どこかは言わない。第二印象。怖い。取つて喰われそう。

そして彼女は、俺たちの前で仁王立ちになる。そして、凛とした声で言った。

「立て」

……一瞬意味がわからなかつたが、立つよつに命令をされているのだと理解し、俺たちは立つ。さながら受刑者のように、違和感を拭えない。

「私がお前らの上官を務める、雨宮ツバキだ。……先ほどの声の原因は黙らせておいたからもう問題はないだろう」

あの人沈黙させられたんだ。なんか良心が痛むなあ。やつひと思いつながらあくびをすると、ツバキさんが俺をたしなめる。

「睦月。何を考えているかは知らんが、上官の目の前であくびなどは控える。一度目は蹴り飛ばすぞ？」

「あ、あつ、すみません」

そうだ、ツバキさん、だつけ。この人は俺に帰れつて言つたやつだ。思つたとおりやつぱり怖いな……。

「メディカルチェックはサカキ博士の研究室で行われる。睦月は1500から、藤木は1630から。無論、時間厳守だ。……遅れるような真似をしたら、少々手荒な事をするぞ」

うわあ、絶対に遅れない。といふか遅れられない。遅れたらたぶん命はない。

「分かったなら返事をしろつー。」

「は、はいイつー。」

二人の声が初めてそろつ。ツバキさんがエレベーターに乗つてエントランスを去るまで、俺たちは気をつけの姿勢でいた。

## 「睦月ケイスケ」

ここで会つてゐるか、不安になつながらも室内に入る。室内には、椅子に座る初老の男性と、よくCMで見かけるここアナグラの宣伝部ちょもとい、支部長。

初老の男性は、ただただ俺には理解できそうにない機械をいじつていて、こちらに気づいている様子はなかつた。

「サカキ博士。……サカキ博士」

せんべつ、支部長に一度呼ばれて、よつやく応える。

「なんだいヨハン、今はおつと、もう来ていたのかい。予想よりも263秒も早い」

それつて要するに制限時間ぴったりじゃないか？　俺はそこまでルーズじゃありません。

……とは言つたものの、ツバキさんに言われなかつたら多分そうしてたと思つ。

「それで、めでいかるちえつくて何をするんですか？　まさか、注射とかするんですか？　他にも注射とか、あと採血とか接種とか点滴とか注射とかするんですよねツ？！」

注射は大つ嫌いだ！　ここでサカキ博士がかぶりを振つてくれなかつたら本氣で泣いてたと思つ。

「…………まずは、自己紹介としようか。私はペイラー・サカキ。」

フェンリル極東支部で技術屋、もといアラガミ技術開発統括責任者を務めている」

え？ アラガミ・・・ん？ 統括技術？ あれれ？

「なんですその早口言葉みたいな……。俺には縁がなさそうですね」

サカキ博士は、先に用事を済ませたらどうかと、せんぐ  
支部長に促す。

「サカキ博士が自己紹介をしたから、便宜上だが私もすることにして  
よう。名前は知っているな？」

「えつと、……ヨハネスう、……えつと、よほねす、ふおん、

宣伝部長？」

あつ、眼光が鋭くなつた。もしかしてこれ地雷っぽい？ 地雷だ  
よな？

「……では親切に教えてやるわ。私はヨハネス・フォン・シックザ  
ール。ここフェンリル極東支部の支部長を務めている。 今後  
は、間違えても“宣伝部長”と呼ばないように心得ておくよつて頼  
む

「へいへい、そうでありますか、はあ。またややこしい名前付けて、  
親の顔を見てみたいものだ。……調子のつてスミマセン。

「さて、本題に移らせてもらおうか。……博士、これまでも重ね重  
ね言つてきたが、説明中に邪魔はしないように  
ピンポイントに釘を刺した。抜け目がないというか準備周到とい  
うか。

「まず、初めに確認しておくが、『シードイーター』などのような事を  
するか、知つているか？」

「ええ、それぐらい知つてますつて。アラガミをちぎつては投げち  
ぎつては投げ、瀕死になつたらホールドトラップで足止めして捕獲

用麻酔だ、」

「どうやら一から説明する必要があるようだな  
あれ、違つたの？ いや合つてゐるでしょ、『コッディーターつてそ  
ういう職業じゃなかつたつけ。

「主な仕事はアラガミの『コア』の回収及びアラガミの討伐だ。『コア』は  
エイジス計画を推進するために使わせてもらつ」

エイジス計画。太平洋上に、周囲をアラガミ防壁で覆われ  
た人工島・エイジスを建設し、生き残った人々を移住させるという  
計画。テレビで何度かエイジスを見たことはあつたが、建設は最終  
段階に差し掛かっているように思われる。だけど、これだけは、こ  
れだけは聞いておきたかった。

「この計画が完成すれば、……みんな、みんな、助かるんですね。  
俺の家族も、友達も」

その答えさえ得られれば、きっと心置きなく頑張れるはずなんだ。  
答えのない戦争ほど、馬鹿馬鹿しくて愚かなものはない。

「 そのためには精進することだ。私からは以上だ、これで失  
礼する」

そう言葉を濁して、せん 、支部長は退室しようとした。

「ヨハーン、ちょっと待つてくれないか？」

不意に博士が呼び止め、せん支部長は少し呆れ氣味で応える。

「博士、そろそろ公私の区別をつけては、」

「彼は、この支部の新型神機使いで、まだ若いから。大切にしてほ  
しい。……君一人のものじやあ、ないからね」

そう言って、意味深に博士は笑つた。宣伝部長も、笑つた。  
でも、田は笑つていなかつた。

そして彼が退室するまで、俺は放置されっぱなしになつた。

「よし、準備完了だ。それにしても、データを見る限り、君の潜在能力は私の想像をはるかに超えているようだ。ここまでとは思わなかつたよ。……それじゃあ、そこに横になつて、リラックスして。三時間後に目が覚めたら、そこは君の部屋のベッドの上だ。それじゃあ、始めようか」

言われたとおりにする。まず、シールつきの電極のようなものを体のあちこちに貼られる。なんだか少し寂ぼやい。心電図が揺れるのがここから確認できるけど、いつもより早いのは、きっと緊張しているせいだ。

次に、酸素吸入の機械のようなものが顔に当たられる。そして、ゆっくりと呼吸をしてくれと博士に言われた。

……すると、急にうつらうつらとしてきて、

……博士の声が聞きとれなくなつてきて、

……それが麻酔だと気づいたころには、

……電球が突然切れたかのように、目の前が真っ暗になった。

〔睦月ケイスケ〕

2002 自室

目は開いたけど、まだ目が覚めきらなかつた。頭が冴えないとい

うか、まだぼーっとしてゐる感じがする。できればもう三十分、たつた三十分でいいから寝ていい。そんな調子で、目が覚めてから既に一時間が経過していた。さすがに、これ以上の睡眠は無粋だな。

それにして、今さつきから断続的に響くべぐもつた音はなんだ？ 空っぽのドリーム缶を打ち鳴らすような音が、ドンドン、ドンドンと響いている。……部屋の天井が鮮明に見えてきたとき、それがドアを叩く音だと気が付いた。

「あ、あっ、はいはい、いまドアのロック外すから」

少し焦りながらドアのロックを解除する。そしてドアが開くと、いきなり鉄拳が飛び込んできて、俺は咄嗟にかわした。不意打ちかよ、きたねえ奴だなあ、おい。

「……貴様のことは、絶対に許さんぞ」

ただ一言が許されるのならば、全く理解不能と言つだらう。それほど彼の襲来は突然で、俺は彼のことを全く知らなかつたのだから。「おじおじ、いきなり襲つてきて名前も言わないつてのはないだろ。まずは名乗つてからにしろよな」

俺の言葉に少し頭に来たようで、顔面田掛けて拳を振るつた。怒りに任せた拳は、あまりにも避けやすい。静かな怒り、そっちの方が怖い。なんでかつて言われたら、その、……お袋かな。うん。

「お前は俺の何が気に食わないってんだ？」というか先に名前を言つてからにしろ」「

それを言つてくれなければ話は進まない。そして彼は質問に答えないと。

「理由は分かるな？ 簡單なことだ。貴様は俺に、恥をかかせた。何だか分かるな？」

「いや、だからさ、理由より先に名乗れよ」

すると、少し目線をそらして、……自分の名前が恥ずかしいのかは知らないが、小声で言った。

「　神レキ、…… 17だ」

榎？ 博士と関係があるのかな。と、苗字の方はどうでもいい。

問題は、

「レキい？ またまた女っぽい名前だなあ。やつぱり漢字で書くと  
つ

「「アミ」と書いてレキだ。そっちじゃない」

そつちつてぢつちだよ、おい。俺も一体何を言いたかったのやら。

「あ、その顔はどこかで確認した覚えがある。記憶領域の中から現在探索中っど。えーとお、確かー、……ああ、絶叫した奴。そつかうか。……んで、俺に逆ギレですか、そうですか」

「違うつ！ 貴様が痛くないと言つたから樂——に構えてたら

このザマだ！」

真面目だったのか、完全に俺の冗談が通用してなかつたんだ、正直者というかバカ正直というか、それともただの馬鹿というか。……だけど、そんな彼の気持ちも察せず、軽い気持ちで答えたのは、俺だ。

「俺があんなこと言わなきゃよかつたんだな、……悪かつた」

俺が頭を下げる、俺があつさり謝罪したこと少しばかり呆気にとられているようだ。そんな様子を「ウタは見た。

「あ、もう一人入ってきた奴いたんだ。といつことまさかこの人が叫ん、」

「おい、貴様。本気で殴るぞ、もうずいぶん噂になつてゐるじゃないか」

「そりやああんたがあれだけ大きな声で叫んだんだもの、エントラソス突き抜けてラボラトリまで聞こえたそうだよ」

ふと、レキは俺に向ける。

「おい、そつちの名前はなんだ？」

そつちと言われ、一瞬誰のことかわからなかつたが、この場には俺とこいつとコウタしかないのでコウタのことだと判別した。

「あ、俺？ 俺は藤木コウタ」

「よし、コウタ。こいつの体しつかり押さえてろ。大丈夫だ、すぐ終わる」

むんずつとコウタは俺の体をつかみ、しつかりと羽交い絞めにする。そして、レキは関節を鳴ら（そうとするが鳴らないので、鳴らすフリを）して不敵な笑みを浮かべる。くう、コウタ、俺を裏切つたな！！

「何が何だか分からぬけど、こうした方がいいような気がするんだよ」

「これ一発でチャラにしてやる。貴様の名前はなんだ？」

「え、えつ、……む、睦月、ケイス」

ケを言つ前に彼の鉄拳が人中に食い込んだ。そして脳内が揺れて揺れてそのまま氣を失つた。

## 2018 ケイスケの部屋

【榊レキ】

「その……すまん。本氣でやりすぎた」

「ふあははひんひゅうひはいふほわほおああはつは（まさか人中に入るとは思わなかつた）」

別に狙つたわけじやないのだが、ケイスケが暴れたことと、コウ

タがあまりしつかりと押さえられなかつたことで位置がずれてしまつたのだ。正確には眉間の少し上あたりを狙つたのだが。ちなみに、人中とは口と鼻の間である。あそこに入ると酷く痛い。

「全く、すごい音がしたかと思つたら。もひひうこうとはしないでよ！」

小競り合いの後駆けつけた彼女が、彼を介抱してくれた。どうやら衛生兵のようだが。髪はセミロングで、それを髪飾りでまとめているようだつた。

「……それよりも、わざとらしく。本当はもつまともに話せるんだろ？？」

「ちえっ、バレてたか」

バレバレだ。そして、彼が立ち上ると同時に、腹がなつた。口ウタはそれがおかしかつたようで笑い出す。

「確かに配給のチケットでいろいろ引き換えてもらつたつけ。レキが代わりに引き換えに行ってあげたつて。ほら、冷蔵庫の中身見てみなよ」

一応、俺ができる償いといえば、これぐらいである。しかし、彼がこの程度で許してくれるか。

彼は冷蔵庫を開けると、冷氣とともに、ささやかな配給品が入つているのを確認する。まず基本的な野菜。でかいトウモロコシに少し驚いた。あと、レトルト食品や、チューブ状のゼリーツボーデリングク。そして炭酸や野菜などのジュース。

「よし、俺が引き換えてやつたんだから正当な労働賃金としてジュース一本貰い

「誰がやるかよ！」

俺なりの冗談のつもりだったのだが、真に受けられた。俺が言つたら「冗談に聞こえないのか、そもそも冗談つてどんなものだらうか

……？」

「どうあえず、俺は皿室でゆっくりディナーとしよう。これでも料理は得意だからな」

「ああはいはい、お疲れ様で」  
小馬鹿にされながらも、俺は部屋を出る。そして腹は、空腹のサインを放つた。

2042 ハントランス

### 〔睦月ケイスケ〕

ツバキさんに俺たちは呼ばれたが、一体何があるところのだろうか？

「よひ、お前らが新入りか  
突然声がかかつて、弱虫の俺はビクッと震える。そして、落ち着いて声がする方向を見ると、一人の男が立っていた。  
「え、ええ、はいはい。俺らが新入りですよ」

とりあえず俺は深呼吸をしながら応えることにする。すると彼は、ポケットからタバコを取り出してくわえる。そしてライターの火を、

「コンビニセセ、エントランスは禁煙です」

受付の女性に咎められ、渋々タバコをしまつ。

「それで、どなたですか。……腕輪を見る限りは、神機使いのようですが、

レキが彼に質問したら、彼は口元に笑みを浮かべて答えた。

「ああ、そうだ。お前らは多分あねう 雨宮上官に呼ばれているんだろう?」

「なんだう?」

あれ、こま姉上つて言おうとしたよな、それってもしかして。

「よし、時間には間に合つたようだな と、リングウ。ここつらにちよつかいを出したりはしていいな?」

「いいえいいえ。それでは、俺は少しテートに……」

そう言い残して彼はそそくあとエントランスを抜け出す。間違いない。あの男、ツバキさんの弟だな。

「さて、では訓練に行く。主に神機の操作、特に新型は銃形態と剣形態の変形操作について理解しろ。これができなければ、一生ミッションには出られんぞ?」

そ、そんなのは「めんだ。しっかり頑張らないとな、何のためにこの職業に就いたんだ、俺!」

そして俺たちは、訓練所へと足を運ぶ。訓練所はたくさんあるようで、今から俺たちが行くのは、第一訓練所。

一体何をするかドキドキしてきた。このドキドキは不安なのか、それとも期待なのか。そんなことは分かるわけがないが、俺たちは戦場への一歩を確かに踏み出していた。

2011 第一訓練所

【睦月ケイスケ】

「よし、そこまで」

ツバキさんの声がかかり、俺は足を止める。……神機はこんなに

も軽々しいのに、膝が笑っている。体力には自信がある方なんだけどな。

「最初は神機に慣れていないから大抵そうなる。じきに治まるだろう」

……とりあえず、一通りの動作を学ぶことができた。通常は一人ずつの訓練らしいのだが、やはり三人まとめて入隊されたのが面倒だつたらしく、一度に行つたそうだ。そして、ようやく終了の時間となつたので今日はひとまずこれで解散だそうだ。

ちなみにレキ（あとで年上だからさん付けにしろと言られた。殴つておいてそれはないから呼び捨てにさせてもらひつ）と俺は、同じメニューをこなしたが、コウタはまた別のメニューだったようだ。旧型と新型の違いつてのはこりこりうとうとこりで現れるわけか。

「明日の朝はくれぐれも、遅れないように。少しでも遅れたら休憩はなし、予定の時間の一倍は動いてもらひことになるから、覚悟しておけ」

そう言われたら絶対寝坊する気なくなる。早く休みます、ぱっちり寝て早起きします。

「ふう、やつと終わつたか。あー、疲れたな」  
レキとコウタは地面に仰向けになつている。俺はそこまで疲れてはいない。わけではない。だがへばつたら負けのよくな気がするのでそういうことはしない。

「んじゃあ俺はジュース買つてくるから、コウタも欲しかつたらついでに買つてきてやるよ」

「おい、俺は」

コウタの分だけ聞いて訓練所をいつたん飛び出した。後ろからばかやろーって声がかかつたけど気にしない、あーあー、聞こえないの言葉ー。

自動販売機の前に到着。そして、「コインを投入 あれ？」

「「」これどうやって使つんだよ、おー。硬貨投入口どこだ？ 居住区に合つたやつと違つた？」

これは参つた。さすがに手ぶらで帰るのも悪いし、うーむ、どうすれば買えるんだ……？

「ああ、お前がうわさの新人か。こんなところへ向やつてゐるんだ？」  
「え？ あ、え、えつ……ヒ……」

## 2013 第一訓練所

### 【神レキ】

「つたく、俺の分はないってのは冷たい奴だな  
俺は溜め息をついて、そう愚痴る。  
「そりゃあ恨みでしょ。痛そだつたし、あれ」  
言い返せない。確かにあれは俺が悪かつた。もひとつ謝つておくれ  
きだつたか。

「ところで、聞きたいことがあるのだが。……なぜゴシギイーターになつたんだ？」

俺はなぜかそんな質問をしてしまつ。やつぱり疲れているみたいだな、今の俺は。

「なんで……つて。かーちゃんと、ノゾミ……ああ、妹のことだけども……ノゾミたちをや、守りたいんだ。……俺が守つてやらないと、一人を笑顔にしてやれないからさあ」

強い奴だ。俺よりも年下のくせに、信念を持つていて、  
とても妬ましくて、自分がとても、

「…………情けないな、…………俺は…………」

自分に向かって、そう呟いた。俺は、……逃げた。全てを投げ出して、頭を背けた。だけど、仕方ないんだ。仕方なかつたんだ。  
……耐えられなかつたんだ……。

「じゃあさ、レキはどうなんだよ。何か目的があつてなつたんだろ？」

「ウタの問い合わせに俺は答えられない。だから俺はサッと立ち上がり、神機を持って黙つて退室しようとする。

「…………おい？ そつちが先に質問したんだから答えてよ」

「…………すまない。…………今の俺には、…………答えられないんだ」

俺はそう言つて逃げるようになつて部屋を去つた。

## 【陸月ケイスケ】

2015 訓練所エリア廊下

「ほら、ひつやつたら出るね」

そう言つて彼は腕輪を電子部分に当てる。するとガコン、という音とともに、コーラが2本出てきた。

「支払いは腕輪ができるんだ。…………そういうの一切聞いてなかつたからなあ、ははっ。てつきり現金かと」

俺は苦笑しながらそう呟く。

「ほい、コーラ2本でいいんだろ?」

彼は缶を渡すと、その場から去る。さうしてある。

「あ、えっと、代金は？」

「そいつは奢りだ、入隊祝い。いつか同じ任務に出でられるといいな

！」

笑つて、彼は立ち去つて行つた。……入隊祝いなら、悪い氣はない。

「大森、タツミさんか。

いい人だつたな

俺も、彼のような人と任務に出たいと思つた。

これ以上コウタを待たせるのは悪いので、さつと戻りつか  
と。……ん？

「あれ？ レキ？」

「

レキは、何も言わずにすれ違つ。といつことせむつすぐコウタも  
来るかもしれないな。

……だけど、彼の顔は、あまりいい表情には見えなかつた。どう  
したんだろうな、一体。

「あ、いたいた。何してたんだよ、すぐに買つてくれるかと思つたの  
に」

と、コウタが走つてきて話しかける。

「いやあ、買い方が分からなかつたんだよ、ほら、居住区のと違つ  
だろ」

俺はとりあえず弁解して、すぐに分かつてもうえた。コウタはし  
っかり聞いていたようだ。意外だな。

「ところどりうしたんだ、レキの奴？ あんまりいい雰囲気じゃな  
かつたみたいだけよ」

「いきなりさ、なんで入隊したのかつて質問して、答えた後にレキ

はどうなんだつて訊き返したら、あんな様子になっちゃつて

「要するに地雷踏んだつてことだな。そのうち機嫌も直るだろ、ほ

つとけばいいや、ほつとけば」

「ウタは、「やうかな?」という顔をしたが、勝手に納得したようで、俺から受け取つたコーラのプルタブを上げて飲み始めた。俺も倣つてプルタブを上げ、搖らしすぎた炭酸飲料の洗礼を顔に受ける。

「わっふ

0629 第一訓練所

【神レキ】

「時間には間に合つたみたいだな　　おい、起きてるのか、お前ら」

立つたまま寝息を立てる一人。「こいつら、どこでも眠れるのか?

「気をつける。ツバキ上官が爆弾を持ってきたぞ」

ビクッ! 一人は震えあがり、目を覚ます。ちなみに言つておくと、爆弾ではなくスタングレネードである。

「この名称は分かるな、睦月」

「えっと、……閃光玉?」

馬鹿か。それとも寝ぼけているのか?

「スタングレネードだ。覚えておくよ!」

ツバキさんは直視しない方がいいと言つてピンを抜き、地面に叩きつける。すると、閃光がほとばしり、爆音が鳴り響く。目をつぶつたが、田の前が白んだし、耳がじりじりとなつて痛くなつた。

「」いつはアラガミにも通用する。使い方は簡単だ。ピンを抜いて、地面に叩きつける。お前らにもできるだろ？」「

「無論だな」

俺はスタングレネードを受け取ると、ツバキさんがやつたようにピンを抜いて叩きつける。

「うおっ、眩しいっ！」

少し田の前がチカチカしてしまった。閃光と音が収まるとき、コウタも一つ受けとった。

「じゃあピンを抜いてっと。えい！」

ワンバウンドして、時間差で閃光を発した。どうやら力が少し足りなかつたようだ。これではアラガミに隙を貰ってしまう。

「それじゃあ俺も一つもーらいつと」

ケイスケは、ツバキさんからはつしとスタングレネードを取つて、ピンを抜いた。

「てえい！……あれ」

思いつたり地面に叩きつけたように見えたが、不思議と反応がない。不発のようだな。

「なんだよ、俺がやつた時だけこれってありか？」

そう言ってケイスケは不発弾を拾い上げようとする。おこよせつ、こいつ、寝ぼけてるのか？！

「ば、馬鹿つ、よ、よせ…」

ツバキ上官が制止しようとするも、彼は聞かない。

「大丈夫ですって、ツバキさん、これぐらこどつて」と、

案の定、マグネシウムはその一瞬で反応を連鎖させ、辺りが真っ白になる。俺たちは咄嗟に田をつぶつたが、ケイスケは間に合わない。

かつたようで、閃光の直撃を喰らつた。

そして再び確認すれば、果たして彼は倒れていた。

「お、おい、ケイスケ！ 大丈夫かよッ？！」

「睦月… しつかりしる、睦月…！」

どうやら、完全に失神しているようなので、俺とコウタで

病室まで運ぶ」となった。面倒な真似を……。

0652 病室

### 〔睦月ケイスケ〕

「ん？」

今さつきまで訓練所にいたはずだが……おかしいなあ。なんで俺、寝てたんだ？ しかもここって病室じゃねえか。

「ああ……、…………そつか」

寝る前のことを思い出す。確かに、不発のスタングレネードを拾おうとしたら、田の前で爆発して、そのまま昏倒してしまったんだつたつ。

「んあ、ツバキさん」

気づいたら横にツバキさんが立っていた。オーラが出てる。キレてるよ、絶対キレてるよこの人。

…………そして、とりあえず彼女は一呼吸おいて言った。

「普通の奴はあんなことほしない。どうしてあんなことをした？ 私には理解できない

「いや、あれはその、…………知らなくて……」

「知らないじや済まされないこともある。だが、私が怒っているのはやつこひどじやない。……私の忠告を軽んじたことだ」

「ひ、…………それまつ……」

要するに、ジバキさんは俺が失敗をしたことを怒っているのではなく、それを防ぐための忠告を聞き流してしまったことに怒っているのだ。ついで、見過ぎていた。

……俺が何も言えないでいると、ジバキさんは溜め息をついて、俺にとって最も恐ろしい言葉を口にする。

「向いてないのかもしれないな、『シグマイーター』

心が抉られた。この感覚を、知っている。入隊した時の、あの躊躇いのとき。……でも、その時とは比べ物にならないくらい、心が痛くなつた。

ナビものいろからずつと、『シグマイーター』にあこがれていた。でも、親にはなかなか言い出せなくて。そして、初めてなりたいと言つたとき、両親そろつて向いていないと言つた。

あのころのデジヤヴ。嘘だ。嘘だ嘘だ。俺は、強くなつたんだ。たぶん、いや、きっと強くなれる自信があるんだ。それを否定され

て、俺は……俺は。

「そ、そんな、違いますって！ 確かに俺、非常識なところとかたくさんありますし、もつとたくさん迷惑かけるかもしません！ それに、それに……俺、ただの馬鹿ですし……」

吹っ切ってしまう。もはやどうしようもない領域、自分で自分が嫌になる。だから、それを聞いて、ツバキさんが少したじろいだよう見えた。

「馬鹿だけど、精一杯がんばりますよー。みんなの邪魔にならないよつに戦つて、誰ひとり傷つけさせない！ あいつらだって、親父も、お袋もつ！ たとえ俺がゴッディーターに向いてこよつとなかろうひとつ、俺は絶対に、強くなるつ！！」

「ひうなつたらもうヤケだ。やけくそだ。それはきっと、あのときずいぶん時間をかけなければ得ることが叶わなかつた、覚悟に違いない。なんで今になつてこんなにすんなりと出てくるのだろう？」

そして、そのわけを自分で言いながら理解する。俺がただの、馬鹿だからである。馬鹿の俺が、追い詰められた末に見つけ出した、一つの決意。

そんな俺の熱弁を聞いて、ツバキさんは含み笑いをした。おかしかつたのだろうな。笑いたいやつは笑えよ、これが馬鹿の俺の全身全靈の覚悟の表現だ。

「いや、……本当に、若いころのリングウにそつくつだと思つてな。確かに、向いている、向いていないじゃない。強くなる奴は強くなるし、変われない奴は、いつまでも変われない。……変われない奴がなぜ変われないか、分かるか？」

俺は考えるが、……やっぱりよく分からぬ。すると、ツバキさんは答えた。

「……変われない奴は、変わろうとしないからだ。変わりたいと思わないから、変わることができない。だから、強くなりたいと思う奴は、絶対に強くなる。それが心からならば。」

貴様のような奴は、大抵私がそう言つたらもう少し気の利いたことを言うのだが、それ以上の答えだな、これは。素晴らしいゴッドイーターになれると信じているぞ。……睦月

「 は、はい！」

なんだか心が温かくなつたような気分。ツバキさんが、こんな人だとは思いもしなかつた。……なるほど、だからこそ俺は、ここ極東支部のゴッドイーターにあこがれたんだ。

「さて、しつかり休んだのならば、いよいよ本番だ。初めての任務だ。……いいな？ 時間に遅れたらそれ相応の罰は受けてもらひやつぱりいつもどおりのツバキさん。でも、それがいい。だから、自信を持つて返事をする。本当は、もう一度ベッドに潜り込みたくなるほど怖いのにな。でも、覚悟と決意を語つたからには俺は、守るために、強くならなくちゃならない。

「…………はあああああ、…………ふうううううううう。 よしあー」

ゆつくりと深呼吸。そして俺はベッドを飛び出す。

そして病室を飛び出しつつ、廊下で足を滑らせて思いつきり転んだ。万事オーケー。

## 1 · PLAYERS (後書き)

やつちゅうひつた。やらかしてしまつた。・・・処女作にして、歴史  
がグレーになつていく。

いやいや、こんな調子じやだめだ。読んでくれている人がいるな  
らば、頑張らないと！ というわけではじめましてこんにちは。

今回のコンセプトは、『主人公がたくさんいたら？』ですね。無論、本編では一人で、こんなにおしゃべりじやありません。だからつて黙らせておくのはかわいそうでしょう、いや、この理屈はおかしいか。

まだ一話目なのに、こんなに飛ばしちゃつていいかなあと思つ。  
とりあえずアリサは出そう（笑）  
それでは、また次回まで。

0712 ハントラース

【陸月ケイスケ】

「おーおー、遅いよー」

「「めん」「めん、寝坊しちまつてわあ」

「……何が寝坊だ、今後はあんなへマはしないでくれよ」

ばっかり俺が下手にしてぶつ倒れたってことはバレてる。そりや

その場に居合させたんだもんな。

「それで、初任務ってなんだろう?」ワクワクしてきたよ

俺は足ががくがくしてきた。あんなに意氣込んで病室飛び出してきたのにさ、もっと俺に勇気とかがあればな。俺のかいしょなし!

しばらく待つていると、煙草の臭いがした。見ればそこにはこの前会った……誰だったつけな。

「ん……と、確か。リンダウさんでしたつけ」

リンダウさん? ちょっと脳内散策一つと。ダメだ、顔と名

前が一致しない。

「また会ったな、新入り。お前らを任務に同行するのが俺の任務つてわけだから、今後ともよろしくな」

とりあえず俺はようしきお願ひします、と頭を下げる。続いて口ウタ、レキと頭を下げた。

「ところで……一つ質問するが、お前ら全員一遍に、任務に連れて行かなきゃいけないのか?」

早速、リングドウさんが頭をポリポリと搔きながら言った。

「ツバキさんがそう言ってたんじゃないですか？　俺たちは初任務、としか聞いてないんで」

「確かに俺はあねつ、上宮殿に一任されたが……三人はちょっときついぞ？」

「リングドウさんは、少し考える素振りを見せる。やはり彼一人では俺たちは手に負えないのか？」

「あ、リングドウ、ここにいたのね。部屋にいてもいなかつたから少し探したんだけど」「

鈴を転がすような女性の声が俺たちの背中から掛かった。もちろん俺たちは背を向けているから見えないけど、リングドウさんはその女性を見て少々表情が和らいだように見えた。知り合いかな。

「ちよつよかつたサクヤくん、ちょっと手伝ってくれないか？」

……ああ、なるほど、リングドウさんが何をしたいか分かった。

「内容にもよるけど、といひで聞くけど、この子たちが新しく入ってきたのかしら？」

「ああそうだ。　おつと、自己紹介を忘れていたな。俺は雨宮リングドウ。苗字を聞けばわかるだろうが、あのツバキ上宮の弟だ」この前のツバキさんの反応で何となく感づいてたけど、あんまり似てないや。

「で、こっちが、」

そう言つてリングドウさんは、女性にこちらへ来るよう促す。そして目の前に現れた女性を見て、……男なら誰もが見惚れる体系に少し愕然、そのうえ露出度の高い服を着ていることに啞然、そして胸部に見ゆるは……ゲフンゲフン！　れ、冷静になれ、俺！

「私は橘サクヤ。リングドウが迷惑かけたら私に言つてね、あ、でも私よりもツバキさんに言つた方がいいかも……」

「おいおい、勘弁してくれ」

サクヤさんが笑つて、つられて俺たちも笑つた。そして一通りの自己紹介を終え、サクヤさんは切り出す。

「それで、何を手伝えばいいのかしら？」

「こいつらを任務に連れて行きたいんだが、一度では俺一人だけだと手に負えないからな。誰かを手伝ってくれないか」

サクヤさんも俺たちと接触できるチャンスを窺っていたようなので、快くOKしてくれた。

「んじゃあ、話し合いでもジャンケンでもなんでもいいからさつと決めてくれ」「

「俺はサクヤさん

「俺もサクヤさん

「フン、……俺も、その、……橘さんがいいが

「つておい、ちょっと待てガキども」

そりゃあこんなおっさんよりかは、サクヤさんと一緒にの方がいいに決まってるよな？

あ、少しリンクドウさんの顔がこわばってきた。まだ辛うじて笑っているけど、目元が引き攣つてる。

「よし、ジャンケンだ。一番に負けた奴がリンクドウさんとトートだぜ」

「おー、何の罰ゲームだこれは

「妥当じゃないか。俺は構わない」

「うん、いいと思うよ

「そしてなぜ了承する」

リンクドウさんのツッコミを無視して、三人の手が同時に出される。さて、誰が負けるのか？ ちなみに俺は結構ジャンケンに強い。結構強いんだよ、ホントに。

自信を持つてカツと田を見開くと。

「睦月ケイスケ」

‘**କୁର୍ବାଳେ କୁର୍ବାଳେ କୁର୍ବାଳେ କୁର୍ବାଳେ କୁର୍ବାଳେ**  
କୁର୍ବାଳେ କୁର୍ବାଳେ କୁର୍ବାଳେ କୁର୍ବାଳେ କୁର୍ବାଳେ

二人はバーを出した。おかげで俺はこのおっさんと一緒にですか、

「……俺のことは、どう思つてるか正直に言つてくれ。怒らないから」「ひとつ頼りなさそうに見えるし、すぐにはスポーツしそうな感じがするぜ」（す）こと思いますよー、俺の上面にせとつてもちたいな」と思つますー）

しまつたと思つた時にさ時すでに遅し。微妙に怒つてゐるよつて見受けられる。

「それに俺のことを見ぐひつでもらひちゃあ困る。——応姉上の弟だからな、相当強いぞ?」

らな。

「それじゃあひやつひやと始めひやこおしゃうか、もう//シソン

「まあ待て。まずは上官から新入りへ出す二つの命令だ。言つ通り

おお、折角だから聞いておいたつか。強くなるためだからね。はやくはやくと少し急かしてみる。

「簡単なことだ。『死ぬな』、『死にそうになつたら逃げろ』、『そんで隠れる』。『運が良ければ隙を突いてぶつ殺せ』。な、簡単だろう?」

「それ全部で4つです」

それを言つと、リングドウさん自身も氣づいたらしく赤面した。やつぱり大丈夫かどうか不安になつてきた。ホントに強くなれるのかな……?

……でもこれつて、新人全員に言つてることは、まさかこれも計算のうち? そうだったなら、

地味に謀略家かもしない。たぶんないと想ひけど。

「とにかく、そのルールを守れば一人前の『ロッジドライター』になれるんですね?」

「ああ、命あつてのモノだからな。 それじゃあ、そろそろ行くとしよう。できるだけ静かにしろよ」

リングドウさんがゆつくりと歩んでいく。俺はその後ろをゆつくりと付いていく。そして、目標を視界に捉えた。そいつは、この世にいてはいけない、鬼の形相でそこに居て。

夢中で何かを食べているようで、こちらには氣づいていない。よく見ると、……金属の塊のようだが、よく分からぬ。

「……確かに、オウガテイル、でしたつけ。近くで見るとやはり迫力がありますね」

「しつ、黙つてくれ。できるだけ背後を狙うんだ。大抵のアラガミは奇襲が良く効くからな……」

少しづつ、目標に近づこうとする。足元に気をつけて、出来るだけ気配を消して、ただ音を立てないように進んで、……敵の背後に回り込むことができた。

「捕喰の方法は分かるな? 捕喰形態に切り替えたら一気に喰らえ」

それぐらい分かっている、たくさん訓練してきたと、心の中で

ボヤきながらも捕喰形態に切り替えて、……喰らう。黒い血のよつた液体が、ピシャッと顔に飛び散つて少したじろいだ。

だけど、それ以上に気分が高揚して、体が軽くなつたような気がする。訓練でもそんな感じになつたが、えつと、バースト状態だつたつけ。神機が活性化しているらしいからドンドン攻撃するといいそうだ。

「それじゃあ思い切つていきますから。リンードウさんは遠くでゆっくりお茶でも啜つてくれださいよ」

俺は調子に乗つてそんなことを口にしてしまう。訓練であれだけやつたんだ、こんな奴、一人でも片づけられる。片づけられなきや、……俺は強いゴッドイーターに、なれないんだ。

「本当に大丈夫なのか？ 後悔しても知らんぞ？」

軽い口は、当たり前ですよと言つた。

「……よし、分かつた。危険が迫つたら手助けに行く、それまでは絶対に手は出さないぞ。それでいいんだな？」

リンードウさんの問いかけに縦に首を振つて、俺はオウガテイルに『ノコギリ』を振りおろした。彼の手は、煩わせない。

「ちえつ、はずしちまつたか。次は当てる！」

突進をかわしてからのステップ、そして斬り払い。神機の刃が目標の足に入り込む。

……とにかく、どうでもいいことだが。俺がショートでもロングでもなく、バスターを選んだのにはちゃんと理由がある。ちなみにレキには一瞬で看破された。

『強そりだから、だる』

『な、なんで分かつたんだ？』

『おまえの性格からすればその答えしか思いつかなかつた。単純と

いうか、浅はかだな』

一発ぶん殴つてやつた。年上だからってなめるなよ、同期なんだからな！－ そしたらせりぱり殴り返された。痛かった。

「バスターの大技と言えばチャージクラッシュだけど、うまくいくかな」

そう眩きながら剣に力を込める。バースト状態のときは早く力が溜まるつてツバキさんに聞いたからな。自分に自信を持とう、絶対に決める ょし、決める！

「うおいやあッ！」

だが、惜しくもその一撃は避けられてしまつ。そしてがら空きになつた懐中掛け、オウガテイルは針を飛ばした。

「は、針だあ？！ そんなことデータベースには載つてなかつたぜ？！」

俺は針を辛うじてサイドステップで回避しつつもコンドウさんと目配せをする。あくまで、手を出さないでいるようだ。……要するに、自分で蒔いた種なんだから自分でどうにかしろってことか。……てか電話してる？ 電話してるよね！ なんでこんな時に電話なんかしてッ？！

すると突然、身体にえも言われぬ倦怠感が押し寄せる。バースト状態が切れてしまつたようだ。それを見計らつてか、オウガテイルの攻撃が激しくなってきた。

俺にしてみればとてつもなく危険な状態で、防戦一方、といった感じだが、傍から見ればあまりにも滑稽。舞台の上で踊る道化。そして込みあがるのはこんな奴にも勝てない、という無力さ。どうすれば勝てるか、といつ思考が緩慢になってきている。

「」のままじやどつにもならない、そう考えた俺は思考を回転させる。相手を足止めするには？ ホールドトラップ？ 駄目だ、仕掛けている場合じやない！ ならばさらに耐えるか？ だがスタミナが足りない！ どうすりやいいんだ、どうすりや！ 考えろ、考えろ、考えろ考えろ！

「えつと、えつと、そうだ、えつと、せ、閃光玉！」

慌てるな。スタングレネードだ、閃光玉じやない。自分にそう言い聞かせながら震える手先で何とかスタングレネードのピンを抜いた。そして地面に叩きつけて、急いで耳を塞ぐ。

敵が奇声を発し、よろめいた。チャンスだつてことは分かつてるけど、それで、それでどうするんだ、攻撃する？ それとも一時退却？ ああ、落ち着け、落ち着け落ち着け落ち着けお、ち、つ、けつ！！

「 わッ？！」

俺が狼狽えている隙にオウガテイルは飛びかかってきた。回避が間に合わず、俺はオウガテイルに押し倒される形で地に伏す。そして、その牙が左腕に喰い込んで、俺は苦痛な悲鳴を上げた。

「新入りイツ！」

遠巻きで見ていたリンドウさんがついに耐えかねて駆けつけた。そしてロングブレードでオウガテイルを斬り払う。再びオウガテイルからは体液が飛び出して、彼のロングブレード『ブラッドサービス』は真っ赤に染まる。……真っ赤な血と、青空の対比。そんな、どうでもいいことを考えてしまう。

そして、オウガテイルが倒れこんだ隙に、俺はリンドウさんに連れられてちょうどオウガテイル目標と反対の地点へ行く。そして俺は地面に倒れこんだ。

「リンドウさん。……思った以上ですね、あいつ……い、いだつ！」

死ぬほど痛いってほどの痛みじゃない。でも、擦り剥いた程度の痛みじゃない、……喰えるならば、包丁で指を切つたところに塩を塗りこんだような痛み。

強がつてた俺が馬鹿みたいだ。戦場は、そこまで生温くはない。この痛みを以つて、それは知らされることとなつた。

「とりあえず傷を見せる。……よし、これぐらいなら大丈夫そうだ」リンドウさんは包帯を取り出すと、器用に俺の腕に巻きつける。うまいですねと俺が言つたら、サクヤさんに教えてもらつたそうだ。そうか、サクヤさんは確か衛生兵だった。

「やれやれ……とりあえずこれでなんとかなるだろ。痛みは侵喰が原因だ、回復錠は持つべきだろ？ そいつを服用すればとりあえず侵喰ある程度は防ぐことができる。本格的な治療は帰つてからだ、今は我慢してくれ。

……今さつきは、一人で行くことを許したが、その結果どうなつたかは、分かるな？ 一人での戦闘は極めて危険だ。実戦経験のない奴がおいそれと行うのはよせ。……手遅れになられたら俺が困る。

俺は、お前らが所属する第一部隊のリーダーだからな。メンバー全員の命を背負つてる。だから、誰一人として欠かすつもりはない。新入り、お前らも含めて、な

……この人、リーダーなんだ。そして、俺は彼の意志の強さに、感銘を受けた。さすが、ツバキさんの弟、いや、さすがリンドウさんと言つたところか。俺の目標が、一つ決まったような気がする。彼のようなゴッドイーターになろう。彼よりも、上を目指そう。

俺は回復錠をポーチから取り出して一錠飲む。リンドウさんの言

うとおり、痛みが少し引いた。これなら大丈夫そうだ。

「よし、行けるな。今度は俺もサポートしてやる。 ところで

新入り、名前はなんだ？」

紹介したのに覚えてないのか、この人は。その辺がちょっとリーダーっぽないというか。このあたりはならないようこじようか、うん。

「睦月、ケイスケ、か。覚えた。改めて、よろしく頼むぞ、ケイスケ」

「分かりました、リングドウさん！」

と、グッドタイミングでオウガテイルは戻ってきた。それを見て俺たちは駆け出す。……と、リングドウさんにストップをかけられた。「？ なんですか？」

「二人で近接で戦闘を行うと、互いの攻撃が干渉しあうことがあるからな。後方支援を頼めるか？ 銃形態に切り替えてバレットを打ち込んでくれ。捕食した時のアラガミバレットを使うのも悪くないだろう」

そうとなれば話は別、俺は立ち止まって銃形態に切り替える。ちなみに俺の神機の銃バーツはアサルト。連射機構に惹かれたからだ。質よりも量つていうのかな。

確かに神属性以外なら何でもOKだったつけ。とりあえず属性は氷でいいから撃とう。……まず、バレットを選択する。そして、照準を対象に定めて、あとはリングドウさんに当たらないことを祈りつつ、俺は引き金を引いた。

氷の弾丸はまっすぐ、オウガテイルの胴体に喰らい付いて、軽く吹き飛ぶ。続いて捕食時に入手したアラガミバレットを装填する。そして、一発、二発、三発とぶつけた。その針のような弾丸、……いや、針そのものかもしれない。あやまたず、それらは全発アラガミ

に喰いついた。狙いは完ペキだな、俺つてサイコー！

「よし、いい感じだ。もうすぐ仕留められるんじゃないか？ とどめぐらいは気持ちよく決めたいだらう、もうここには相当弱っているから思いつきり決めてやれ」

俺はリンドウさんが言つていることを察して、剣形態に切り替え近づく。オウガテイルは起き上がるも、血のようなものを吹き出し再び倒れた（確か、ファンブルだつたつけ）。それを尻目に剣に力を込め、今さつきの痛みに対する恨みを少し籠めて……思いつきり、振り下ろしてやつた。

その一撃は、オウガテイルを真つ一つに切り裂いて、返り血を剣いっぱいに浴びせる。

もう、オウガテイルは動かない。既に、生命上に必要な活動を停止している。……それでもまだ生きているのがオラクル細胞。そう思うととても恐ろしい。

「よし、……任務完了だ」

「……………」

「……………」

「……………」

血まみれの手で笑つてゐる俺は狂つてゐるのだろうか？ それとも、俺を狂わせるこの世界が狂つてゐるのだろうか？ 武器を持つて敵を討つことが正義なのだろうか？

そんな難しことは、今はどうでもいい。ただ、俺は、勝利の余韻を味わうことを、楽しんでいた。

「あいたあ！」

「ん？ どうした、また痛みだしたか。それにしても、ここまで派手にやる新入りは見たことがないな。たぶん、おまえが一人目だ」嬉しいようで嬉しくない。そりやそうだ、褒めてるよつとは思えないし。

……と、ヘリが来る。いつの間にかリンンドウさんが任務完了の連絡を取っていたようだ。

「ところでケイスケ。コアは回収したか？」

「…………あ」

辛うじて死体が残っていたからさつと捕食してコアを回収する。ところが本来の目的はこっちなのだから、忘れては困る。これで万事OK。俺たちはヘリに乗り込んで、アナグラへ帰投した。

## 0821 嘘きの平原

「榊レキ」

吹き荒れる嵐、気候は最悪。ジメジメとしている上に、少し肌寒い。雨足はそこまで強くはないが、俺たちの服を濡らすには十分の量である。

「橘さん、」

「あ、私のことはサクヤでいいから。それで、何かしら

「それじゃあサクヤさん。……雨が降つてない時の方が、安全に任務を進められると思うのですが」

俺がそう言つと、「ウタが俺を小突く。なんだってんだ?」

「知らないの? ここ、ずっと雨が降つてるんだよ」

「そうなのか。……それは初耳だな」

討伐対象のアラガミについてはしっかりと調べたが、肝心のフィールドについて調べるのを忘れていた。やはり俺は詰めが甘いなど、しみじみ感じる。

「それにしても変わってるね。時々このあたりで中継行われてるからさ、いつも雨が降つてることぐらい知つてたけど……」

「悪いが、新聞は経済に関するもの以外は取つていない。あと、テレビはもう家になり。……正直に言つと、昨日エントランスで久しぶりに見たときは小さい頃が懐かしくなつた。本当に、あの頃はよかつたと思う、…………あの頃は……」

場の空気が徐々に重くなつていくことをその身に感じ、サクヤさんが咳払いをしてくれるまで、俺の中はどうりとじっていた。

「あ、これはその…………すみません」

「とにかく忘れる、もうすでにミッションは始まつてゐるわ。マップを一度確認してみて」

俺はポーチにあらかじめ入れられていたマップを取り出して、確認する。

「この矢印が、俺たちですか。腕輪のビーコンで位置を表示しているんですね」

「そうよ。よく知つてるわね、結構調べたんじゃないから」「物覚えはいい方なので、あまり調べたわけではないが、一応『ゴッドイーター・ハントイングガイド』は一通り目を通した。……操作説明書ではないのは確かである。

「じゃあ、この赤い丸はなんだろ?」「

「これがターゲットのアラガミ。ほら、ここから見えるでしょう?」「マップだとあっちの方向だから、」

俺たちが向いた方向の先には、紡錘状のアラガミが見えた。このマップは常に腕輪(=装着者)から視覚情報等を受信しているため、アラガミを視界内にて視認することができた場合、もしくは一定距離以内にアラガミが接近した場合、マップに表示される。逆にいえば視認できなければ場所は分からぬ。

その場合は超視界錠という薬品を使用するか、もしくは同等の効果を持つスキルのついたパートを装着することで、腕輪の精度が一定時間向上するため、フィールド全体にアラガミの位置を確認することができる。

「……おーい、レキ、レキ!」

「ん? なんだよ」

「ん、じゃないよ。何ぼーっとしてるんだよ」

「ウタに呼ばれて我に返る。つい講釈垂れてしまつたようだ。しかし、誰に話していたんだ、俺は?」

「視認できる限りでは、渦を中心として三時の方向に一体、九時

方向に一体。・・・目標は三体だつたよ」

「渦の裏に隠れてるんじゃないかな、見えないだけで」

恐らくその可能性は高いだろう。そして、心身ともに準備はできただので俺たちが行こうとすると、サクヤさんが止めた。

「これはリンクドウの受け売りなんだけど、一応言つとかなきやね。えつと、……『死ぬな』。『死にそうになつたら逃げる』、『そんで隠れる』。運が良ければ……えつと、なんだつたかしら。運が良ければ?」

しばらく考えた挙句、サクヤさんは携帯端末を取り出して通信を始める。誰かと話すみたいだ。

「……もしもし、リンクドウ? エツと、運が良ければなんだつたかしら? ……だから、リンクドウがいつも言つてる、……そういう、それよ。最後の運が良ければの下り。……そう、分かったわ、気をつけてね」

そう言って通信を終了する。

「運が良ければ隙をついてぶっ殺せ、ださうよ。リンクドウじいわね、ほんと」

リンドウ上官と話していたのか。といつことは、まさか既にケイスケたちは任務を終えているのか？……へ、いつしかおれん、わざと俺たちも済ませないと。

焦れる心を抑えて、次にサクヤさんは連携について話し始める。  
「あなたがアラガミに張り付いて、援護射撃をコウタと私で行う。回復の方は私に任せて、しつかりカバーしてあげるわ」

「基本的に俺はバレットの方を多用しますが、剣の方も大丈夫ですよ」

俺の神機の刀身はショート。手数でカバーしつつ、消費したオラクルを回復する。そして銃身はスナイパー。射程もあり、貫通性能も他の銃身に優っている。文句無しでこいつが一番だわ。

「それじゃあ攻撃を交えつつも後退して撃つ、要するにヒットアンドアウォイだけど、それもいいわね。どちらでも好きな方で構わないわ。……さて、長話もおしまい、本気出していくわよ。時間はまだまだ余裕が、」

彼女が最後まで言い切る前に、アラガミの声が木霊する。……その声は禍々しいが、たった三体だし、小さい。……しかし、サクヤさんの顔が曇る。

「……ちよつと急いだ方がいいかもしれないわね。リンドウ的に言うなら、やばい奴が来ているっていうのかしら」

……どうやら、アラガミの声はこいつらではなかつたようだ。その、『やばい奴』が来る前に片づけないとまずいらしく、「準備は万端だよ、サクヤさん

「いつでも出られます」

そしてサクヤさんは笑みを浮かべる。それが合図だった。

「任務開始！」

〔神レキ〕

「あと、一体だな」

「えつと、どっちだる、……あれ、あれ？」

「コウタは突然マップを見て焦っているようだ。あっちを見たり、  
こっちを見たり。一体どうしたというのだろうか。

「どうしたの、コウタ？」

「いやその、マップが訳の分からないことになつてて」

自分のマップを確認したが、別に変なことになつてている様子はない。コウタのマップを見ると、……ぐちゃぐちゃで、何が何だか分からぬ。

「まさかコウタ、壊したわけじゃないよな？」

「違つて！ 確か、このコクーンメイデン……だけ。背後から攻撃してて、いきなり助骨が飛び出してきたのを喰らつた後から見えなくなっちゃって」

「コクーンメイデンの肋骨には神経性の毒が含まれているらしい。  
主に視覚に影響するらしいが、このような形で現れるとは驚きだ。  
「これはきっと、ジャミングね。抗ジャミング剤は持つてるかしら  
「いや、そもそも渡されてないからどういうものか分からないよ……」

「それなら自然回復を待つしかない」と、サクヤさんは言つた。溜め息をつくコウタに、俺たちがカバーするから少しの間我慢しろ、と励ました。

「……ときには『ウタ、一応言つておぐが。……助骨じゃない、肋骨だ。読み間違えないよう気をつけることだな』

「ウタが信じられない、と言いたげな顔をする。まあ読み間違いは誰にでもある。

「さて、残すは後一体。『やばい奴』が来る前に早く片付けよう。捕食して十分にアラガミバレットも溜まっているから、有効活用させてもらひとしようか。サクヤさん、後ろは任せましたよ」

「了解よ」

俺は軽い足取りでコクーンメイデンに近づく。向こうもこちらに気づいたようで、ジャベリンを飛ばしてきた。それをステップで回避し、背後をとる。

4回の切断攻撃からの銃形態への変形、そしてレーザーを1発ぶち込んで、反動で全方位攻撃をかわす。ここまでは思惑通り。さて、あと何回繰り返せば倒れるだろうか？

その時、背後から自動ホーミングレーザー弾とホーミング通常弾が、数発ずつ飛んでくる。援護射撃か、これはありがたい。まあ、次はどう攻めるか？

……コクーンメイデンは攻撃してこない。ならばこちらから仕掛けよう。まずは、ジャンプ3回斬りからの急降下突き、再び3回斬り、そして捕食。バーストモードに移行して、さらに攻撃の手を早める。為す術もなく、コクーンメイデンは腹を開いてダウンする。

さて、俺ばかり活躍するのは気が引けるな。

「『ウタ！ リンクバーストは知つていいかッ？！』

「うん！ それがどうしたのっ！？」

俺はジャベリンを2発、受け渡す。『ウタはそれを受け、リンクバースト状態になつた。

「これが、リンクバーストね。初めてみるけど、『ウタ、大丈夫？』

「はい！ よおし、みなぎつてきたーーー！」

変に調子に乗り始める。それだけ、リンクバーストの力は恐ろしく強大なのだろうな。そして、『ウタは力を込めて、引き金を引いた。

「すつ」この喰らえーっ！！

最早頭のねじが緩みかけているレベルではあるが。『濃縮ジャベリンレベル2』は天を貫き、コクーンメイデン曰掛けで地ごと貫く。……その一撃でコクーンメイデンは力尽きた。

「すごい威力だな、……間近で見ていて、恐ろしい感じのほどだ」それにしてもこのコウタ、ノリノリである。俺は一通りの捕喰を済ませて、迎えのへりを待つことにする。

「もうすぐ来るみたいだけど。…………といひでサクヤさん、さつき言つてたやばい奴つて何？」

「いずれ戦わざるをえない時が来るかもしれないから話しておくれ。…………そいつは、ここ嘆きの平原にしか出現することはないの。その名は、ウロ、ヴォロス」

名前からして、おどろおどろしい。肝心の見た目の方はどうなのだろうか。

「体躯は悠にこのフィールドの大部分を占めるほどね。高さもそれなりにあるわね」

「つ、大きすぎる……！ 確かに、そのようなアラカミが出たらひとたまりもないな……」

出会つたら即刻逃げなければ危険だ む？ この赤い小さな四角はなんだろうか？

「この四角？ ターゲット以外のアラガニよ。……それってまさか」

俺は、いや、たぶんここに居た全員が何かに祈つた。予想が外れているようのこと。しかし、やはり神なき時代に願いを聞くものなど、……いないと言つて思はれられた。

ドズン、ドズンと、背後から地鳴りが響いて、足がガクツとなる。まさかとは思つたが、ゆっくりと、ゆっくりと俺たちは振り向いて、振り向いて振り向いて振り向いて。

その体躯は確かに巨大で、俺たちの手に負えないことは明白であった。

「ヘリはまだかしら。もつそろそろ来てくれないと、困るわね」

「リングドウさんは確かなんて言つてましたっけ？ よし、『ウタ。言つてみろ』

「うん。逃げるな、」

「それは違う」

逃げなきや死ぬだらうが。つと、そうじつ言つてる隙に、ウロヴオロスはこちらへ向かつてくる。太刀打ちできるわけがない。だから俺たちはリングドウさんの受け売りで、戦略的撤退を決め込んだ。地面から襲い掛かる触手のようなものを避けながら走る。どこまでも、どこまでも奴は追つてくる。幸いあまり速度はなさそうなので円形状のステージをレースゲームのごとく駆け回る。時々方向転換をしながら逃げ続け、目が回りかけた時に、待ちわびていたヘリが到着したのが確認できた。

「はあ、ふう、……やつと来たみたいね」

「ハア、ハア……た、助かつたあ～」

「……がふあつ、げほつ、……や、……やつと、ひじまつ、……き、來たかつ……げほつ、ごほつ……」

「レキ、大丈夫？ 息が大変なことになつてゐたいだけど

まず「ウタが、次にサクヤさんはコウタが手助けしてもらつて、最後に俺は一人に手伝つてもらつて（実質引き上げてもらつたわけだが）、高台に上る。そしてヘリは平原を去つた。

ヘリが飛び立つて、よつやく息が整つたところで、俺は思ったことを口にする。

「いざれ。……いつかは分からぬが、いざれ倒すべき相手になることは、間違いないな」

「ええ。そのためには、たくさん経験を積む必要があるわね」  
「いつか、あいつを倒して、答えを見つける。俺が選んだ道が誤つていなかつたことを証明してみせる。」

「ひくしょい！」

と、コウタがムードをぶち壊す。というか、少し寒いな。吹き込む風が冷たい。

「濡れたままでいると風邪ひくわよ。はい、タオル」

サクヤさんにタオルを渡された。これはありがたい。……それでも、ヘリコプターに乗つたのは今日が初めてなのだが、ドアがこんなに簡単に開くとは思わなかつた。下を見ると本当に生きた心地がしない。このまま落ちてしまつのではないかと、少し不安になる。

「今どの辺りにいるのかな？ うわっ、瓦礫ばっかりでよくわからないや」

「コウタがそう言つたので俺も窓の外を見てみることにする。コウタの言つたとおり、よく分からぬ。この地に本当に昔、人が住んでいたのかすら、疑われるほどである。

ん。それにしても、……気持ち悪いッ……。

「とにかく、みんな畠立つような怪我もしてないし、よかつたわ。次もこの調子でいきましょうね」

「うん、それじゃあ次も頑張ろっぜ、レキ あれ、どうしたんだよー、レキ？ わーい、大丈夫？」

そしてしばらく、俺は乗り物酔いの恐怖と苦痛を味わうこととなつた。

## 2 · OPEN FIRE (後書き)

さてさて、ようやく新型2人が初任務ですね。サクヤさんに今回  
は協力していただきました。ありがとうございましたー。

この流れ、次回はまさか例の人物が登場するか！？ さて、生き  
るか死ぬか、全ては頭上にかかっている！！ 次回、『華麗なるエ  
リック伝説！』、お楽しみに！

冗談です、すみません。しかし、次回には登場するはず。もちろん  
任務へはあのキャラも同行するからね。あとは新型キャラももう  
一人投入すれば豆乳鍋の出来上がり。  
それでは次回まで。

\* \* \* \* 輸送用ヘリ内

〔Z／A〕

……オレは目を閉じる。……何も見えない。ただ、バラバラとローターが高速で回転する音だけしか、聞こえない。……本当に退屈だ。

オレは、操縦士に現在地について質問する。彼曰く、現在愚者の空母の上空を通過中らしい。目的地まではまだまだのようだ。仕方なくオレはヘッドフォンを耳に当てる、再生ボタンを押した。  
……だけれども、邪魔な音は消えない。

やつと、戻つてこれた。長かった。本当に長かった。何度悔やんでも、この心が癒えることはないだろう。謝つてももう遅い。……オレが強ければ、あんなことにはならなかつた。

これからやることは、復讐。ただの自己満足。…………それでも、『彼ら』の弔いになるのなら……自らの手を血に染めることは厭わない。それが、『オレタチ』の罪だから。

不意に機体が揺れる。俺は目を開いて、辺りを見渡した。

……どうやらアラガミの襲撃のようだ。ザイゴート数体、それらを統率しているのはサリエル、いずれも墮天種ではない。ヘリに備え付けられた対アラガミ迎撃用オラクル銃も、ここまで多ければ相手にできやうにない。

死の覚悟？ そんなものは必要ない。」」」でオレが、オレタチが死ぬはずなど、ないのだから。

……『彼』はこんな時でも悠長に寝ていられる。そして、サリエルのレーザーが操縦士を貫いて、ザイゴートたちは機体前方を一斉に捕喰する。

動力を喪失したヘリは重力という物理法則に従つて、殺伐とした大地へ、空母へと落下していく。

この高さから落ちてしまえば、間違いなくこの地に肉片一カケラ余さず捧げることになるな。回避するには、タイミングよくヘリから飛び降りる必要があるだらつ。運が良ければ骨の一、一本で済みそうだが、タイミングを外せばオレタチはまず死ぬな。

と、『彼』がようやく田を覚ましたようだ。そして、事態の深刻さに少々焦つているようだが、幸いにもオレタチは、身動きがばっちりとれる。

そして、地上が見えてきた。オレが地上に近づいてくるのが、地上がオレにぶつかって来ているのか。そんなことはどうでもいい。ただ、オレタチは生きるために……死ぬために、生きている。寿命を削つてまで、生きて、死のうとしている。

「 本当に、莫迦野郎だよ、……オレタチは」

本当に馬鹿だなあと、『彼』に嗤われる。別に構わない。生きるためなら、莫迦者と罵倒されようが、痛くも痒くもなんともないからな。

そして地上がオレの目先10メートルほどになる寸前に、オレタチはへりから飛び出した。舞い降りるようになんて、そんなにきれいには降りられるはずがなく。だから、どしゃっと足から、そしてガクッとへたり込んで頭を突っ込んで、……ガシャンと大層な音と

ともにヘリが落下して、それでおしまい。

そして、破れた燃料ボックスに火花が散り、大炎上。あとはこの血塗れた体がどれだけ持つか、そして誰かがあとどれぐらいしたら来るかだが。

「あの、何か落ちる音がしませんでしたか？」

「そうか？ 別にそれらしきものは……」

オレは運がいい。既に誰かが近くにいたようだ。だから、安心してオレは四日ぶりの睡眠をとることにしよう。それじゃあお休みなさい、また誰かが起こしに来るまでオレは寝る。というか、頭を打ち付けた衝撃で、意識が朦朧としていて、うつむひつらとしてきた。

「だ、大丈夫ですか？！」 えっと、そうだ、……

……騒がしい奴らだな。そう思ったのを最後に、意識を保つている」とが耐えられなくなつて、オレは再び目を閉じた。

0857 自室

### 【睦月ケイスケ】

帰投して、報酬を頂戴して、ツバキさんの話を聞き流して、病室で手当をしてもらつて、エレベーターで新人区画まで行って、ドアを開けて、……ようやくベッドに倒れこむ。とっくにスタミナは切れかけていた。まあ少し休めば回復したわけだが。

朝食は既に摂つたし、1時間後にはサカキ博士のありがたいお話があるそうだが、それまですることは一切ない。眠気があるわけでもないから、とりあえずその辺をぶらりと歩くことにする。ついで

に、あこがれ回つところのものいいだろつ。

そして部屋を出て、……新人区画の静けさに、少し不安を感じた。とりあえずエントランスで時間をつぶそう。そう思つて、俺は自室の扉の鍵を閉める。

0900 エントランス

### 〔睦月ケイスケ〕

ソファーで座つて窓いでいると、誰かが来た。えつと、確かに彼の名前は タツミさんだつたつけ。

「ん？ ああ、新入りの。ケイスケだつたな、確か」  
名前を覚えてくれて助かつた。そして、俺の腕の傷を見て少し心配しているようだ。

「大丈夫ですつて。ただのかすり傷かすり傷、あいたた」  
あの程度の侵喰ならものの数日で完治するらしい。だがあまり無理をしないことが大切だそうだ。じもつともである。

「そういえば、ここへ来た時からずっと気になつてたんですけど。そちらの女性は？」

受付にいる女性だが、彼女は何をしていて、誰なのだろうか。タツミさんが答えようとすると、彼女が直接答えてくれた。

「私はここフーンリル極東支部のオペレーターを務めています、竹田ヒバリです。ミッションの受注や外部・内部からの通達などは私がすべて承つております。何かあつたら気軽に声をかけてくださいね」

ヒバリさんの顔を見る。そして、タツミさんの顔を見る。  
そして、またヒバリさんの顔を見る。

「……いや、ないか」

「何がだッ！」

タツミさんに突っこまれた。そういう反応をしたってことは、やつぱり一人の関係つて、

「ん？ あ、はい。……そうですか、分かりました。それで

は。……どうやら残りの一人も帰ってきたみたいですよ。ちょっとした災難に遭つたみたいで

「災難？ やばい敵みたいなのが出たとかそんな感じかな……」

俺がそういうと、どうやらビンゴだったようだ。ウロ何とかつていうアラガミに追つかれられたらしい。そりや災難だ、よく分からぬいが。

と、ゲートが開いてサクヤさんとあいつらが入ってくる。

「くっ、やはり既に帰っていたのか。しかし、俺たちがミッションに出でいた場所の方が遠いから当たり前だがな」

何負け惜しみみたく言つてるのさ。

「あれ、怪我してるみたいだけど……大丈夫？」

「まあ、別に軽いケガだし、つば付けときや治るわ」

そして、サクヤさんがツバキさんとのじろく一緒に報告に行きましょうと声をかける。そして、一時的だが別れた。同時にタツミさんも自室に戻るよつののでエントランスから離れる。

カタカタとキーボードを打ち雑務に追われるヒバリさんと、ソファーに座つて暇を潰している俺。打鍵音と、自動販売機とターミナルの稼働音以外、何も聞こえない。……そして、ピリリと連絡が入ると同時に、リンドウさんが外から戻ってきた。どうやら煙草を吸つていたようで、少し煙臭い。

「ソンドウさんは俺に、お疲れさんと言った。だから俺もお疲れ様でしたと返した。

「で、今回のミッションはどいつだつた？」

「あ、えりと。……やつぱり、頑張らなきゃなー。あと、自信過剰

にも注意みたいなどいろで、

そして彼は、気楽に頑張りいや、と励ましてくれた。気楽にできればここまで苦労はしないんだけどなあ……。

と、通信を終えたヒバリさんの顔が険しくなった。

「どうしたんだ、ボーアフレンドと喧嘩でもしたのか?」

「そんなんじやありません。……地下の対アラガミ装甲が破損していたようなんです。何か良からぬものが入ってきていなければいいんですけど……」

良からぬもの。まあアラガニの」とで間違いなさそうだな。

……リンドウさんも自室に戻るようだ。またエントランスは俺とヒバリさんの二人になつてしまつ。さすがにいつまでもエントランスで時間を潰すのは不精だと思って、俺も自室に戻つて退屈な時間を作つて過ごすことにする。

「ん？ エレベーターが来ないな」

壊れてしまったのだろうか。しばらく待つてみたが、やはり来そ  
うこない。

技術開発部に連絡入れたましょーか？

「ああ、そうしてくれるとありがたいが  
たみたいだ」

「うーん、何か嫌な予感がする」

そういうながらドアが開くのを待つた。……そして、ドアが開い

たので中に入らうとする。

「あれ？ なんだこいつ」

「けしのようなドでかい何かがぱつんと一個。リングドウさんは俺の腕を引っ張つてそいつから引き離す。そしてドアが閉まるとい、…」

「鋭い棘のようなものが、金属のドアを貫いた。

「な、なんだあれ、も、もしかして、あ、アラガミ……？」

「ああ。あいつはコクーンメイデン。まあ、小型のアラガミだから脅威は小さい。だからと黙つて油断していると痛い目にあるから、気をつけろよ」

そしてリングドウさんが神機を持つてきて、サクッと倒してしまつ。ちなみに、こいつ「コクーンメイデンは、一体出来たら十体は出るから」。こいつがまだ九体はいるかと思つて、少しそうとする。

忘れてしまつた方がよさそうだ。とにかく、浴室に出でないことを祈る。

0948 Hシトランス

【神レキ】

「なんだというんだ、怖いとこうべきか心臓が止まりかけたというべきか……」

「寿命が一、二年縮んじたよ……」

ツバキ上官と話していると、突然間からぬつとコクーンメイデンが生えてきた。ツバキ上官がサンダバッグよろしく殴つたらじばらぐ氣絶してしまつたようだ。ツバキさんって本当に人間なのだろうか？ 無論、そのあとは俺の神機で駆除しておいた。

「気を付けてくださいね、まだいるみたいですから」

えっと、オペレーターの……ヒバリさんだ、彼女はそう言った。

また出でたらひがいとするのには間違いないな。

「アーニャ、アーニャ、アーニヤー、アーニヤーをやめていたんだが、今せっせとノルだのつか」

「あこがれだつだよ？」

コウタに聞かれたので、彼について語ろうと思ったが、それは許されなかつた。

耳をつんざく高周波。そして余分に聞こえる低周波が鬱陶しい。  
スタングレネードに比べるとはるかに劣るが、それでも少しきつい。

「俺じゃない。それにしても今の声は……まさか……」

聞き覚えがあるというか、昔は何度も聞いていた、あいつの声に間違いないだろ？

そして『彼』は、エレベーターから飛び出して、少し息を切らした様子でした。

「…な…なぜ華麗な僕の部屋に…」  
――ケーンメインかしるんだ?

「ウタの頭に疑問符が乗つかった。おそらく『華麗』の部分に引つかかっただのだと思われるな。

?  
「久しぶりだな、フォーゲルバイデ。傷だらけの満身創痍でいたか

ちょっとした再開のあいさつだ。意趣返し、いや、ここまで来る  
とわざとらしいだけだが、傷一つなく無事でいたか、と意味で言つ

た。

「な、君は神っ！ なぜ君がここに そ、その腕輪はっ！！」  
わざわざしつかり見えるようにて腕輪を見せつけてやる。驚きつぱりが懐かしくて、そんな彼が見れて少しうれしかった。

「今では俺はお前の後輩だがな。だけどよ、昔と変わらない関係でいようぜ」

そういうと少し機嫌がよくなつた。すぐ調子に乗るとこれだ、お互い様だが。まあ憎めないからよしとする。

「ウタが少しこちらを見ている。 彼とは大抵インフォーマルな話し方をしているから、意外だつたのだろう。

「知り合い？」

「ウタが俺に訊いてきたから、俺はエリックに自己紹介を促した。「僕はエリック・エリック・デア＝フォーゲルヴァイデ。もちろん、君の上司であり先輩だ」

「こいつとは昔からの付き合いでだな、……まあ正直言つちゃあ腐れ縁なわけだが」

たまたま家が近所で、たまたま親同士の付き合いが多くつただけだ。だが、たまたま遊んでいたわけではない。お互い遊び相手として十分気に入つていた。もつとも、年齢が近かつたという理由もあつたわけだが。

昔は、射撃勝負と称してモデルガンを二丁持つてきて、缶や瓶を撃ち合つたものだ。ちなみにほぼ互角だったが、勝つた回数は微妙に俺のほうが多い。

ときどき友達全員で集まつてサッカーをしたが、知識だけの俺は、全くダメダメだった。こいつにはいつも負かされたものである。エリックシユートは俺たちの中では『最強の必殺技』だったわけだ。もう一度聞いてみたいものだ。

「とりあえず、よろしくお願ひします、……えつと、」

「僕のことはエリックと呼んでくれて構わない。もしミッシュョンと一緒に出る」ことがあつたら、露払いは任せたよ」

相変わらず上から目線である。そしてプライドも人一倍でかくなつてゐみたいだ。でも、変わらないでいてくれて、少し安心した。

「……ところで、一つ聞いていいか？」

「ああ、構わないさ。何でも聞きたまえ」

フォーゲルヴァイデが入隊したとき、窓の外からその様子を見送つた（直接見送りたかったが、『勉強の時間』のおかげで許されなかつた）。だが、一緒に、近所の『あのガキ』がいるのを見た。そして俺は理解した。あのガキも、入隊するのだと。

「あのガキ、どんな調子なんだ？」

「あのガキ……、あ、ああ、彼のことか。元気そうだよ」

フォーゲルヴァイデは、少し言葉を濁す。コウタは『あのガキ』が誰か分からぬようだ。俺たちだけの内輪話だから仕方ないか。

と、そこへダルそうな顔をしながらケイスケが現れる。

「あー、やっぱ自室は退屈だーッ！ お、レキ、コウタ、……と、こつちは誰だ？」

「僕はエリック、エリック・デア・フォーゲルヴァイデさ。君の先輩で、彼の知り合いさ」

簡素な自己紹介を済ませた（これでケイスケが納得するかどうかは別として）エリックに、ケイスケは握手を求めた。

「君も、僕を見習つて華麗に戦つてくれたまえよ？」  
そしてエリックとケイスケの手が触れる。

が、ケイスケの手は不意に払われた。誰に？　ああ、『あ

のガキ』以外の誰でもない。

「師匠の弟子は、俺だけだ」

……無論、フォーゲルヴァイデがこいつを弟子に取つてゐるわけではない。こいつの思い込みだ。

「ヨシシグ。……まだ君を、弟子に迎えてはいないし、弟子にするつもりもない」

「なら、今すぐ弟子にしてください。師匠のその、華麗なる伝説に俺は、魅せられてしまった！　だから俺は、俺は師匠の弟子なんです」

何を言つているのかさっぱりだ。こいつ、俺が見ない間に一体どうしてしまったんだ？

いや、彼のフォーゲルヴァイデに対するあのような態度は、今に始まつたことじやない。彼は昔からそつたた。誰彼構わず見下しが、フォーゲルヴァイデだけには、いつも尊敬の念を込めて接していた。実際、当のフォーゲルヴァイデもこんな感じ（いや、ここまで酷くはなかつたか）だつたせいもあるのだけれど。

しかし、ここまで彼が歪むとは……一体俺の居ない数年の中に、何があつたとこりうんだ？

「何度も断つたじゃないか、確かに僕は師となる器であると自負しているが、君も僕を師にあおぐ器がある！　だが、君と僕とでは方向性が全くと言つていいいほど違つ……　すまない、どうか、華麗なる僕を許してくれたまえ……」

何とも思い上がりである。少々自惚れすぎでないか？　……たぶん建前だな、建前に違ひない。

そしてじばらぐ経つて、ギリリと歯ぎしりが聞こえた。彼は背を

向ける。

「 絶対に、弟子になりますから。師匠」  
そう言って、Hレベーターを待つ。そしてケイスケは問う。

「 どうして彼を弟子にしてあげないんだよ？ 形式上でも弟子にするって言つといたほうがよかつたんじゃ……」

「 彼の神機はアサルト。それに対して僕はブラストを使つて数多の華麗なる伝説を作り上げた。僕には、彼に教えることなど、……教えられることなど、一つとしてないのだよ……」

一瞬、奴の体が強張るのが見えた。……そしてドアが開いて、吸い込まれるようにして彼はエントランスを去つた。

「 なあ、あいつ誰なんだ？ 華麗なエリックはヨシッグって呼んでたけど」

『華麗な』を付ける必要性について問いたいが、質問を質問で返すのは失礼にあたる。

「 前田ヨシッグ。ケイスケたちと同じ年だ。フォーゲルバイテと一緒に彼は入隊し、今まで戦つてきた。……さすがに、俺は彼がここでどのようなことをしたかは知らないがな」

フォーゲルバイテに彼について聞こうと思つたが、主観的になつてしまいそุดから、あまり会話をすることのないと思われるオペレーターのヒバリさんに聞いてみた。

「 え？ …… そうですね。彼に私もよく苦労させられます。何かと難癖をつけることもあれば、ないものねだりをする。オペレーターは機械のように黙つて人に言われた通りのことをしていればいいと言われたこともありますし……」

彼らは、彼がどのような性格をしているか、よく分かつたようだ。  
「 恐らく、奴はこの支部のほとんどの奴を敵に回してゐる。親の七光とは言ったものの、時代錯誤が甚だしいな」

「ななひかりつて、なんだそりや？」 臨兵闘者皆陣烈在前？

「ケイスケ、それは九字だ」

「なんというマニアックなものを……！」 ジャンジャとこつものに興味があるのだろうか？

「必殺技みたいなものだよ、必殺・セブンスパーク！ とか」

……呆れてものも言えない。ネーミングも少々陳腐だ。

「華麗な僕が説明しよう。ヨシシグの祖父は、ここが日本と呼ばれていた頃、内閣という政治機関のトップ……要するに大統領のようなものだった」

「ダイトーリヨー！ ひえーっ。そんな奴の孫だったとはびっくりだぜ。……で、あいつが偉ぶつてるとどういう関係があるんだ？ それを聞く限りじゃ、天狗になつてるとしか思えないな」

「要するに、そういうことだ。もう、この国 いや、この世界に、トップに立つべき人間など、居ても居なくとも同じようなものだからな。実質ここが日本だとすると、トップはここアナグラの支部長だらう」

「…………、もうすぐ博士の講義の時間だよ。研究室へ行かないとな」

「それじゃあ、また後でな」

俺はフォーゲルヴァイデに手を振つて、ラボラトリへと向かう。今日の講習はどんな話になるのだろうか？ 楽しみで仕方がない。

一服して、戻つて来てみると少し騒がしいことになつていた。なにやら輪のような人だかりができている。

「どうしたー、何があつたんだ？」

サクヤがこつちに気付いたようで、見てないで手伝いなさいよと言われた。

「いや手伝えつたつて。一体何があつたんだ？」

すると当事者のカノンは、何があつたかを短絡的に口走つた。

「そ、空から、空から降つてきたんですよッ！」

空から降つてきた？ 新種のアラガミか？ それとも、救世主か？ そんなものはいなか。

なんとか見ることが叶つたわけだが、一人の青年が倒れていた。

……まだ幼さが残つていて、子供であることは間違いない。そして、腕輪を見る限り神機使いであることも分かつた。

「えつと……その神機使いは誰だ？ その降つてきた奴にでもやられたのか？」

とりあえずぐつたりとしている彼を指して尋ねる。降つてきたものにぶつかるなんて、相当運が悪いんだろうな。

「違いますつて！ だから、彼が降つてきたんですよーー！」

「何言ってんだ、冗談はよせやい」

「リングドウ、これは本当の話よ」

サクヤにたしなめられ、とりあえずはまず彼女の話を聞くことにする。

彼女が言つには、フェンリルが所有する輸送用ヘリの残骸のそばにいたそうだ。アラガミに撃墜されたようで、近くにいたアラガミはすべて掃討したらしい。

操縦士はすでに捕喰されていたが、彼はこのとおり無事だった。そこへヒバリが新しく入った情報を話す。

「ベリーポーターは操縦士のIDから南米支部のものだと判明しました。この青年についても現在問い合わせています」

さすがここ極東支部のオペレーター、対処が早いな。自分のことのように思えて鼻高々だ。

「リングドウ、彼を病室に運ぶのを手伝ってくれるかしら」

そういうのは若い奴に任せておけばいいものを。……まあ、俺もまだまだ若いが。しかし、直々に指名されたのだから仕方ない、諦めて手伝うことにする。

「妙に厚着だな。確かに南米地帯の気候は著しく暑いと聞いたが、脱がせてやつた方がいいんじゃないかな」

「確かにそうね。あら」

上着を一枚めぐると、もう一枚パーカーを着ていた。それはいたつて普通である。……だが、そのパーカーには、グルグルと何重にも『鎖』が張り巡らされていて、鎖のそれぞれに錠前が一、二、三とついていた。それは、喻えるならばそつ、『封印』。

「近頃のファッショńって、変わつてますね」

「これはファッショńじゃないと思うわ。……ほら、ソーマも手伝つて」

「断る」

本当にこいつは。……だが、彼も人の身だ、いつか打ち解けてくれるに違いない。

彼が『死神』と蔑まれる由も、……終わつてくれるに違いない。

## 【睦月ケイスケ】

「遅いな」

「なあにがちょっと出でいくだ！ 大人のちょっとはこれだから信  
用ならない！」

早くも痺れを切らした俺は研究室を出る。そして、たくさん人が  
集まっている病室を確認しに行つた。

「ちょっと待つてよケイスケ、講義嫌だからラッキーって言つてた  
のはどこの誰なんだよー。」

「こいつの心は秋の空並みに変わりやすいな。  
ん？ こいつ、

誰だ？」

頭に包帯が巻かれていて、足にテープニングがされている。そして、  
左腕に腕輪が確認できた。

「神機使いか。でも異動の話とかは一切聞いてないな。博士は知つ  
ていたんですか？」

「ん？ ああ、彼の異動かい？ 知つているよ」

「知つていたんですか。俺たちには伝わつていなかつたんですが：  
…。それに、このような大怪我をするなんて」

異動の際にこんな大怪我をすると言えば、やはりヘリガアラガミ  
に襲われたのだろうか。よく助かつたな、すごいすごい。

と、リングドウさんが姿を現した。

「上様、もとい支部長が伝え損ねたみたいだ。しかし、どこか様子  
がおかしかつたようだが……」

なんだ、そういうことか。宣伝部長もおっちょこちょいだな。そ  
して、リングドウさんは他にも彼についての情報を話した。

彼の名前はウイラード・カーライル・シャムロック（長い名前：

…）。愛称はウイル（ウーチャー）で短くて言いやすい。仲が良くなつたらぜひひそう呼びたいな）。性別は男（見りや分かる）。

俺とレキと同じ新型神機使い（同じ支部にこんなに居ていいのか？ 確か新型は稀少とか言ってたけど）。ただし腕輪が左についていることからサウスポーのようだ（珍しいな）。

異動前は南米支部配属（確かすごく暑いんだったつけ。俺だったり絶対行きたくないな）。相当な戦績を収めていたようで、彼を手放すのは相当惜しかつたようだが、彼が行くことを望んでの決定だそうだ（一度どんな戦い方が見てみたい）。趣味は音楽（音楽プレーイヤーには俺が聞いたことのないような曲ばかり入っている。えつと、これは何語かな？）と、寝ること（寝ることが趣味つて……）。

「それで、やっぱケガの影響で意識を取り戻さないでいるのかな見る限り血色はよこようだが。……でか今一瞬いびきが聞こえたよ」

「ただ寝ていいだけだ。あちひらさんの話によると、ここ四日間ぶつ続けて任務を行つていたらしく。ベテランの俺が言つのもなんだが、よく精神がもつたな」

歳は、身長からして俺と同じくらいだと思つ。本人が言わないと分からぬが。それにしても、四日間も戦い続けただなんて。俺だったらきっと一日ともたないかもしねない。

「とりあえず君たちは研究室に戻つてくれ。講義を再開するよ」「あ、すっかり忘れてた。でも博士、エイジス計画の話はもう聞き飽きたって」

俺がちょっと文句を言つと、博士はやはり笑顔で言つ。「まあまあ、これから面白い話が始まるから、期待して聞くようにな」

「 オトナッて、やっぱいつの間にかで嘘つくんだよなア

」

? ..... レキが言ったかと思ったが、彼は言っていないようだ。 ..... ここの場にいた誰もが、誰がその言葉を発したか分からなかつた。例の彼かと思ったが、高いびきで完全に寝ている。寝言か?

「 ..... まさか、な」

「 ほらほら、お前らも帰った帰った、ここは見せ物屋じゃないぞ」 次々とリンディウさんに追い返されていく野次馬。それに続いて俺たちも退室して、再び研究室で博士のあまり面白くない話を聞かされることとなつた。レキはとてもよく聞いていた。不思議不思議。

1243 白壁

### 〔睦月ケイスケ〕

「 んつくんつく、 ..... ふはあ」

息抜きのコーラはやつぱりつまご。

「 ケイスケはコーラが好きなんだな」

「 そりゃもし飲めるのなら十本でも二十本でも飲むほどにな。 さすがにそこまでは飲めないが」

飲めないなら言つくなつ、と突っ込まれる。ちなみにレキは炭酸が苦手だとか。普段何を飲んでいるのかと聞いたら、どうやらコーラヒーらしい。大人っぽくて少し憧れるなあ。 ..... だけどコーラヒーの苦さが好きな理由がちょっと自分には理解できない。

「 たいていここの中販機でコーラ買つていくんだけね。 あ、ほらあの人も絶対コーラ買つうね。 断言できるよ」

フードをかぶった男。レキは絶対にありえないと言い切ったが、

彼は「一ラを買つた。

「な、言つたとおりだろ?」

「何がだ?」

ぎりりとこちらを睨んでくる。いや、その、……悪かつたといふか、うん。俺は目をそらした。

鼻であしらわれると、次に彼はレキのほうを見る。そして彼に歩み寄つた。

「そこのルーキー。名前はどうでもいいが、ミッションに同行しろ。……そういう命令だ」

名前がどうでもいいって言うのは俺でも少し腹が立つ。名前は大切な家族から貰つた宝物だからな。

「ええ、……はい」

「早くしろ、エリックたちが待つている」

とりあえず腑に落ちない表情をしながらも、レキは男についていった。

「……誰だあいつ」

「おいおい、行っちゃつたぞ、止めなくていいのか?」

「そんなの迷信だ、ただの噂に引つ張りまわされるなよ

後ろから会話が聞こえたので、ちよつと振り返つてみると

「あ、よお。お前、新しく入ってきたやつだよな」

「あ、あ、うん。そうですけど」

とりあえず一人は自己紹介する。別に訊いたわけでもないつてのに。こいつちはこっちでおかしな奴らだなあ。

とりあえず、シレッとした方がカレルで、子供っぽい（人のことを言つたわけではないが、なんというか年不相応というか）方がシコンというらしい。

「んで、止めなくていいって、何かまずい任務にでも付き合わされるとか？」

「まあそんなんとこりだな。なんせあいつの任務の同行者は、「だからそれはただの迷信、偶然だ。そんなものを信じているだなんて馬鹿馬鹿しいな」

それを聞いてシュンはカレルに突っかかる。喧嘩なりよでやれよ。

「あいつと同行してるのが死神つていう時点でやばいんだよ。ほら、フードかぶった男だ、分かるよな?」

「はあ、死神？　んなバ力な」

「ああ、こいはバカだ。偶然同行した奴らが戦死しだけのことを、勝手に面白おかしく囁き立てやがって。戦闘中の不注意で死んだだけだから、あいつがどうこうの話じやないとと思うんだがな」

「いや、俺が囁き立てたわけじゃねーよ。俺も誰かが囁いてたからそうじゃないかと思つただけで……」

本格的に口喧嘩が勃発。とりあえず俺はさつやと退避することにする。

「……死神、か」

確かに、あの眼光は怖かつた。人間の心地がしなかつた。……もちろん、シユンの言つたことを信じてゐるわけじゃない。……もしかすると、ただ信じたくないだけかもしない。あの男は、本当に死神なのだろうか？　あるいは……。

心配になつた俺は、とりあえずあいつの無事を祈ることにした。何に祈つたのだろうか？　神亡き時代に祈る対象など、いる筈がないのにな。

「榎レキ」

「フォーゲルバイデも同行するのか」

「榎、昔から言つてゐるが、君は正しい発音もできないのかい？」

僕の名前はエリック＝デア・フォーゲル『ヴァ』イデだ

「だからちゃんと言つてるじゃねえか、フォーゲルバイデだろ？」

「だから よし、榎。ヴァイオリンといいたまえ」

「いいぜ、言つてやるよ。ヴァイオリン」

俺はとりあえず付き合つてやることにした。

「ヴィデオ、ヴォイスパークツーション」

「こんなことをさせる意図が分からぬ。ヴィデオ、ヴォイスパークツーション。どうだ、満足したか？」

理由はもちろんわかつてゐる。そして、彼は一呼吸おいて言つた。

「フォーゲルヴァイデ」

「フォーゲルバイデ」

「…………もういい」

拗ねてしまつた。彼を弄るのは面白いな……だがちょっと刺激しそぎたか。

「ところでだ、フォーゲルバイデ。あの男は誰だ？」

「ああ、彼は」

「そろそろ時間だな。…………おい、一人足りないぞ」

フードの男が苛立たしく言つ。俺とエリックと彼の三人じゃないのか？ 確か一度の任務につき最大4人までだつたが、あと一人来るということか。

「…………で、その一人が来ないわけか。時間ぐらいは守つてくれなくては困るな」

そして、『彼』は来た。

「すでに時間は過ぎている、前田。時間ぐらいは守れ」

それ俺のセリフそのままじゃないか。しかし、よしとする。……いや、よくない。どうして同行者がこいつなんだ？ 納得いかないな。

「俺自身が志願したんだ。悪いってのか？」

「ああ、悪いな。自分から申し出たのなら周りの奴のことも考える、ガキが」

すると奴は鼻で笑つた。……そうか、俺のほうが階級が低いうえに、経験の差、だろうな。しかしながら、それとこれとは話が別だ。

「ところで、フォーゲルバイデ。お前、確かに頭をよく打っていたよな。サッカーの時だつて当たり所が悪くて失神していたしな。というわけで頭上に注意だ。俺のワンポイントアドバイス」

「な、失敬な！ サッカーの件にしろ全部君がやったことじゃないか！」

否定する気はない。確かにさ、サッカーは苦手なんだ、こんな俺を許してくれ。

とうとうフードの男がキレた。待たせすぎたもんな、さつと行くとするか。

ば、神機もすぐに壊れてしまう。ここで働く人たちは、陰ながら俺たちの活動を支えてくれているわけだ。

「レキさん？ もしもしー、早く神機持つていきなよー」

「あ、あ、……すみません」

彼女は楠リッカ、ここで働いている。若くして働き出したため、その腕前は計り知れない。

彼女と初めて会ったのは、入隊当初（あの日のことは忘れない）、病室で目を覚ました時だつた。辺りを見渡すと、一人の女性がいた。絆創膏を取りに来たようだが、異質な臭い（アラガミの血の臭い。その時はまだわからなかつた）が漂つていて、ところどころ煤汚れている。

「あ、気が付いた？ ほんとにさ、あれだけで悲鳴を上げるなんてこいつちがひつくりしちやつた。君には、もっと強いアラガミと戦つてもう必要があるんだから、ここで倒れてちゃいけないでしょ。

……ああ、申し遅れちゃつた。私は楠リッカ。君の、ううん、君たち神機使いの神機は、私たちが整備しているから。無闇に扱つたりしたら許さないからね。とりあえず、今後ともよろしく！」

「あ、……はい……」

「それじゃあ私はこれで。そつそと自分のしなきゃいけないことをしなよー」

何かを感じた。俺が、閉じ込められていた家の中では感じられなかつた想いを。子供のころにみんなで遊んだ時の想いとも違う、今までに一度も味わつたことのない、想いを。

……過去を振り返つて、あの時の思い出に少し微笑みながら、神機を取つた。

「それでは行つてきます。……神機の整備、頑張つてくださいよ」「はいはい、分かつてるよ」

彼女も微笑んで返してくれた。心が温まる。ゴッドマイターは、確かに大変な仕事だけれど、この場所を通るたび、やる氣が出る。

そしてヘリへ向かおうとするとき、後ろから罵声が聞こえた。「おーおー、なんだよこれ？ あんなに綺麗にしてやつたつてのによ、どうこことなんだつ！」

「あ、あれのどこが綺麗だつていつのつ？！ あんな神機だと戦闘中に滑つたりして危険だから、」

「どうやら楠さんが揉めているようつだ。もちろんあのガキど。

「なにがどうなつてゐるんだ？ ヨシッグ、詳しく聞かせてくれ

「……塗装スプレーだよ」

塗装？ ……神機に塗装したつていうのか？ ……奴が言つにはワックスコーティング用ラッカーを使用したことだが、そんなことをしたら神機が滑つて大惨事になりかねない。それを楠さんがワックスを落としたものだからこんなことになつてしまつたのだ。

「とりあえず落ち着きな、ガキ。またあいつが怒るじゃないか」

「黙れ、誰のせいで怒つてゐるんだ」

そして、フォーゲルヴァイデの説得で、よつやくガキをなだめることができた。……去り際に彼は言い残す。

「くんつ、本当に使えねえな、このクソ整備士が！ やつぱり女なんて姉ちゃんに比べたらこんなものなんだよー」

……俺は、リックさんに謝った。

「レキさんのせいじや、なによ。私が、よく考えないでいいつこつこ  
とをしちゃったから……」

「リックさんは、間違つてしません。ぐうの音が出ないまで呪き潰して分からせてやつますよ。あつ、冗談ですから、気にしないでくださいね」

「早くしろ、置いてくぞ」

フードの男が再び怒り出しそうなのでさつととへ行くことにしよう。  
……少し振り返つて、リックさんの背中が、とても悲しそうに見えた。

1251 自室

## 【睦月ケイスケ】

「はあ、訓練所は全部使用中、受注できるミシショソも今はなし。  
するいぜ、レキ！ といつかツバキさんもツバキさんだよ。あれぐらこの任務なら俺でも行けるつてのー！」

ベッドに寝つこうがつてイライラ。「ウタにバガラリーの第一巻（定価：1600円・六話から十話まで。といつてもウタは全部録画したらしいが）でも借りに行こうかな。

「の前に飯ー。とりあえずこのでかいトウモロコシー、どひ調理すりやいいんだよ？」

実はこれ、しばりく出しっぽなしにしてしまって力チカチに乾燥してしまったのだ。まさかここまで乾燥するとは思わなかつた！ ここまで乾燥するなんて知らなかつた！！ 冷蔵庫に入れておけばよかつた。

茹でるのか？　ああ、でもおこしくなれやつだな。

「おーい、ケイスケー。バガラリーの一巻だけぞ、」

「あ、ちゅうじよかつた。なあ、一つ相談があるんだが……」

## 1254 新人区画・廊下

〔ウイル・シャムロック？〕

「一体オレは何をしているんだ？　本当にくだらない。勝手に病室を抜け出して歩き回った挙句、ついには迷ってしまうとは。それにしても、南米支部とはだいぶ作りが違うな。まあ、いうこう知らないところを探索するのが面白いんだけど」

正直歩きにくい。足を負傷しているのだから仕方がないのだが。

「……ん？　なんだか香ばしい匂いがするな。ちくしょ、腹減ッてんのによ。こりや拷問じやねエか」

匂いのもとはあの部屋から。ドアが開放されている。そりやここまで向うわけだな。

……？　悲鳴も聞こえてきたような。

「う、つめやあ、どうなってんだこれ？！」

「おこコウタ！　わ、わ、こぼれる、こぼれるつ……」

……気になるし腹減ったしで、オレ的好奇心がくすぐられた。とりあえず覗きに行ってみて、つこでこお相伴にいることにじよつか。

### 3 · STRANGER (後書き)

ああ、やつちやつた。まず意味不明な奴が登場して。次にエリックが登場して、やっぱり訳の分からぬ奴も登場して。……嫌な予感しかしないというか、地雷というか。

エリックを生かすも殺すも作者の自由！　だけど、命を弄んではいけませんっ。全て、脚本通りに物事を進めるだけ。その流れの中で誰が死んで、誰が生きるか。言つたらネタバレになってしまうしね。

何か質問や、気になつたところなどがあれば、コメントでどんどん訊いてくれて構いません。所詮自分も人の子ですし、とんでもないミスをしてかしてゐかもしないですしね……。

それでは次回まで。

1251 自画

### 「睦月ケイスケ」

「ジャイアントトウモロコシか。……茹るのはどうかな?」

「ほり、よく確かめてみろよ。力チカチだろ? 茹でてもおいしくなさそうだから、どうやって調理しようか考えてたんだ」

一応お袋に調理方法のデータは渡されたが、生憎乾燥したトウモロコシの料理は書いてなかつた。

「そういうえばさ、かーちゃんが一度乾燥させたトウモロコシで何か作ってくれたんだ。確か、ポップコーンって言つたけど、味が思い出せなくつてさ」

料理のうちのほとんどは旧世代からのものが多い。ただ、食材の一部はアラガミや環境の変化に耐え切れずに絶滅してしまつた。無論、肉類は支部によつて制限されているところもあるらしい。

「この支部は、幸い家畜の肉などの量産が行われている。……とは言つたものの、生産量は少なく、値段は結構張る。いつも食べられるような代物ではないことは確かだ。それに対してアメリカ支部では生産が活発で、値段もかなり手頃となつていて。一度いいからビフテキをたらふく食つてみたいものだ。もつとも、俺は今の食事で十分満足しているが。

ちなみに後で調べて分かつたことだが、ポップコーンは旧世代ではそれなりにポピュラーな菓子だそうだ。劇場で芝居とかを見るときに食べるるものらしい。

「作り方は知つてゐるのか？ 材料も足りるといいが」

「えっと、足りてるよ。味付けは自由だつたみたいだし」

「とりあえず作つてみることにした。旧世代のトウモロコシはちやんと破裂するものが必要だつたようだが、このジャイアントトウモロコシは品種改良されているため使うことができるそつだ。さすがフエンリル、すごいなあ。

まずこの乾燥トウモロコシを芯から外す。やつぱりでかいからたくさん取れた。鍋には、ギリギリ入りきつたのでセーフとする。そして、コンロに点火。

一応食事なので甘い砂糖ではなく、味の濃いバター……もとい、マーガリンを加えてみる（動物性の油脂か植物性の油脂か。もちろん、この御時に動物性などもつてのほかである）。マーガリンなら脂は不要だそうだ。

そして蓋をする。

「それで、あとは待つだけだよな

「ウタがうなづくと、とりあえず俺は皿を用意した。ちょっと大きめの皿だから、きっとあの量なら入るだろつ。

しばらく覗いでいると、何かが弾ける音がした。一回、三回。四、五、六七、八九十、……。断続的に鳴り響く破裂音。ついにポップコーンが完成してきたようだ。バター、もとこマーガリンのいい香りが部屋に香る。

「おいしそうだつてのがよく分かるぜ。ああ、楽しみだな

「……ねえ、ケイスケ。なんか、鍋の蓋が……」

カタカタと鍋の蓋が揺れる。嫌な予感がして咄嗟に身を屈めると、蓋が破裂音とともに勢いよく跳ね飛んできた。そして、それを合図に部屋中にポップコーンが飛び、跳ねる。

「ひ、ひぎやあ、どうなつてんだこれ？！ つて痛つ、痛い痛い！」

！」

「おこロウタ！ わ、わ、じぼれる、じぼれるひ……」

正直こぼれることを気にしている場合ではなかつたが、もつたひない！ 床はきれいだが三秒を超えてしまつている……どう見ても洗えば喰える代物ではなさそつである。

というか痛い！ 痛い！ 热い！！ どこかに隠れる必要がありそつだ。

しばらべッドの下やテーブルの下に身を隠した俺たちは、破裂音が聞こえなくなつたのを確認して、部屋を見渡してみる。

……そのポップコーンとやらは、元の体積の6倍程度まで膨れ上がつていた。あな恐ろしや品種改良。部屋中はバター、もといマーガリン臭で満たされていた。食欲がそそられるどころか微妙に吐き気がする。ですが、油つてのは恐ろしいものだ！

「あーあ。……部屋、汚れちまつたな。ポップコーンも喰えるかな？」

「ん？ それぐらじ喰えるだろ？」

部屋の入り口から聞き慣れない声が聞こえてきた。頭に包帯、足にテープ。……あれ、この人つて確か寝てるんじゃなかつたつけ。なんで起きてるんだ？ というか、

「日本語つ？！」

「日本語？ と言われてもな……。この辺り出身の奴がこここの言葉しゃべつて何が悪いんだよ？」

ウソだろ、おい。確かに人の名前つて、

「ウイーラードさん、…………ですよね」

「ああ、ウイーラード・カーライル・シャムロック。よく知ってるな。長ツたるいからオレはミドルネームを取ツ拋ツてウイーラードは短くしてウイル。ウイル・シャムロックで通してる」

完全に欧風の名前である。どう考へてもこの辺り出身とは思えない。

「この辺りだツての。だいたい、そうだな……寺がある辺りだ」

「もしかして、親が海外出身つてことかな？」

「んー、まあそんなところだな」

……コウタはとりあえず納得した表情を見せる。当の本人はとうと、微笑んではいるがどこか不気味なオーラを漂わせているというか。

「とりあえず腹減ツてるんだ。喰ッていいよな、いいよな？」

一瞬尻尾振つてる生き物みたいに見えた。まあ今の彼のイメージはそんな感じだ、獣的な。本当に腹減つてるんだな。

「それじゃ遠慮なく！」

「おい、まだいって言つて……」

1256 自室

### 【睦月ケイスケ】

「ぐうう、…………すうう…………」

……なんという食欲。俺たちが喰うのを躊躇つていのいちに喰い散らかしちまつた。そもそもすぐに寝た。叩き起こそうとしても起きようとしてない。まるで最初から寝ていたみたいだ。

「すみませーん」

「はいはい、開いてますよー」

ノックと声。とりあえず中へ入るよう促すと、ドアが開いた。中に入ってきた彼女は、少し驚いた様子だった。……確かに、彼女はレキに人中を殴られたときに介抱しに来てくれた人のだったような。「うわあ……、ひどく汚しちゃったみたいねえ……。一体何したのよ?」

「ポップコーン」

「ポップコーン。一房丸ごと」

「量考えてやりなさいよー。一房丸」とちつたんじゃこいつなつても仕方ないって」

そして、熟睡中のウイラードさんを見てやつぱりびっくりする。「どに行つたか探してたけど、なんでここに居るのよ……。連れてきたわけじゃないわよね?」

「腹が減つたーって言つて勝手に押しかけてきて、それでポップコーン勝手に喰つたら勝手に寝た」

……少し首を傾げる仕草を見せる。何か不可解な点でもあったのだろうか。

「寝ぼけてた、にしては度が過ぎてるわね。まああんたらが悪いんじゃなかつたらいいか。……それじゃあ、私は病室まで彼を連れて行くから。できれば手伝つてほしいな」

……手伝つて言つてることと同じである。断れそうもないの仕方なく俺が行くと言つて、彼の左肩を持つ。重いっ!!

「はあ、疲れたぜ」

「お疲れさま、まあ何も出ないけどー」

「くそっ、弄ばれた感が強いぞ。

「そもそも、私はあなたの先輩であり上司だからね。しつかり言うこと聞いてよ?」

「ごもっともある。だがやはり納得いかない。しかし、仕方がないのでしようがない。」

「ところで、まだ名前聞いてないんだけど」

「あれ? まだ言ってなかつたつけ。『ごめん、忘れてたっぽい』

改めて彼女はこちらに向き直る。

「私はリリア・エヴァレット。階級は上等衛生兵曹。目標は、サクヤ上富みたいになることかな。とりあえず、私もあなたの手伝いぐらいはできるから、任務へは気軽に呼んでね」

「上等衛生兵曹……? とにかく、新兵との差は歴然だと瞬時に把握した。」

「そういえばあなたを殴った人はどこにいるのかな」「レキか? 確か任務に出てるつて。ヒバリさんに聞けば分かるかもしれないな」

「というわけで、休憩中なのかコーヒーを飲んでいるヒバリさんについて訊いてみた。」

「えっと、ちょっと待ってくださいね。……あ、今出ているところです。メンバーは、レキさんと、ソーマさんと、……あれ。四人のはずなのに、三人しか名前が入っていないわね。入力ミスかしら?」「ああ、レキが出ているかどうか確認できたからもういいですよ」「いいえ、この極東支部のエンタランスを預かるオペレーターとして、この程度のミスはあってはならないわ。もつと精進しなきゃ!」  
「何かに燃えているようである。やる気が感じられるからどうでもいいこととする。

「どうあえず俺トイレがマンしてたから、それじゃこれで！」

「ああ、まだ頼みたいことあつたのにー

漏れだいぢやばーじやねえか。そんなのは後回し!!

人一頃はうつ！

卷之三

自室まで戻るには、エレベーターを待つ時間があるからさすがに耐えきれない。ということは公共トイレの一択のみとなる。

「到着……えっと、せい、それ、わがみ、とな

体中から冷たい汗がぞわっと湧き出る。だああつ、いつもほむつ終わってるはずなのに——ツ！？ そう思ったとき、トイレから女性が出てきた。

「ごめんね、もうちよつと時間が掛かるからね。今  
んはトイレの使い方もまともに知らないだなんて」

あの坊ちゃん...?』

思い当たるとすれば、……やはり、『あいつ』のことだろつた。  
あんな奴は、さつやといなくなつてしまえばいい。ヒバリさんだけ  
て迷惑していたようだし。

で、結局待つよりは自室に行つた方が早いんじゃね？ と考えた俺は、急いで自室へ帰ることにした。まあ、間に合つたからよかつたものの。

1342 鉄塔の森

「神レキ」

やだな。

「うう、くそつ、こんなところに来るぐらいなら別の任務に出ればよかつた」

志願しておいて無責任な奴だな。お前が代わりに死ねばいいんだ。

あれ？ 代わりって……、誰の代わりだ……？

「……それにしても、鉄塔というよりは、工場の跡地のように見受けられるが、……有害物質とかは出でていないだろうな」

「ここは工場じゃなくて発電所さ。だから有害物質なんて出でていな。分かつたかい、榎？」

やはりいちいち上から目線。ちょっとイラッとする。

「つるさい、お前は上だけ見てろ」

もつとデータベースを確認すべきだったか。情報の仕入れ方を俺はあまり知らない。うちはテレビもなかつたし、新聞も経済に関する以外は取つていなかつた。そして、まともに話す相手なんて、……誰一人として、いなかつた。話すのは、ただ社交的に。交友関係なんものは、遠い昔に切り捨てられてしまった。

「とりあえず、敵の位置を確認だ。えっと、まだ名前聞いてないんですけど、」

「忘れていたな。俺は……」

「危ないッ！！」

突然エリックは大声を出す。何かと思えば、彼の指先

鉄塔

の上に、オウガテイルを一体確認した。

俺は、エリックの腕を引いて、フードの男は口を開いた。

「前田、上だ！！」

前田上だという言葉の響きに違和感と可笑しさを覚えたが、それは気しない。悪いのは前田という苗字である彼なのだ。

……しかし、一瞬彼の姿がフォーゲルヴァイデに見えたような気がした。瞬きをすると消えてしまったが、きっとそれは幻視に違いない。

オウガテイルが跳んだ。前田はにやりと笑うと、銃口を奴に向ける。

「へへんッ、こんな奴は一撃で葬つてやるよー 僕を襲ってきたのが間違いだったな、本当に馬鹿だな、お前は！！」

彼は抗つた。だけど、死神からは誰もかれも逃げられないだろう。

「…………ん？…………弾がでねえ。…………おかしいなあ」

彼の撃とうとしていた弾は、OPを多く必要とする弾だったようだ。

だが、今回の任務での彼の装備の特性上、他のパートと比べて神器のOPの最大値が低くなっているのだ。

……そして何より、このバレットは初めての登用であり、人生最初の登用となってしまった。

俺は反射的に彼に手を伸ばす。たとえ彼があんな奴だとしても、見殺しにはできない。彼だって、改心はできる筈だ、今からでもやり直せる筈だ。

やり直せる？ 本当に？

そして、彼の顔がこちらを向いて、恐怖と驚愕で、顔は皺くちゃに歪んで、わずかな涙が頬を伝っていた。後は引くだけだった。後は、腕を引っ張りさえすれば彼を助けることは可能だった。……だが、一つの疑念が、それを阻害する。

……その顔は、オウガテイルの牙によつて削がれ、言葉にならぬ絶叫を上げながら、俺の体を鮮血で濡らした。返り血に俺は目をつぶりながら、ぐつと彼の腕を引っ張つた。

そして、静寂の後、俺はゆっくりと目を開ける。俺は、しつかりと彼の腕をつかんでいることができたのだ。

俺の手中には、彼の腕『だけ』が、あつた。

へたつと情けなく腰が落ちる。俺は持っていたそれを放つて、必死に後ずさりをする。

そしてアートの男は一括の躊躇いもなく彼の胴体こと不立ちテイルを引き裂いた。

彼の血とアラガミの血を体中に浴びて、俺の意識は真っ白になつた。

1358 鉄塔の森

「神レキ」

「…………そろそろ落ち着いてきたんだが、どうだい？」  
「…………フォーゲルヴァイデ、か…………」

俺は、今の時間が鉄塔の森で、現在地がもうすぐ1400になろうとしていることに気付いた。

頭の中はショートしていて、思考回路も真っ白で……。

「守れなかつたんだよ、俺なんかじゃ……」

「…………榊。僕は、彼に手を差し伸べることもできなかつた。自分だけが逃げ出した。…………でも、榊は助けようとしたじゃないか」「でも、結局助けられなかつた。…………助けなかつた。俺はいつまでも、誰も守れず、助けられずに生きていくことしかできないのだ。

「卑屈になるなら働け。…………よつじや、クソッたれの職場へ」

俺の悲しみを遮るようにフードの男は語りだす。

「…………言つておくが、こんなことは日常茶飯事だ。いちいち悲しんでいたら身がもたねえぞ」

まるで感傷に浸ることも許さぬかの「」と、淡々と語り続けるのだ。

「あんた、一体誰なんだ」

俺は感情を露わにして、尋ねた。…………他人のことを、初めてあんた呼ばわりした気がする。

「名乗り忘れていたな。俺はソーマだ。…………別に覚えなくていい」ソーマという男。…………俺はこいつのことが好きになれそうにない。

「…………時間くつちまつたな。行くぞ、ルーキー」

「待ちたまえ、榊はまだ、」

「もう大丈夫だ。…………どうにもならないから、どうとかするしかないのだろうな」

俺は、俺の生き方を遂行するしかない。俺には他人の生き方を決める権利もなければ、義務もないのだから。

「俺は行く。立ち止まつても埒が明かないことは自分でわかつて

いるからな」

神機を構えて、用意ができたことをここに証明する。

「……どうした？ 何ぼさつと突っ立つてんだ、フォーゲルバイデ？」

震える心を抑えつつも、いつも通りの淡白な俺を演じよう。

「ぐ、だから君はまともな発音もできないのかい？！」

俺たちを無視して、ソーマは行こうとする。どう討伐するのか俺たちはまだ聞いていない。

「オウガテイルの方は俺が誘導する。『クーンメイデンの方は煮るなり焼くなりしてやれ』

そう言つて彼は、挑発フェロモンを服用する。オウガテイルが彼の後を追つていいくのが見えた。彼の手で殺されてしまうとも知らずに。

「ターゲットは一体。一人一体でいいね？ ……そうだ、榊。 ……久しぶりに、アレをやらないか？」

「ならば銃形態しか使つてはいけない、それでいいだろ？」「 ……劍形態も使用できる俺が有利じゃねえか」

……お互いに笑い、照準を目の前の繭の処女達にあわせる。ただ、これまでの缶だった的が、アラガミに変わっただけだ。 ……そして、どちらともなく声がかかって、撃ち合いが始まった。

……どちらが先に倒せるか。無論、ブラストのほうが有利に決まっているが、新型をなめてもらつては困るな。時折飛んでくるレーザーを避けながら、撃つ、撃つ、撃つ。

一つの弾丸が交じり合い、描く軌跡はまさに虚空に蝶が舞つかのごとく……危ない危ない、これがフォーゲルバイデの特殊能力、『華麗結界』というものか（そんなものはない）。

……それが、俺に対する励ましたってことは、よく分かつてい

たさ。だから、その好意を無駄にするわけにはいかない。

「つと、弾切れか。○アンプルを服用だな」

「……ああッ、アイテムがつ！？」

「おいおい、切らしてたのかよ。」

「ほらよつ、あとで倍にして返せ」

「一応フェアに戦いたいから、おれは○アンプルを寄越した。」

「……そろそろつ、くたばるんじやないかい？」

「ああ、じゃあどちらが先に仕留められるかはつ、次の一発つてところか」

だから、最後の一発は間髪入れずにぶち込んでやつた。ただ、彼も同じことを考えていたようだ。

「華麗なる、エリックシユートー！」

でた、フォーゲルヴァイデの必殺技。何気に格好つけるなよ。気にくわないな。

「……目標は、一体とも沈黙か。どっちが先にやつたかよく分からなかつたが……」

「この勝負は持ち越しとしよう。もちろん、次は僕が勝つから、覚悟したまえよ？」

…………そして、ソーマが戻ってきた。あちらも終わったようだな。彼がへりを呼んで、俺たちは少しの間待機していた。

「なあ、フォーゲルヴァイデ」

「……ヨシツグのことかい」

「それ以上話すことはないだろう、と空笑いを浮かべる。

あの対決だつて、フォーゲルヴァイデが俺に忘れさせてあげたいがためにしたことだから。でも、あんなことで俺の気が晴れるわけがなかつた。

「なんであのガキ、死んじまつたんだろうな」

決まつている、あいつの不注意であり、自分の力量を把握していなかつたためだ。

「……僕にも、責任はあるのかもしれないね。彼を急かしてしまつた、彼を、……本当に、睦月君が言うように、うわべだけでもいいから弟子にしておけばよかつたのかもしれないよ」

アナグラへ帰つて、どんな顔をしていればいいか、分からぬ。……そもそも、今の自分がどんな顔をしているのか、分からぬ。きつと絶望と恐怖で一生しわくちゃだろひ。

……いつか読んだ本のような、そんな感覚があった。

## 1546 エントランス

### 【睦月ケイスケ】

アナグラ内に、変化はなかつた。……そう、何も、変化はなかつたのだ。

……違う、責めなかつたわけでも元氣づけようとしたわけでもないんだ。  
何も、なかつた。そう、誰も死んではいなかつた。彼らは『三人』でミッションへ行つた。

そう、彼の存在を抹消した。ただ、それだけである。不穏分子を排除してくれた彼を、心中では賞賛している者もいるに違いない。ただ、こういった場では誰もそういうことを言わないだけであつて。

「なあコウタ。……あいつの行いが悪かつたから、こうなつたのか」「うん。誰か一人でも、涙を流してくれる人がいる筈なのに……誰

もこないなんて、悲しすぎるよ」

「この出来事は、俺たちの心を確かに抉つていった。尤も、一番辛いのは……いくら性格が悪かつたとはいえ、『彼』の命が奪われる瞬間を、田の前で見てしまったレキに違いない。

1600 自室

### 〔榊レキ〕

ベッドに俯せになつて、忘れようとしたけども、田の前の鮮血がどうやつても落ちなかつた。

あいつの苦しむ顔、悲鳴。脳裏に焦げ付いて、消し去ろうとしても落ちようとしないのだ。このままでは、完全に気が狂れてしまいそうで、俺は誰かに助けを求めようとした。……だけど、すぐに冷静になつて……そんな自分が情けなくなつた。

「助けてくれる奴なんて、誰もいないはずなのにな……」

自嘲して、俺は寝返りを打つ。とその時、軽い金属音が一回。

「……ん。ノックか」

……ドアのロックを外すと、サクヤさんがいた。

「しばらくお邪魔して、いいかしい」

「あ、……はい。構いませんよ」

……彼女は部屋を見渡して、その書籍の量に戸惑いを隠しきれないようだ。

「……こんなにあるなんて、すごいわね。一体どうしたの？」

現在は、ここにある書籍のほとんどがデータ化されていて、これらの物は田世代の遺産とされている。だから、ここまで書籍がある

ところのはすゞことなのだろづ。

父はこのようなものを集めるのが好きだつた。俺も、本を読むことは、機械を見るよりも楽しかつた。よく、小さい頃は母親に本を読んでもらつたつけ。……思い出せうとするど、とても悲しくて、胸が張り裂けてしまいそうで。

もし、また母親に会えるのなら。母が待つ家に、帰ることができるのであるなら。……すべてを捨てても、帰りたい。

……だけど、

「家から持つてきたものです。……もう、あの家には戻れませんから」

……俺の言葉から事情を察するには、あまりにも情報不足。だけど、何かを察したのかサクヤさんはその話を切り上げてくれた。

「それで、……大丈夫かしら」

「大丈夫って、……何がですか」

わざと素つ氣ない態度を取つた。もちろん、何を意図したことかは十一分に想像がついている。

「ソーマから聞いたわ。……初めて見るから辛いことは分かつてゐるでも、」

「違う。……俺は、辛いわけではありませんから。もういいです、……心配してくれて、ありがとうございました。……もう、用事は済みましたよね」

俺は、一人でいたかった。一人でいた方がよかつた。……部屋に閉じこもつていた方が、よかつた。誰かに、この罪悪感を知られたくない。覚られたくない。

だけど、彼女は部屋から出ようとしなかつた。……だから、仕方なく追い出すのをやめる。

「……それとも、助けられなかつたから、かしら。……あなたのこ

とだから、そつちだつてことは分かつてたわ」

「一応確認、つてところですか。俺はあいつを守つてあげられなかつた。それが悔しいのは、確かです。……もちろん、こんなくだらない問題に正解しても、何もあげられないですけど」

そんな冗談を言つたけど、彼女は少しも笑つてくれなかつた。それどころか、ぐだらなくなんかないと俺の言葉を一蹴した。……違うのに。助け『られ』なかつたからじやないのに。

「……どうしました？……仲間一人守れない俺は、必要ないつてことですか？」

「そんなことないわ！　どうしてそんなこと言つのよ？」

ひしひしと湧き上がる得体のしれない苛立ち、感情。理性はそれを堰き止めることができなかつた。

「……だつたら、なんでそう言い切れるんだよ。僕は誰の期待にも応えられない。それどころか大切な人の一人も守ることができない！　そんな僕が、なんで必要だつていうんだよ？！」

「仲間だからよつ！　第一部隊のメンバーとして、極東支部のメンバーとして、……同じゴッドマイターとしてつ！…」

そう、僕は、僕らはゴッドマイター。いつ仲間がいなくなつてもおかしくない、死と隣り合わせの職業。そんな仕事を、僕らはしているんだ。……なんで、こんなことをしているんだろう。

……分からぬ。自分のことが、分からぬ……。

「一人守れなかつたら二人守りなさい、二人助けられなかつたら四人助けてあげなさい、もし百人が苦しむ顔を見せるようなら、一百人を笑顔にしてあげて！！　そのためには、……あなたが必要だからつ！…」

その言葉を聞いたとき、再び僕は必要とされていること気が付けた。そして、理解したんだ。……なんで、ゴッドイーターになろうと思つたのか。

ただ、自分の存在する意味がほしかつただけなんだ。

ただ、自分を必要としてくれる存在がほしかつただけなんだ。

ただ、……自分の存在を認めてくれる居場所がほしかつた、だけなんだ。

「……へへ、かつこ悪いですね、俺。女性にここまで言われるなんて、初めてですよ。……母親にも、……こんな感じで怒られたこと、一度もないですから。……だから、なんで涙が出るか、……全然ツ、……分からないんです」

壁に額を押し付けて、できるだけサクヤさんに涙が見えないようにするけど、……嗚咽までを抑えることは、俺には到底不可能なことだった。

サクヤさんは、俺の心に這う薦を払ってくれた。でも、その根を取り払うにはまだ至らない。それでも、俺は嬉しかった。彼女のおかげで、まだ俺はここに居られると思えたから。

……そのあとどうしたかは、正直覚えていない。だけど、彼女は俺の手をしつかり握つてくれた。

……その手は、生きている人の手だった。

## 【睦月ケイスケ】

入隊して2週間が過ぎた。そんな時、俺とコウタはツバキさんに呼び出された。

「へ、……つ、ツバキさん、冗談ですよねー」

「冗談を言えるほど気が利かないものでな。とにかく、次のミッションは睦月と藤木の二人だけで行つてもらう」

心配だなーと思う一方、コウタは目を輝かせている。確かに、次のミッションの場所は俺たちが初めて行く場所だからな。

「そして戦う相手も初めてだな。おそらく、これまでのアラガミと違つて苦労するだろう」

「えつと、確かコンゴウだつたつけ。データベースで調べたけど、

……コンゴウはこれまで見てきたオウガテイル、コクーンメイデン、見たことはないが聞いたことはあるザイゴートといった、小型アラガミと違う。

主に体力、攻撃力、耐久力も（小型アラガミと比べると、だが）極端に上がり、多彩な技を仕掛けてくるそうだ。たしか、背中のパイプから風を使った攻撃をしてくる、らしい。

「その分報酬も高めになつてる！ これを逃す手はないな

「そうか、ならば今からでも行つてもらおうか。弱点に合つた武器と、相手の攻撃を軽減できる装備をするように

……鼓動が早くなつていてる。そんな時、コウタが少しうひゅましい。俺もこれぐらいマイペースでいられたらなあ。

## 【睦月ケイスケ】

「うわあ、寒いね」

「滑るから気をつけろよ」

辺りが凍つっていて、危なつかしいたらありやしない。スパイクに履き替えて来ればよかつたかな。

ふと、空を見上げると少し欠けた月と、極光のカーテン。

オーロラを直に見たのは初めてだ。

「おつとつと、こんな所で油売ってる場合じゃないか。とにかくコノゴウとやらを見つけよ! ゼ」

俺は神機を銃形態に変形させる。奴によく効きそうな取つて置きのバレットを作つておいたんだ

?

「……あれ? なあ、ケイスケ。今何か声が聞こえなかつた?」

「声? 気のせいじゃないか、俺はそんなの聞いて、」

どしゃつと、上から何かが落ちてきた。びっくりして咄嗟に後退すると、……どうやら建物に積もつていた雪が落ちたようだつた。

「な、なんだ。びっくりしたなあ」

「ゴウタが笑つてこちらを向いて。……その背後に何かが降り立つた。

「ゴウタ、そこだけ!」

俺は一、三発バレットを撃つて、……相手の姿を確認した。禍々しく、だけビビリが神々しさすら感じる姿。

「な、なんでここが分かつたんだ?！」

「ああ、…………そりやたぶん、俺のせいだな……」

データベースの受け売りだが、奴は聴覚に優れているから、どんな些細な音でもすぐに気付いて向かってくるそうだ。恐らく、俺が神機を変形させたときの音だ。騒音スキルがついていたのが一番の原因か。くつ、油断した。

「とりあえずよ、こいつがコンゴウだな」

戦慄する俺たち。そして猿神は、高貴で粗暴な咆哮を上げた。俺たちは神機を構えて、各自攻撃を開始する。

### 1821 鎮魂の廃寺

#### 〔藤木コウタ〕

「あ、ああ……ケイスケ……どうしよう」

建物の陰から確認しているが、ケイスケが力尽きて倒れてしまっているのが見える。急いでリンクエイドしなければ、きっと間に合わなくなってしまう。

だけど、その周辺で徘徊するコンゴウのせいで近寄るのができない。

「俺がコンゴウの攻撃に気付かなかつたせい……」

「コンゴウは、風を主体とした攻撃を使用する。俺は遠くから援護射撃を行い、時々飛んでくる空気を固めたような弾を回避していた。……だが、再びコンゴウが弾を撃ってきたようだったが、不発のように見えた。

すると、血相を変えてケイスケは俺を突き飛ばして、足元からの真空による竜巻をもろに喰らった。

天高く打ち上げられるケイスケ。……地面にたたきつけられる。それを見た俺は、怖くなつてそのまま逃げだしてしまつた。

……俺が気づいていれば、こんなことにはならなかつたんだ。だから、覚悟を決めて近付こうと思つた。……だけど、不意にノゾミとか一ちゃんの顔が頭をよぎつて、恐ろしい『もしも』が心中に渦巻く。

このまま逃げださないか、とそんな『もしも』を想像する自分が語りかけてくる。

「確かに俺が、一ちゃんとノゾミを守つてあげなきやならない……。だけど、目の前の仲間を、放つておけない」

……コンゴウが去つたことを確認して、物陰から飛び出してリンクエイドを施した。

「…………よし、できた。ふう…………リンクエイドは体力を結構使うんだな」

…………とその時、突然二体のオウガテイルが襲いかかってきた。一瞬驚いたが、落ち着いて一体に麻痺弾をぶち込んで動きを止めさせた。

そしてもう一体に照準を合わせて引き金を引く。

「ツ！ 弾切れかっ！？」

体力は本当に残つていないと見えるレベル。回避ももう間に合ひそうにない。まさに万事休すというやつだらうか。俺が死を覚悟した時だった。

さつとケイスケが立ち上がり、一発、一発と撃つ。一発目は思いつきり外れたが、二発目はオウガテイルに命中し、ひるませることができた。

「「めん、俺のせいで」

「ほら、早く回復しないとコウタも危ないんじゃないか？」

ケイスケは神機を剣形態に切り替えて、一体のオウガテイルを一刀両断する。その攻撃で奴らは力尽きたようだ。

俺はその間に回復錠と、ロアンプルを使用した。

「と、親玉も嗅ぎ付けてきたか」

案の定音を聞きつけてコンゴウが来たようだつた。そして、こちら田がけて弾を撃とうとするが、不発のように見える。

「同じ攻撃にはもう騙されないぞ！」

俺は横に避けると、空気がその場で爆発する。さて、こっちもどんどん弾を撃つていこう！

「攻撃パターンが読めてくると案外楽だな！　おおつと、」

ケイスケがコンゴウのパンチを咄嗟に回避し、剣を振り下ろした。すると突然、コンゴウの顔面が割れて、頭を抱え込むように倒れる。「これが結合崩壊つてヤツか……。だけど今が攻撃するチャンスだな」

ケイスケは捕喰し、バースト状態になつた後にチャージクラッシュを胴体に叩き込む。すると、こちらも碎けた。

「よし、一気に倒してやる！」

「待つた、……何か様子がおかしいぞ」

ゆつくりと起き上がると、急にいきり立つて吼えた。息も荒い。

……少し嫌な予感がする。

「ケイスケ、しばらく様子を、」

「……っ、コウタ、下がれ！」

その場でコンゴウが縮こまると、突然コンゴウの背部パイプから真空波が周囲に放たれた。俺はケイスケの言つとおり下がつたから無事だった。当の彼は、辛うじてガードはしたもの、頬の下が少し切れているのが見える。

「これが、活性化つて奴だな。さつさと倒したほうがよそがつだ。  
んじやあ、「ウタ。お前に託すぜ、俺の弾」

そう言つと、彼はアラガミ弾を二発にちからへ受け渡す。リンクバ  
ースト・レベル3。それによつて、俺の力は極限まで高まつしていく。

「……任せとけつてえつ！――」

昂る意識と裏腹に、視界がスローモーションな感覚を味わう。違  
う、周りが遅いんじやない、俺の心が急いでるんだ。奴の激しい攻  
撃も、遅い世界の中では容易に避けられた。

そして俺は、コンゴウの正面に立つ。後はただ、『モウスイブロ  
ウ』の銃口を顔面に押し付けて、

「これでどうだああああつ？――！」

引き金を引いて、濃縮エアスラッグ・レベル3はその場で炸裂す  
る。その衝撃に耐えられず、俺の体は吹き飛ばされた。

頭を地面に強く打ち付けて、少し顔をしかめる。雪が積もつてい  
たからあまり痛くはなかつたものの、やっぱり少し硬い。

そしてケイスケが俺のもとへ駆け寄り、起こすのを手伝ってくれ  
た。

「うう、いてえ。……そだ、ケイスケ。コンゴウは？」

自分の手で確かめる、と言わんばかりに親指でくいっくいつと向  
きを示す。俺はとりあえず倒れているコンゴウを見て、……深くた  
め息をついた。

「俺たち一人でも倒せるんだ、こんな強い奴でも！」

「なんだよ、今更気づいたのか？　俺は最初つから気づいてたぜ、  
そんなことはよ」

そう言いながら力尽きたコンゴウを捕食し、コアを回収するケイ  
スケだった。

#### 4 · LOSE HEART (後書き)

退場者は早々に。一応弁解はしておぐが、あの人を生かしたいがために彼を出したわけではない。それに、彼がいつ死ぬかは、自分も知らない。

1話で出てきた衛生兵さんにもやつと名前が付きました。彼女は旧型だけど、それなりにストーリーとの関わりはあると思う。さすがに前面に押し出す気はないけれど。

そしてついに次回は彼女の出番！ やつたね！ ちなみにまた新型が追加されてまつ。「またオリキャラかよ……」なんて思わないでよね、バーゲンって書いてるほどなんだから諦めてね！ ……とは言つたものの、その、……ごめんなさい。

それでも、筋だけは通す。矛盾だけは避けたいね、いつの間にかキャラの口調が変わつてたりしてそうで怖い。それが自分のクオリティ。

それでは次回まで。

2342 ラボラトリ廊下

〔睦月ケイスケ〕

「コウタと二人で初めてコンゴウを倒した晩、どうにも興奮して寝付けなかつたから、その辺をふらふらと歩き回つていた。すると、神妙な面持ちで研究室に入つていく宣伝部長を見つける。激しい好奇心に駆られ、ドアに耳でもあてて中の様子を確認することにした。普段の博士と部長のやり取りについて知りたいと思うし。実は意外と仲が良かつたりするんじやないか、と。

「……んー、何とか聞き取れそつだな」

2342 研究室内 (Sound Only)

〔睦月ケイスケ（聴覚情報のみ）〕

『ペイラー。……重要な話があるといふ」とは話したが、』

『「いつも重要な話はあるわ。ほひ、これだ』

（コトーンと、何かを机に置く音。軽い水音も聞こえる。薬品か何かだろうか？）

『これをどうしろと言つのだ？』

『飲んでみてくれ。そして感想が聞きたいね』

『……そちらの重要な話は1つか。私は2つだ、私が先だな  
『飲んで、感想を言う。こっちも2つだよ』  
(わざかな沈黙。ああ、いがみ合つてゐつぽいね。この2人、思つたより仲が良くないかもしだい)

『……何かの薬なのか』

(お、宣伝部長が引いた。博士のほうがもしかして偉い?)  
『ジュークスだよ、まだ名前はないけどね』

(ジュースか。まあ、サカキ博士が薬つてのもあんまり似合つてない気がしたけど)

『はつきり言わせてもらつが、色と臭いからして飲む氣にはなれないな。材料はなんだ?』

『それは企業秘密さ、強いて言つなら何かの感情かな  
(飲み物を飲む音、おそらく宣伝部長が覚悟を決めて飲んだに違いない)

(続いてグラスが割れる音。あまりの味に落としちゃったのかな)

(そして大人の男性が倒れる音。  
宣伝部長――――――――!　おい、博士……毒殺したのか?!)

(　　5分あまりの沈黙。なんか不気味。といふやつぱり殺しあんじや……)

(ようやく大人の男性　　宣伝部長が立ち上がる音が聞こえる。

なんだ、生きてたのか)

『こゝ……これは劇薬だ。……あまりにも、危険すぎる』

『まだ改良の余地はあると見たね。とにかくヨハン、君の用事はなんだい?』

『……なぜ、彼をここへ呼んだ?』

(彼? ……誰かを呼んだ? もしかして、ウイラーさんのことだろうか?)

『君が一人呼んだから、僕も一人呼んだ。それでいいじゃないか? (まあ、たぶんそれが妥当だと思つけど。宣伝部長は納得していないみたいだな)』

『ペイラー、君が何を考えているかはわからないが、……君はステーキザーだろう? 何もする氣はないのにもかかわらず、勝手なことをされても困るな』

(ステーキザー? 超能力者かな? まさか、その力で世界征服を目指して……バカバカしい)

『そもそも、彼がここに極東支部へ来ることは事前に決まっていたじゃないか。彼もこちらへ来ることを大いに望んでいたんだ、君の勝手な都合でキヤンセルするのは酷だろ?』

『こちらにも事情というものがある。そちらを優先するのは、このフェンリル極東支部の支部長を務める、私の権利であり、義務でもある』

『それに君が、伝え損ねたつて雨宮くんに伝えたんだろう、君が認めたつてことじゃないか』

『それは混乱を避けるためだ。認めたわけじゃない。それよりも、』(こんな感じの話が延々と続く。いい加減にしてくれよ、ホントに)

『この話はいったん止めよう。このままだと水掛け論になってしまつよ』

『そうだな。少し時間も遅い、仕事に障りては困る。……だが、いつか時間が取れたら、詳しく話し合おうじゃないか』(まだ支部長はあきらめていないみたい。ちょっとしつこいかも)

(結局、彼 ウィラードさんを呼んだ理由は分からなかつた。  
そして話題は変わる)

『それで、もう一つの重要な話つてのはなんだい?』

『簡単な質問がしたかつただけだ。好きな色・・・いや、ブルーとピンク、どちらがお好きかな』

『そうだねえ.....。ピンクのほうが気に入ってるよ。ジュースのラベルにしてもいいかもしないね。 ああ、そういうばあ、もうすぐだつたね。今年で、何年になるのだつたかな』

(もうすぐ? でも、ブルーとピンクってなんだろ? 花かな?  
花つてことは、もしや )

『その話は、よしてくれ。 .....とにかく、用事は済んだ。さ

て、入口のネズミは、どうしておくかな』

(ドアが開いた)

2349 ラボラトリ廊下

【睦月ケイスケ】

「聞き耳を立てるとは、感心できないな」

「あ、いや、.....そ、そういうつもりじゃあ

「ペイラー、彼にも例のジユースを振る舞つてやってくれ

そう言つて宣伝部長はその場を去る。

「まあ、睦月くん、君に頼みたいことがあるんだ。ちょっと来てく

れるかな」

「いや、『遠慮しちゃいますよ、別に嫌な予感がすると言いつか、嫌な予感しかしないといつか……』

兎にも角にも俺は研究室の中へ連れて行かれて、得体のしれない液体を無理やり飲まされる」となつた。

えも言われぬ味に、意識が飛んだのは言いつまでもない。

## 1108 カノンの部屋

「榎レキ」

台場さんが、自分の部屋へ招いてくれた。どうやら挨拶をしたかったようだ。

「第一部隊は主に私たちが活動してるんです。私と、タツミ君と、ブレンダンさん」

「お前もこの間入ったっていう新入りか？ 何度か会つたがなかなか挨拶できなかつたからな、引きずつちやつて悪かつたな」  
正直気付かなかつたとは言えない。ああ、おそらく口が裂けてもな。

「レキさんたちも、ここへ入隊してもうすぐ一ヶ月ですよね。もうここには慣れましたか？」

「あ、ええ。仲のいい奴もいますし」

「だからといって、油断するのは得策ではないな」

「おいおいブレンダン、あんまりプレッシャーかけないでやれよ、今は任務中じゃないんだからなあ」

仲のいい奴といって、真っ先に思い浮かんだのはフォーゲルヴァ

イデ。なんだかんだ言つて、あいつがいなかつたら俺の心はひとつに折れてたからな。

そして、ケイスケに、コウタ。あいつらとの任務は、結構楽しいと思つてこる。任務を乐しこと思えるのは、こたさか不謹慎だが、な。

「サクヤ上官に、サクヤ上官。サクヤ上官はいろいろなことを教えてくれるから、とても感謝してこる。サクヤ上官は……心から、本当に感謝してこる。

お湯が沸いたのを確認したのか、台場さんが台所まで行った。コーヒーのいい香りがこちらまで漂つてくる。

「そういうえば台場さんは、料理とか得意なんですか？ 自分はどうも苦手なんで」

「これだから温室育ちのお坊ちゃんは。俺の馬鹿、馬鹿馬鹿つ。  
「うーん……正直、ちょっと自信はないんですね。あ、でも今日はクッキーを焼いたんです。おいしいと思いますよ？」

そう言つてコーヒーと一緒におしゃれな皿に入ったクッキーを持つてくれる。

正直、クッキーと言つていいかは微妙な出来栄えであった。見た目はまつつきり言つてオセンベイ（もち米を薄く延ばして焼いたもの、らしい）。[写真では何度か見たが、实物を見たことも食べたこともない）だが、味のほうはどうだろ？

「台場カノン特製、『ボマークッキー』です！ わあわ、どんな食べてください。……あ、なくなつてもまだありますから安心してくださいね？」

「ど、とりあえず大森さんから、どうぞ！」

「あ、ああ。分かった」

先輩の貴録を何とか保ち、大森さんはそれを口にし、……一瞬変

な顔をした。なんと形容したらいいか、

固い？ 固かつたの

か？

「あ、……でも、おいしいな、意外と」

「い、意外とつて！ ひどいですよー！」

そして、つぎにバー・デルさんが口にした。こちらの表情は揺るぎない。そして、それを租借し終え、一言つぶやいた。

「おいしいじゃないか、意外だ」

「ふ、二人に食べさせたのが間違いでした！ もうあげませんから！！ あ、レキさん……、すみません。あとで容器に入れて全部あげますから」

初めて一人に殺氣を覚えた。今度一緒に任務に出たら誤射しまくろう。

「それで、今日からまた新入りが入るらしいんですよ」

「また新入りか。それで、どんな奴なんだろう。できれば落ち着いた人であつてほしいな」

つまり、俺たちの後輩つてわけか。何かちょっとヒドキドキしてきた。先輩らしいところ見せられるかどうか、というのがその心境の大半を占めている。

「ヒバリちゃんから聞いたけどさ、なんでもう3人、そんでもうて全員新型らしいぜ」

「ま、まだ続くんですか、新型ラッショウ？！」

極東支部は他の支部と違い、なかなか新型神機使いに恵まれない傾向があつた。どうやらこの辺りの人種の体質と関係しているらしいが。

実は俺はこの支部2番目の新型神機使いらしい。ちなみに1番はケイスケだ。俺がもう数時間早ければ、とは思っていない。……思つていいはず。

そして3人ときたか。俺たち合わせて5人。他の支部に比べると  
まだまだ少ないのだが。

「なんでも支部長が直々に、一人口シア支部から引き抜いたらしく  
ぜ。あちらさんは新型が多いって聞いたからな。あと、居住地区内  
から一人」

「一人足りませんね」

「忘れないであげてくださいよ、南米地区からも一人来てます、…  
でも、今はまだぐつすり眠っているみたいんですけど」

あのウイラード・カーライル・なんとかという奴もか。しかし、  
起きているところを見た覚えがない。何度も起きているとかそ  
ういった噂はよく聞くのだが。

「その辺はどうなるんだろうな？……ん、おいカノン、密が来た  
みたいだぞ」

「あ、はい」

と、ドアを開けに行って、足を思いっきり滑らせた。

「わっ、きやあああああああ」

そして運悪くドアが開いて、密を下敷きにしてしまった台場さん。  
「む、むぎゅう」

「ううう……、いたたたつ」

「だ、台場さんっ、早く起きてあげてください！ 下の人窒息して  
しまいますー！」

そして我に還った彼女はわっと起き上がる。

「わ、ごめんなさいー！」

「ひ、ひどいですね……。また寝ちゃうんじゃないかなって思つたじ  
やないですか。……おつと、これはこれは改めましてこんにちは、  
夜でしたらこんばんは。つかぬ事を伺いますが、いま何時でしょ  
うか？」

……どうやら例の彼は、ようやく起きたようだつた。とりあえず俺たちは、彼をあいさつ回りよりも支部長室へ連れて行かせた。

## 1148 ハントランス

### 【睦月ケイスケ】

任務をドタキャンしてデートとやらへ行つたリンドウさんに少々突つかつた。

だけどリンドウさんは大人の対応しかしないものだから、なんというかゼリーに釘を刺したような手応えのなさ。

「ほんとずるいですよ、リンドウさん」俺の活躍っぷりを見せてあげたかつたし

「……お前、そんなに活躍してたか?」

痛いところを突かれて言葉に困る口ウタを見て俺とサクヤさんは笑つた。

死神と噂されるソーマという男。……悪い奴には見えないんだが、あまり集団行動を好みにようだ。一匹狼つてやつかな。よく分からぬけど。

「それで、デートに行つてたらしいですけど、どんな彼女ですか? せつかくですから、俺にも相談してくださいよ」

「そうか、……まあ、お前の手には負えないと思うがな まだ食いつくか口ウタ。いい加減その話題から離れる。

突然支部内に発せられる一斉連絡、……俺たちには関係なもしそうだが、リックさんが少々焦っていたのが見て取れた。

「なんだつたんだ、今。……つうなんとかがビウとか。なあ、口ウタは知ってるか？」

「あ、うん。とつてもでかい奴でさ、なんといつか印籠みたいな、」  
「なるほどな、さっぱり分からぬいぜ。サクヤさん、あとは任せます」

ウロヴォロス。

巨大な体躯と、絶大な体力、攻撃力と耐久力、どれに関しても他の多くのアラガミを超越している。詳しくはデータベースを参照、らしいが、聞く限り今の俺たちではまともに戦えはしないだろうな。

「だけど、そういうわれると挑戦したくなるんだよな。まあ、もつと強くなつたら、の話だけど」

「本当に、倒せる時が来るといいな。よし、強くなりたいならもつとおもじるがいいさ」  
「リングドウ、あなた大人でしちゃ？ 子供からたからないの」

俺はふと時計を見る。……むつすぐ正午を回る。そう、もうすぐだ。

「今日からお前らの後輩が入つてくれるといつことだ。しつかりしろよ？」

「先輩つて言つてもほぼ1ヶ月の差じやないの。それに、3人のうちの2人は他の支部からの異動だからあまり気にしないで。いつも通り構えていればいいわよ、あなたたちなら」

気付けば続々とエントランスへ集まつてくる他の神機使い。俺たちが既にいい位置を取つてることを妬んでそうな奴らが垣間見える。

「横、入るぞ」

俺の左へ少し強引に入る奴。……レキだ。どこで油売つてたんだろうな。ちょっと「一ヒー臭い」。

「ああ、ちょっとそこに入るねー」

「ずいっと隙間から俺の右側へ無理やり入つてくる奴一人。

「なんだ、リリアか」

「新しく入つてくる人つて、どんな人なんだろうね」

「少なくとも、俺よりは技量が上だと思つぜ」

そして時間。エレベーターから出でてくるツバキさんと、新入り3名。

「本日よりここにフェンリル極東支部に配属される新人を紹介します、アリサ・イリーニチナ・アミエーラ」

ツバキさんがそういうと、一人の少女が前へ出て、頭を下げる。

「初めまして、アリサ・イリーニチナ・アミエーラです。本日1200付でフェンリル極東支部へと異動となりました。どうぞ、お見知りおきを」

それにして、スタイルはかなりよさそうだ。見た感じ同年代なのに。「ウタは女の子ならいつでも大歓迎だと言い出す始末。だけど、俺はあんまりこういう機械的な奴は好きじゃないな。

「……よくも、そんな上付いた考までここまで生きてこられましたね」

ほれみる、そおらみる。俺の思ったとおりだ。向こうも脈ありには到底見えない。ざまあみる、コウタ。 つと、悪乗りしきぎた。

「次、ウイラード・カーライル・シャムロック」

「えつと。どうも初めてまして、ウイラード・カーライル・シャムロックです。……長いから以下同文でいいですね。名前も長いので、ウィルで結構です。とりあえずよろしくお願ひしますね」

レキほど堅苦しくもない、丁寧な口調（だけど、一人称は俺じゃ

なかつたっけ？）。それでいて、俺よりは整つてゐる顔（ちょっとだけだ、絶対ちょっとだけだからな！）に、爽やかな感じが万人受けしそうだ。

「とりあえず、よろしく」

俺はウイラードさんに握手を求める。さつきの女には拒否された

が、彼は快く受けてくれた。

「どうも、『初めまして』こんなに私は」

「えつ？」

「えつ？」

わざかん疑問を覚えたが、何でもないと言つてその場をどうにか取り繕つた。……『初めまして』じゃ、ないはずなんだが。

「最後、橋越ルカ」

「ルカです。橋越ルカ、以下同文、どうぞよろしくお願ひします！」  
大声。活発な感じだが、なんだか地味に擦れた感じがする。見た目は、俺たちよりかなり年上な感じ。ソーマと同じくらいの年齢かな。やっぱりコウタは喜んでいるようだが。

「それじゃあ俺からよろしく」

勇敢にもまず一番にコウタが握手しに行つた。……一瞬彼女の顔が強張つたように思える。もしかして受け付けなかつたのか？あ、でもちゃんと握手してる。一体何がどうした。

紹介が終わつて、だいたいの人が帰つていつた。んー、野次馬が多いつたらありやしない。

「橋越はメディカルチェックを行う。時間は分かっているな？」  
「はい、分かつています」

「……あと、シャムロック。榎博士が呼んでいる。すぐ来てくれ、とのことだ」

「え？　はい、分かりました」

そして、ツバキさんはエントランスを離れた。

「　　シャムロックさん、早く行つた方がいいんじゃないですか？」　時間がかかると橋越さんが迷惑なので

「それじゃあそろそろさせてもらいます。時間がかかつたら、すみません。……ところで、研究室はどうでしようか？　あまりこの支部の構造に詳しくないので」

俺たちが案内に名乗り出たが、結局（なぜか）ソーマが一緒に行くことになった。

「なんで俺が……」

「当たり前よ、あなた先輩なんだから」

そう言つてサクヤさんは軽くソーマの背中を叩く。彼の頭の血管が少しきれそうになつていてるようを感じたのは言うまでもない。あの人沸点低いから、途中で切捨御免みたいなことになつていなければいいけどな。

## 1207 研究室

### 〔ウイル・シャムロック〕

「わあ、ここがサカキ博士の研究室ですか。やつぱり極東支部は進んでますね」

「あ、来たようだね。君は予想通りの時間に来てくれたと思ったよ。彼を送つてくれたこと、感謝しているよ」

「む、やつぱり舌打ちする。この人はそういう性格なのかな。」

…だけど、少し前の『彼』に似てる。

「とりあえずありがとうございました、えつと、……お前はなんですか？」

「ソーマだつ。へやつ、お前といふと調子が狂つ  
これは独特的のシンデレモードといつヤツかな？ そんなわ  
けないか。あれ、出て行つちやつた。

「ところで、話つてなんですか？」

「個人的に神機使いがそれぞれどんなパラメータであるかを調べた  
いだけ。ちょっと調べるだけで終わるよ」

「個人的つてところがブラックで、素敵ですね。それに話じやあり  
ませんし」

眼鏡がきらりと輝く。まるで悪の科学者みたいでかっこいい。直  
接会つたのは初めてだけど、自分の思ったような人とあまり変わら  
なかつた。

「とにかく、博士。その節はどいつもありがとうござます」

「いきなり感謝だなんて、どうしたんだい？」

「……ボクは博士がいなかつたら、きっと生きていられなかつたで  
しょうから」

分かつてくれないようなそぶりをわざと見せるものだから、  
ボクはポケットから『それ』を出してみせた。……『それ』を見て  
にやりと博士は笑う。だからボクもにやりと笑い返してやつた。

「そういうえばアミエーラさんに早くしろつて言わされました。橋越

さんのために急いでくださいね」

「というわけでベッドへ行く。寝ていればよかつたんだつけ？」

「じゃあリラックスして、しばらくは寝ないでいてほしいね  
「すみません、それはできないかもしれないです」

残念ながら盛大に一度寝を開始する。寝る」と云ひ気持ちのことはないからね。おやすみなさい。

## 1502 第一訓練所

【橋越ルカ】

訓練所。うわー、広い。<sup>面積</sup>面官がいなかつたら詳しく述べられたのになー。

「わたしとアミーハーさんだけですか。シャムロックさんは訓練しないんですね」

「彼は3年間南米支部で活動していたらしいからな。アミーハーさんは確か・・・」

彼女は、しばらく任務に出ることがなかつた。だから仕方なくこの訓練を受けてくる。そうだが、彼女は最初必要ないと言つたようだ。

「じゃあアミーハーさん、よろしく頼みますね」

「もう少し大声で返事をすると思つたら……。とにかく私の足手纏いにならないよう、お願いします」

「あっちやあ……。やっぱり大声での印象付けは難しかつたかな。ただ、彼女の性格に対する小さな怒りが生まれかけていた。

「訓練はおよそ三日かかるが、ちゃんとついて来れるか?」

「……それじゃあ、一日でお願いします。彼女にもあまり『メイワク』かけたくないんで」

もちろん雨宮上院はそんなに簡単なことではないと言つた。

「だけど、わたしは追いつくためなら、どんな努力も厭わない。いつか強くなつたら、うん。とにかく今は頑張るしかない。い

「分かった。橋越がそう言つなら仕方がないが、アミエーリ、異論はないな？」

「ええ。私もそちらのほうがこんな面倒なことに付き合わされないで、非常に助かります」

「いちいち上から目線だ。好きになれそうもないな。せつか同期でここへ来て、そのうえ同性だから会話が合つかなあと思ったのに。」

「それでは、三日分の訓練を今から纏めて行おう。まずは攻撃、変形、バレット、ガード、道具の使用方法。これらの基本動作ができたら実践の一環としてオウガテイルの討伐任務に出でもらひ。そして、中型以上のアラガミへの対処法も指示する。これをすべて一日で行うため、少しの遅れが大きなタイムロスにつながる。早急に行うように。以上だ。いいな？」

「了解ですっ！」

1105 自室

### 【睦月ケイスケ】

「片付けられるつていいですよ。ボクはてんで駄目ですか？」

「彼がウイラードさん。ここへ彼が来るのも一度目のはずなのだが、彼にとつてここへ来るのは初めてのようだ。そもそも、それを確かめるためにここへ招いたんだ。だから、思い切って聞いてみることにじよう。」

「ウイラードさん。……ここへ來るのって、2度目ですよね？」

初めてじゃ、ないですよね」

「君が初めてつていうのなら初めてでしょ」「、2度目つて思つたのなら2度目ではないでしょ？」

はつきりしなり。自分の頭で考えると言つてゐるよ「」と思えた。「あと、ウイルつて呼んでくれていいですよ。長いでしょ」「」。それに、同年代だから敬語なんて使わなくて結構ですよ」「あ、……うん。その、……ウイル」

「とりあえず、何か飲み物持つてこいつか。あ、コーラとサイダーがあるけど」

「サイダーで。サイダー『が』いいです。……ボクの言つてゐる」との意味は、分かりますよね？」

……この人、サイダラーか？（註：サイダラー＝サイダー＝愛好家）サイダラーはコーラーをどうも田の敵にしているとかなんとか。

（註：コーラー＝「コーラ＝愛好家」）

「はいはい、分かりました。ついでにいろいろと話聞かせてほしいです、南米地区の話とか」

「……そうですね、まずは初めから」

「……これが彼が語りを始めようとしたところで、ノックもなしにドアが開く。げつ、あのタカビー女じやねえか。

「あ、アミエーラさんですか。どうかしましたか？」

「どうしたも」「」ついたもありませんつ、メールちゃんと見ましたか？」

？」

「メール？ なんですか？」

タカビー女はとぼけないで下をひと蹴する。

「南米支部にはそのようなものはなかつたので。世界はすぐに進むものなんですね」

「だから、これから任務へ行きますよ……」

「そうなんですか？ ケガをしないように頑張つてくださいね」  
「うわあ、天然というかこれ、わざとじやないか？ ……恐ろしい子っ……！」

とうとう痺れを切らした彼女は、ウイルの襟首を掴んで引きずつていいく。

「わ、わ、何するんですかっ！？」

「いいから行きます！ 文句言つたら殴り飛ばしますよ？！」

「ど、とりあえず一人とも、頑張れよ……」

本当に、ただ手を振るしかなかつた。

## 1410 ハントラанс

### 「ウイル・シャムロック」

「連れてきました。本当にこの人つて、自覚が足りてませんね」

「自覚はちゃんとありますよ。ただ、少し寝不足なだけです」

「おい、あんなに寝ていたのにか？」

雨宮隊長に突つ込まれた。ボクは半月ほどぐつすりだつたそうだ。

……少なくとも、『ボク』は寝ていたみたいだけど。

「さて、初任務ですね！ なんか戦争ゲー ゴホゴホ、潜入取材みたいでめちゃくちゃ楽しみですね」

「何言つてるんですか！ これから戦いは取材とかじゃないです

よ？ それにあなた方、本当にやる気があるというんですか？！」

「そりやもちろんありますよ。10体でも100体でも何体でも蹴散らしてやりますってば」

「やる気がなければ、このような場所へは来ずに寢ていますから、空気がちょっと痛くなつてきました。アリエーリさん、怒つてるみたいだ。

「さ、さて行くとするか。とにかくで、今回の任務の討伐対象は分かつているな?」

「シコウ2体です。シコウレーショն通りにいけば、10分も時間はかかるないでじょ。……あなたがたが足を引っ張りさえしなければ」

「シコウレーション、ですか。本当にそのまま行くといこんですけどねえ、あなた一人で」

雨宮隊長は困っているみたいで正直不安だ。確かに、困ったさんがここに一人もいるのだから、相当大変だと思つた。

「お前もだ」

「そりなんですか?」

## 1512 贖罪の街

〔橋越ルカ〕

昨日の訓練の疲れはすっかりとれた。さすがはわたし、といったところかな。体力には結構自信あるし。あ、でもほとんど栄養ドリンクのおかげのような気もするけど。

「……緊張、しますね。収まつてほしいですよ。どうにかなりませんか?」

「わ、私に聞かないでくださいよ、聞くならあの田型の隊長にお願いします」

旧型の隊長、ね。ひどい言い種よ、ほんとに。田型って言

つても隊長じゃないの、ちゃんと敬意を示さなきゃ。

「　　おい、ウィル。起きてるのか？」

「……あわわ、すみません。寝かけてました」

隊長は隊長で大変そうだなって思つたけど、一番大変のはどう見てもアミニエーラさんっぽい。わたしもちよつと心配そうに見られてるみたい。そりやわたしがこの中で一番実戦経験ないけどさ。ちゃんと訓練は一通りやつたから大丈夫だつて。……自信ないけど。

「それじゃあ行くとするか。じゃあ、お前らに大事な命令を、」

「結構です。　　旧型は旧型なりに頑張つていただければいいので」

「なんて横柄な態度なの？　わたしもいい加減堪忍袋の緒が切れそ  
うだつた。」

「おいおい、そんな言い方しなくてもいいじゃないか」

それでも隊長さんの対応は大人。将来はこんな旦那さんがほしい  
な。　　わ、やだ、何考えてるんだろわたし。

アミニエーラさんをなだめるように隊長さんは、彼女の肩に手を置  
いた。

「きやつ？！！」

すると彼女は何かに憑かれたかのように、その手を払いのけて飛  
びのいた。……その眼には、恐怖の色が感じられて、ますます彼女  
が何を考えているのか分からなくなる。ただ言えることは、彼女が  
男性に障られることを嫌つてはいるわけではないこと。

そして彼女もまた、自分が何をしたか気付いたようだった。

「　　す、すみません。……取り乱してしまつて」

だけど隊長さんはそれを咎めることはなかった。彼は優しく彼女  
に言う。

「混乱した時は、空を見るんだ。そんで、動物に似た雲を探すんだ。

……そうすれば万事どうにでもなるさ。それじゃあしばらくそういうのいいといい。行くぞ、ウイル、ルカ」

「了解です

「……あ、はい」

わたしは隊長を追つて走り出して、一度彼女を確認するために振り返る。

彼女は素直に隊長の言つことを聞いて、空を見ていた。性格は、そこまで悪くないかも知れないと感じた。

ターゲットを探していると、マップに赤い丸が表示される。向こうがこちら側を確認したようだつた。

「やつと出てきたか。じゃあ一人とも、援護はしつかり頼んだぞ」「了解です！…………って、あれ？」

シャムロックさんがポツリと立ち止まつてゐる。まさか寝ているんじゃないだろうか？ 立つたまま寝るとか器用だなあと思つた。もちろんそんな特技はほしくない。

「あの、シャムロックさん？ もしもし、聞いてますか？ 気を抜いたら危ないですよ」

「

彼は皿をつぶつていた。やつぱり寝てるんじゃないか。とりあえず早く起こしてあげようか。

……だが、彼はゆっくりと口を開く。

「なア、……誰が気を抜いてるんだ？」

「え？」

彼は重みのある声で呴いた。なんというか、雰囲気ががらりと変わったような気がする。先ほどまでの彼とは違う、なんだろうか。なんと形容すればいいのか……？

「「ひ、「ひおおつとー わいお前ひつー！ いい加減に援護をしろー！」

どうやら火球に手間取っているようだが、遠くで見ていると少々動きが滑稽に見えた。……たぶん面と向かって言つたら「ふつ飛ばされると思うけど。

「とにかく、あいつをボロボロになるまで甚振ツテブチ殺れ、ツてことだろ？ 了解了解」

そう言つて彼は神機を構える。やつぱり何か違う。先ほどまでの落ち着いた寝坊助の彼とは違う、好戦的な人。

…………そして勢いよく走り出して、シコウの手前で踏み込んで、胴に一太刀浴びせる。そして振り返りざまにもう一太刀。……彼の神機の刀身はどう見てもショートである。だが、この動きはロングのそれと同じであった。かと思えばショート風に切り上げ、バスターのコンボ締めのように剣を叩き下ろす。

「我流つてやつかな。 なんというか、破天荒ね」

そんな無茶苦茶な攻め方でも、あちらの攻撃を完全に避けているところから見て、あくまで完成形のようだった。

「つて、見てる場合じゃないか。わたしもそろそろ援護したほうがよさそうね。よーし、張り切つていこう！」

わたしは背後のアラガミに気付かなかつた。そしてその腕翼がわたくしの体を覆つて、

「気を抜きすぎです！ なんで気づかないんですかっ？！」

遠くからレーザーが飛んできて、その弾はシコウの頭部を貫通し

た。血が体にべつとりと付いたが、シコウが一瞬怯んだところでなんとか戒めを解いた。うう、気持ち悪い！

「あ、『」めんなさい。ちょっと、あなたのこと本当に遅いなあ、遅すぎだなあと思つてたところで」

「結構です。それより、旧型の隊長は、今どんな状況ですか？」

「シャムロックさんが援護しているみたいですね。……任せておけば大丈夫ですよ」

無論、彼女はそれを信用できていなかった。だからこそ、彼の戦っている様子を見て、先ほどまでの様子とのギャップに相当驚いているようだ。

「それじゃあアーミーハーフさん。『』いつまほじつちで、倒してしまいましょうか」

腕組みをして挑発するシコウ。そして攻撃の構えを行つたのを確認してから、遠距離からのホーミング火球を紙一重でかわす。

「足を引っ張らないようにお願ひしますね」

「あなたこそっ！」

わたしは剣形態に切り替え、昨日習つたとおりのことを次々と行ってみた。少々ぎこちないけど、一人がかりなら何とかなりそうだ。

『橋越、なかなか物事の呑み込みが早いな。こういったことは得意なのか？』

『まあ、好きこのものの上手なれつてやつですよ。やうじやなきややる気ないですから』

なんだなんだ、シャムロックさんと微妙に思考回路が同じじやないか。ちょっとショックだ。

## [ ルートコンドウ ]

「俺が援護される側なんだが」

彼 ウィルの剣技は、それぞれのスタイルをミックスした、よく言えば独創的な、悪く言えば滅茶苦茶なものとなつていて。一体誰に教わったのか、じっくり聞いてみたいものだ。それよりも、困つたことに完全に立場が逆転してしまつた。

「おいおこどりしたよオ、もッと強く抵抗したらどうだ、えエ？」

彼が先ほどまでのおつとりした奴と同一人物だと聞かされても、俺はまず信じない。まるで我忘れてしまつてゐるかのよつだ。

「おい、ウィル。そろそろ下がれ」

「やなこッた。こいつが、こいつが仇だッたらどうするんだよ？ オレの手でケリをつけなきや、いけねエンだよ！」

彼の戦いにおいての冷静の一文字が、徐々に失われていく。先ほどまでは積極的に攻撃を避けているように見えたが、だんだんと傷つくことも厭わなくなつてきたようだ。それにしても、先ほど言ったことが引っかかる。仇とは、一体誰の仇のことだろうか。

「つおりやああッ！ ……へへッ、見事な血しづきじやねエか！ ……これぐらじ出してくれねエと償いにはならないぜ？！」

顔中にべつとつと付いた血を服で拭い、小さな笑みを浮かべる。

軽い狂気を感じた。やはり彼を、止めるべきだ。

「おこウイル、少し頭を冷やせ。自分の体の心配ぐらじ、自分でし

たらどうなんだ

「そいつはどこの誰の撃だよ？ オレはオッサンの撃通りに戦ツてるだけだ。『殺るなら最後まで積極的に、人を呪わば穴一一つ、サチアンドテストロイ』 ツとな」

どんな撃だ。最後のサーチアンドテストロイだけがとても浮いているぞ。

「とにかく少し落ち着いたほうがいい。アラガミにどんな怨みがあるかは知らないが」

「やだね。オレはあんたのことを気に入つてはいるけど、生憎信用はしてないからな」

……気に入られているのか。悪い気はしないが、……これまで会つて話したことなどないというのにな。

再び彼は戦いだす。……彼の体もボロボロだが、それ以上にターゲットのシコウもひどい。頭部、腕翼、下半身、全てが結合崩壊を起こしている。……とにかく3年という年月以上の実力は確かに備わっているようだ。

だがしかし、一つ疑問が生じる。それは、彼が一度も捕喰を行っていないところだ。新型の神機使いは通常、リンクバーストなどを用うために適宜捕喰を行う。そうでなくとも、バースト状態の恩恵は大きいため、隙あらばチャージ捕喰を、攻撃の合間を見計らってコンボ捕喰を行うはずだ。だが彼は、その両方とも行おうとしない。自分に課したルールか、はたまた撃とやらか。

「…………はア…………はア…………あばよツ、奈落の底へ帰れよツ、そして一度と戻つてくんじゃねエ…………」

シコウは倒れ、動かない。どうやら終わったようだ。結局、彼の独擅場となってしまった。

彼の血走った目と、その口元に浮かんだ歪んだ笑み。

　　彼が

ウイラード・カーライル・シャムロックと一致しない。彼のアイデ  
ンティティそのものが、揺るがしていった。

1520 膳罪の街

〔橋越ルカ〕

「ふう、ようやく終わったみたいですね」

「にじりと、戦闘を始める前のいつもの笑みを浮かべるシャムロックさん。

だけど、体はボロボロなつゝ、顔にべつとつと付いた黒血  
が、拭われないでいて少し怖い。

「だらしないですよ。ほら、タオルです。……古くなつた奴ですか  
らあげますよ。汚された奴を返されても困りますし」

「わ、ありがとうございます」

彼はタオルで顔を拭くけど、ただ血を塗り広げているようであま  
りきれいにはならぬようだつた。

「……あ、橋越さん」

「なんですか？……あつ、説教はよしつかることよ、慣れてるつち  
や慣れますけど」

わたしが少し身構えたのを見て、怪訝な顔をする。もつ、何が言  
いたいのよ？

「あなたも自分の顔拭いたらどうですか？ シャムロックさんとのこ  
と笑つてる場合じゃありませんよ」

「べ、別に笑つてないです！ といつかえませんから」

それは彼女もごもつともだつたようだが。とりあえずポーチから  
ハンカチを取り出して拭いた。うう、べつとりと付いてたよ、汚い

なー。

「動いたから少し眠たくなつてきましたね。といひで、ヘリはいつ来るのでしょうか？」

「そう焦らなくてもヘリは来る。……ほら、来たぞ」

隊長がそう言ったのを聞いて、わたしは空を見上げる。そこにはボディーを黒光りさせながら、一いちらへ近づいてくるヘリがあった。……わたしはその時初めて、昨日の訓練とは違う何らかの達成感を感じたような気がした。

## 5 · REINFORCEMENT (後書き)

新型を大量投入した結果がこれだよ！　ああ、まさに力オス。と  
いうか、この中に本編の主人公みたく悩みも何も抱えていない奴つ  
ているのかな。

はつきり言つてこの話の主人公はケイスケ。他の3人のオリジナル  
ル新型は、いろいろ問題を抱え込んでる奴ら。どんな問題かは、の  
ちのち明かされていくだろうけど。

とりあえず、目標の『アリサを出す』はクリアしたぞ！　という  
わけで次の目標は……『オオグル（以下省略  
それでは次回まで。

1658 ハントランス

【睦月ケイスケ】

「……あ、あの。本当にすみません……」

「フォローのしようがない。というか、正直言つてクタクタだ。

「何とかなりませんか？」

〔誤射〕

「カノンはこういう奴なんだ。だが、それがある意味個性とも言えるがな」

ブレンダンさんはそう言つたけど、さすがに賛同できない。

ちなみに、俺、俺たちは任務で愚者の空母といふところへ行つてきた。討伐対象は「ンゴウ」一體。一體でも少し手間取つたというのに、それが二体とは泣かされる。だけどさすが経験者だ。ブレンダンさんとカノンさんがすぐに倒してしまつた。もちろん俺とレキも攻撃したよ！

ただ、弊害かどうかは知らないが、カノンさんが爆発・放射系のバレットをよく使うおかげで俺たちがよく吹つ飛ばされた。これがもし実弾だつたら確実に殺人鬼と化すね、うん。

ちなみにレキの方はリンクエイドを俺に何度もしてくれたせいか、倦怠感を訴えて寝込んでいる。まだまだ、俺たちも強くならなきゃダメってことか。

……それでもレキ、なんであんなに積極的に俺たちのこと、守るようになったのかな。

「もうでした、おわびにクッキーでもどうですか？　お口に含めればいいんですけど」

「煎餅だ。クッキーじゃないぞ、これは。でも匂いは甘い。おかしいな？」

「んぐむつ、固い！…………あ、でも意外とおいしいや」

「うー、タツミさんたちと同じ反応しましたねーっ！　やっぱり男の人に食べさせるべきじゃなかつたです！」

急に怒りだした。感情の起伏が激しい人だな…………俺のせいだけど。とりあえず謝ったけど、機嫌を直してくれそうにならない。参つたなあ。

「あ、あいつらが帰つてきたみたいだ。

「ただいま戻りました。ふわあ…………よく寝ましたよ」

「よく寝たつて、本当に『ハッディーター』の直覚あるんですか？　ドン引きです」

帰つてくるなり喧嘩かよ。しかし、喧嘩とこには一方的過ぎるな。タカビーの方はウィルにキツイ言葉を浴びせているが、ウィルはそれを素直に聞き入れたり、のらりくらりとかわしたり。

結局、そんなウィルの手応えのない態度に呆れ、彼女は拗ねてしまつた。

「あ、そうだ。あの、ウィルさん。クッキー焼いたんですけどどうですか？」

「そういえば、ウィルの食べ物の嗜好とかは聞いたことがないな。結構舌が肥えてるのかも。」

「わあ、おいしそうですね、…………これは煎餅でしょうか」

早速案の定。天然なのがどうかはこの際どうでもいい、凍つたよ、空気が凍ついたよ！

「…………と、とにかくクッキーです！　味は、味はどうです？」

「うわあああ、よしなよ、自殺行為だって！　絶対ハートに穴が開

くよー。

「ちゅうどいい甘さです。おいしいですね……って、あれれ、もうなくなりちゃいました。もうちょっと食べたかったですよ」

「……あ、……はい。どういたしまして……」

あれ、意外と普通に回答を返した。やはり天然なのか、いや、実は粗つて言っているのかも……。もしそうだとしたならば、処世術でも身に着けているのだろうか？　とつあえず、今度詳しく聞いてみたいものである。

1715 研究室

【橋越ルカ】

その日は講題。『アラガミと人間の共生について』がテーマだ。まずは一步身を引いて、聞くことだけを意識しよう。わたしが話し出したら相手のタイプが全く読めない。

「犬、か。昔家で飼つてたんですけど、結局寿命が来てしまって。

……それで、アラガミとどういう関係があるのですか？」

「おー、「ウタ、起きろよ」

「もう食べられないよ、かーちゃん……」

「……本当に、だらしないですね」

「

とりあえず、全員の印象を一通り確認してみようかな。

えっと、まず神さん。フルネーム、神レキ。他の人と見比べてみ

ると、一頭秀でた感じが見受けられる。だけど、結構心と体の両方が打たれ弱そう。まあ見た通りの人物と言って差し支えはないかも。だから心に留めておくべきことは一切なさそう。

しかし、彼が神という苗字を持っているところには、もしや博士と何か関係が？ そう思つて後で聞いてみたけど、別に縁はないそうだ。少し考えすぎたか。

次に、睦月さん。フルネームは睦月ケイスケ。彼はこの前テレビで見たような気がする。……別に有名人とかそういうことじゃなくて、極東支部のCMの活動風景の一部で。

誰とでも友好的になれる感じがする。それでいて、人一倍正義感を持ち合わせている。だからリーダーとしては理想的な感じかな。もつとも、他の部分は平均的だけど。まだ平均以下でないだけマシか。

とはいっても、今のリーダーは隊長……西宮リンドウ氏で、彼がリーダーになるのはまだまだ先になりそうだ。それに、彼はまだ若いからね。……あ、わたしも十分若いですよ、まだ華の十代は終わってない！ 十八をなめるな？！ ……と、一体誰に向かつて叫んでんだろ。

藤木さん。フルネーム、藤木コウタ。アミエーラさんの言つとおり、だらしない感じがオーラとして出ている。オーラがどんなものかは知らないけど。

でも、抜けてるように見えて意外と洞察力は高そうに思える。それが発揮できるのはいつになることやら。先はまだまだ遠い。彼は母と妹との3人暮らし。父親はどうしたんだろう？

たぶん、触れてはいけない領域かもしれない。……だからこそ、よく調べてみたい。趣味とか、特技とか、好きなものとか、あ、何考えてんだわたし。

それで、アミエーラさん。フルネームは確か、アリサ・イリーニチナ・アミエーラ。ロシア支部から来たけど、入隊して一年ほどしか経つていなそうだ。

まず、高飛車な感じがする。その点は睦月さんはとても嫌つてゐるようだ。あと、結構人のペースに合わせるのがうまそうだ。そのせいか・シャムロックさんといふときはペースがガタガタになつてゐる感じが強い。

でも、高飛車な人ほど、心に大きな量りがあるということを経験上よく知つてゐる。彼女の『シガラミ』は、一体なんだろうか。それに、彼女の家族構成とか来歴とかは入隊時期以外何も知らないから、よく調べてみたい。

最後に、シャムロックさん。こっちのフルネームは、えっと。確かに、ウイラー・カーライル・シャムロックだったよつた氣がする。名前がやたら長い。

普段の彼はとても丁寧な態度を取つていて、特に問題はなさそう。だけど、一週間前の任務での戦闘のときのように、態度が急に豹変することがあるかもしれない。

あの時の言動は確実に普段と逆転している。解離性同一性障害だろうかとも考えたが、それを確かめる術は今のところない。というか、彼についての情報はアミエーラさん同様ほとんどない。ようするに全く知らない。このわたしがここまで知らないを連発するなんて……。

それにしても彼はよく寝るな。  
　　と思つたら、やつぱり今も寝てた。

今のところこの五人に對する印象はこんなものである。一人としてまともな奴がいないうつな気がする。やつぱりわたし가一番まともだわ、うん。

「……そんなんじろじろ見るなよ、どうしたんだ？」

「あ、いや、別になんでも」

で、ようやく今回のテーマの核心についての質問が出た。すばり、『アラガミと人は共生できるか』。

……できたらいいけど、現実問題として考えてみたら、やはり難しい。……これは主観的意見。

「じゃあまずは、睦用くんから意見を聞こうか」

「お、俺ですか。……俺は、できると思う。いや、できたらいいな、かもしねいけどな。……でも、そうなつたらきっと、幸せだと思う」

理想論、か。主観的意見をそのまま口にしちゃうなんて、まだ彼も幼いようだ。物事には本音・建前が必要なのにな。……まあ、子供だから、今のうちに言えることたくさん言っておいた方がよさそうだ。そのうち、そんなことさえも言えなくなってしまうのだから。……わたし？　わたしは子供だからズバズバ言つてるけどね。

「次は、榎くん」

「……無理ですね。第一、アラガミとは人類の敵です。……アラガミは人を捕喰しますが、人はアラガミを捕喰できない。対等な関係が持てない以上、人が待つのは死しかありません」

常識を語る。それが一番いい回答かもしれないし、頭が固そうな発言になるかもしれない。……彼は普通の大人かもしれないし、そういう叩き込まれたロボットのような人間かもしれない。そんな二面性の垣間見える回答。彼は、前者であつてほしい。

「次に藤木くん、君は寝ていたみたいだけど、答えられるかな」

「そ、そりゃあ、えつと。……俺は無理だと思うかな。だって、いつも、みんなに危害が及ぶかわからないし、今は家族を守ることしかできないから」

……まず問題に触れることができない。そう、現状の問題はまだたくさんある。一つの問題に着目しただけでは、他の問題を解決することは困難だ。その点ではいい回答をしてくれた。

「じゃあ、アミエーラさん……」

「できません。人とアラガミが共存なんて……不可能、不可能に決まります」

彼女のそれは、……思考停止。最もわたしが嫌つていて、そして恐れている回答。まだ理想論を語ってくれた方がよかつた。ただ頑なに否定するだけでは、何も始まらない。逆にイエスマンを気取れば気取るほど、自分はドツボにはまつていぐ。

「おや、シャムロックくんは……」

「……く、くあああッ……。あー、起きたぜー」

静かに寝ていたせいか、誰も彼が寝ていることに気付けなかつたようだ。……だが、いつもの彼とは雰囲気がどこか違つことに、彼らは気付く。

「それじゃあ君は、アラガミと人間は共生できると思うかな?」

「できるな、絶対に。俺はどこの思考パターンを停止したやつとは違うからよオ、ここでそう確信できるぜ」

「だ、誰が思考停止したんですか?!」

「え、もしかして起きてた? そう思えるほどの的確な回答。そして、喧々諤々のディベート風味の口喧嘩。いつもの彼とは思えない様子に、わたしたちだけでなく、争っているアミエーラさんまで驚いている。

それにしてもこの一人、なんか仲が悪いんだよね。喧嘩するほど仲がいっていいし。……んー、お互い気があるとか?

「なあ、ル力さんよ。お前の考えてることはだいたいわかるが、さ

すがにそれはない。さすがにそれはない」

「だからって一回も言わないでください、女心が傷物になつたらどうしてくれるんですか。お嫁に行けなくなつたりどう責任取るんですか?」

恐らく、二人の言い争いはまだまだ続きそうだ。……しかし、わたくしたちが驚いている中で、サカキ博士だけが冷静だつたことに違和感を覚えた。

## 1732 贖罪の街

### 「ソーマ」

……討伐対象はすべて沈黙。これで任務は終わつたし、ヘリもすでに到着している。

……さて、帰るか。

「……?」

氣配。これは、……アラガミ? いや、人か?

「誰だ? ……そこに、いるのか? ……?」

返事は、……帰つてこない。当たり前だ。俺以外に、人がいるわけが、

うふふ、あはは。

「 !?」

笑い声と、素早い足音。何かが駆け抜け抜けていった。……教会の中か？！

「誰だ、いるのは分かつていいるー」

突然、足音がぴたりとやんだ。……だが、気配はまだ残っている。

恐る恐る、教会の中へ入り、……ゆっくりと辺りを確認する。しかし、そこには誰の姿もなく、気配もすっかり失われていた。

「ふつ、……氣のせいかな？」

……俺は結局、そのまま帰った。

そこに、人影があることに気付かず。

そこで、惨劇の芽が育まれていることに、気付かず。

0921 自作

### 【陸月ケイスケ】

なんだかんだ言つて何事もなく一ヶ月といつ短いよつで長い日々が過ぎて行つた。

鉄塔の森で、リンゴウさん、サクヤさんと協力して巨大魚、グボロ・グボロを相手にした。あと、マグマ溢れる地下街で熱い（暑い？）思いをしながらシコウという鳥人間っぽいやつを相手にした。ウイルとも協力したけど、あの時のような豹変を見せることもなく、ただ冷静に、スタイリッシュにアラガミを討伐していく。やはり、武器の性能云々ではなく腕の問題なわけか。もっと鍛えないよ。

……ちなみに、俺たちはお金がある程度たまつたから武器を新調した。もちろん服も新しいのを購入。おしゃれ感が少し高まつたような気がする。風通しも良くなつたしちょうどいいな。……でも、戦闘服ばかりじゃなくてもうちょっとカジュアルなものが着てみたいと思うのは、わがままだろつか。

そして今日は、ガーガジュラというまたまた中型のアラガミを相手にするらしい。一度ミッション中に見かけたことがあつたが、討伐対象外となつていたため見つからないように任務を遂行した。だから、どんな攻撃を仕掛けてくるかは俺は知らない。

「さて、準備完了……あれ、あいつらは……」  
ドアを開けると、タカビーとウイルが一緒にいた。なんで一人でいるんだろう？

ちなみにあいつらは同行メンバーではない。どういう選考基準かはわからないが、コウタとサクヤさんとソーマの3人と俺でミッションに出ることとなつた。

昨日はリリアの奴が、一緒に任務に同行してくれた。……とは言つたものの同行メンバーはサクヤさんとカノンさん。そこにリリアが加わる。なんだなんだ、全員衛生兵じゃないか！だからたぶん彼女が一緒に行くと言つ出したのは、それが狙いだったのだと思う。  
……『たぶん』、だが。

「それにしても、何を話しているんだろうな？……気になるからちょっと失礼」  
ミッションまではまだまだ時間はある。部屋のドア越しにじりくへり聞かせてもうひとつするか。

【睦月ケイスケ（聴覚情報のみ）】

『シャムロックさん。あなたは、どうこう理由でここに？』  
『ここにいていうと、……要するに、どうして俺がゴッドイーターになったかってことだよな？』

（いつものウイルじゃない。この前の講義の時と同じ感じだが、ちよつとかしいな）

『はい。……まさか、ないとは言わせませんよ？』

『ああ、ちきょッ。三つもりだったのに。……まあいいか。ちよいと長くなるぜ。』

俺にもな、人生を悲観して、すべてを怨み殺したくなつた時があつたわけだ。まあ誰にも分からぬだろうし、理解してほしいなんてこれっぽっちも思っちゃいないが。

そんな時、オッサン 世話になつた奴だ。俺にとつては親父みたいなやつだよ、そいつに助け出された。それで、そのオッサンがゴッドイーターだつたわけだ。

……でも、本当のことを言つとしたならよ、……これは、復讐のためなんだ。俺から大切なものを奪つていきやがつたあいつらを、許す気にはサラサラなれねエから。だから、それまで俺は死に場所を探して、彷徨い迷つてるだけだ。……本当に正しこうかとも分からねエしよ』

（わずかな沈黙。……彼が、ウイルが。軽い気持ちで、ゴッドイーターをやつていいわけではないことが、とてもよく分かつた。だが、彼にとっての大切なものとは、なんだろう？ 家族？ それとも友

人？）

『あの、シャムロックさん。……あなたは、全てが終わつたら、生きたいんですか。……それとも、』

『生きたい、いや、俺を生かしてくれ。でも、生きられない。だから死にたい、死なしてくれ。……だけれども、死にきれない』

『それって、ただ死にたくないだけじゃないですか？』

（意表を突いたような発言に、虚を突かれるウイル。生への執着ほどわかりやすいものはないからな）

『……ああ、そうかもしだねエ。死ねない、まだ死ねねエよ。死ぬ気なんて一切ないぜ。もしも俺に、生きることが許されるのなら、な』

（生きることが許される……？ 普通、生きる生きないは個人の自由（いや、生きないは絶対に誰も許さないか）だ。だけど、彼の言葉はあるで、世界が彼の生きることを望んでいない、むしろ彼に死を迫つてこようで。……ますます、彼のことが分からなくなつた）

『ところで、先ほどの話を伺いましたけど。結局アラガミを倒すってことは、共生はできなつて意味じやないですか？』

『そ、そうじやねエよ。アラガミにもいい奴とか悪い奴とかがいてだな、』

（……彼の明後日の方角への発言のおかげで、また口喧嘩が始まつた。おい、この状況で部屋を出るのつて、相当難しくないか？ ああ、もうすぐ任務に行かないと…）

（意を決してドアを開け放つ。その瞬間、二人の視線が一斉に俺に降り注ぐ！）

『睦月さん、言つてやつてくださいよ。アラガミとの共生は無理だつて』

『おー、ケイスケよ。お前はできるって言つたる？ ならできるってこいつを説得してくれよ』

(逃走開始。……、……、……、つまく逃げ切れたようだ)

1016 ハントラシス

【橋越ルカ】

「あ、あれ？ 他のみんなはどうしたんですか？」

オペレーターさんなら知つてそうだから、彼女に訊いてみることにした。すると彼女はキーボードを打ち、調べているようだ。

「防衛班の方は、行方が分からなくなつた神機使いや職員の捜索へ。あと、あなたが言つてるのは多分第一部隊のことだと思いますけど、彼らは任務へ出でているようですよ。メンバーは、ケイスケさん、コウタさん、ソーマさん、あとサクヤさんの4名です」

「あれ、……じゃあ、隊長やアミエーラさんたちは？」

再び調べると、彼女は冷静に答える。

「任務へ出でとはいひようです。居住エリア内のどこかへいると思われますが、たぶんどこか個人の部屋にいるんじゃないでしょうか？」

？

ちょっとした違和感。彼らはアナグラにいないと思つたのだが。……いるをいに見せるのは簡単。ただ隠れれば済む話だ。だけど、その逆は難しい。身代わりとかがない限り、いない人間がないはずの場所に存在することは、できないのだから。

「……なにか、嫌な予感がする。こういう時の予感ばっかり当たるから、自分のことが好きになれないのよね」

無論、その予感はその後的中することとなつた。

1111 贖罪の街

## 【睦月ケイスケ】

「……やばいな」

5way雷球をもろに喰らってしまい、ソーマが回復柱を出していなければ、力尽きていたところだった。……ソーマって、なんだかんだ言つていい奴なのかもしれない。

しかし、どうやら左腕をやられたようだ。神機を持つ右腕は無事だから何とかなりそうだが、支障を及ぼす可能性があるだろう。

俺は機転を利かせて咄嗟にスタングレードを投げ、俺たちはその場を逃げ出した。だが、それもその場しどぎ。少しづつ奴はこちらへ近づいてきているようだ。

「ケイスケ、固まつてたら危ないんじゃないのかな？ 今はスタングレードで見失つてるけど、すぐに気付かれちゃうよ」

「そうね、私も散開を勧めるわ。散り散りになつたほうが、相手だつてやりにくいでしょうし」

「だけど、それって誰か一人が狙われるってことにもなるじゃないか。そっちのほうが危ないぜ」

奴、ヴァジュラの攻撃を受けて分かつた。あいつは相当やばい。一対一でどうにかできる相手ではなさそうだった。すると、ソーマが突然神機を構えて、言い放つた。

「俺が囮になる。俺を狙っている隙に、攻撃しろ」「け、けど。大丈夫なのかよ？！」

大丈夫だと言わんばかりに鼻で笑うと、彼はヴァジュラの前に姿を現す。そして雷球をひらりとかわしつつ、奴が俺たちに背を向けるような位置へ誘導した。

その間に俺たちは、物陰でどのようにしたら奴が倒せるか思案していた。

「ぐつ、マントは攻撃が全く効かないんだ。どこだ、どこだ弱点は！？」

「落ち着いて。あなたが、あなたが冷静にならないとどうにもならないわ。今の私たちの隊長は、ケイスケ、あなたなのだから」

……そうだ、今の俺は、コウタとサクヤさん、そしてソーマの3人の命を預けられている。

……レキが守ることを固執していたわけが、やっとわかったような気がする。

「　　胴体　　尻尾　　前足　　頭　　まず動きを封じる。……前足だッ」

それを聞くより早く、コウタは飛び出していった。そして三発弾を撃つ。一発、二発と微妙に弾道がそれ、地面や壁に当たってしまった。だが、三発目は前足に命中。適当に撃つたのか、それともだいたいの弾道を予測して撃つたのか。それは結局わからなかつた。そして、一瞬の怯みを確認したソーマは、コウタが足を狙った意図を察して、神機で前足を薙ぎ払う。その一撃で前足は砕け、ぐたつとヴァジュラは倒れこんだ。

「によしつ！ 次は頭だつ！』

ヴァジュラを捕喰して、チャージクラッシュを決めた。だが、まだ砕けない。

「ヴァジュラはようやく起き上がり、一度吠える。

「くつ、無理か。ならば尻尾を」

「おいつ、深追いするなっ！」

彼の言葉で冷静になるも束の間、ヴァジュラは身の回りに電撃を発した。俺はシールドで防いだつもりだったが、スタミナ不足で吹っ飛ばされる。

「回復弾よ！ 無茶しないで…！」

「す、すみません。… そうか、活性化したのか」

強力な攻撃が、さらに強くなるということか… 考えてみただけでも恐ろしい。

「なあ、ケイスケ？ データベースで調べただる、… 活性化中は「… そうだ。ありがとうな、コウタ」

俺はピンを引き抜き、スタングレードを叩きつけた。そして光に目がくらんだヴァジュラは、混乱して倒れ込んだ。

「ビンゴー、そんなにカッカしてるからこんな目に遭うんだ！」活性化中は、スタングレードによる混乱がひどくなるとデータベースには書かれていた。それを思い出させてくれたコウタに、もう一度感謝する。

「よしつ、今のうちに攻撃を、」

だが、それを邪魔するかのように、四方をコクーンメイデンが囲む。ジヤベリンを何とか回避したが、やはり鬱陶しい。

「私とコウタが片づけるわ。今のうちに攻撃を！」

「おい、俺が頭をやる。だからお前は尻尾のほうを頼む

仲間の協力が、こんなにも素晴らしい感じたのはこれまでになかった。

だから、チャージクラッシュを思いつきり振り下ろしてやる。い

つもよりもすがすがしい気持ちで。そうしたら、尻尾がちぎれた。  
普段は恐れている悲鳴が、今だけは気持ちいい。続いて無慈悲にも  
ソーマが頭にチャージクラッシュを叩きこむ。

……頭が砕けて、今度のそれは、地獄の底から響くような断末魔  
だった。

初めての任務の時よりもそれは心地よくて、心の底から小躍りして喜んだ。

……それでも小躍りって、どんな踊りなんだろうな。俺は延命効果のある健康術っぽい踊りを想像しているが。

「や……やつたあーっ！――」

「はあ……相當手こずったみたいが、全員生き残れたみたいだな」「あれ、ソーマ。なんだかんだ言つて、やつぱりいい奴なんだな」するとそっぽを向いて、黙れと一言。やっぱりどこかいけ好かないな。でも、そういう所が彼のいいところかもしれない。もっと素直になればいいのに。

とりあえずコアとか素材を回収しようか。

「……これは、レアものかな？」

「あら、それは『発電体』ね。少し前に全く手に入らない一つでリンドウが愚痴つてたわ」

帰投までの時間、俺たちは談笑しているつもりだった。

「ウイル・シャムロック」

1116 賢罪の街

「どんなミッションでしたっけ」

「説明を聞いてなかつたんですか?」

聞いたには聞いたけど、生憎忘れてしまった。寝起きだつたから、仕方ないよね。

「それに俺は、アリサは誘つたがウイル、お前を誘つたつもりはないからな」

「だつて、雨宮上卿はまだここに心配ですか。それ以上にアミエーラさんも心配です」

ため息をつく雨宮上卿。アミエーラさんもさつきからこっちを見でいる。

もしかして、心配する必要はなかつたのかな? そう思いつつもボクは、口笛を吹く。曲名は……なんだつたかな。

しばらく佇んでいると、遠くから何かの咆哮が聞こえた。……近くに確実にアラガミがいる。雨宮上卿が神機を構えたから、ボクもそれに倣つて構える。

だけど、アミエーラさんはひどくおびえた様子でいた。そして震えた手から神機がするりと抜け、重い大きな金属音を立てる。「どうした?」

「あ……、いえ……手が滑つただけです。……『炎』を付けます」  
……ボクは不謹慎かと思い、口笛を吹くのをやめる。

「もうすぐアラガミが出てくるから、気をつけろ。帰つて冷えたビールを飲みたいからな、命なくしては帰れんぞ?」

「アラガミ討伐とビール、どっちが大事なんですか?」

「そりゃあビールに決まつている」

「……ドン引きです」

……アラガミの討伐、か。正直なことを言つながらば、奴らが何も

していないというのなら、何も問題はいらないと思う、というよりも関わる必要がない。だって、何もしていないのだから。何かしてからでは遅いと言つけれど、それはボクたちが気を付けていないだけ。

……だけどアラガミたちが、ボクたちを傷つけたなら。ボクはボクの意思に従つて殺す。それがボクのスタンス。……だけど恨んでるのかな、みんな、誰彼なしに皆殺しにしたがるみたいだ。人間ってみんなそんなものなんだろうな。……もちろん、人のことは言えないかもしねりけど。

その時、誰かの声が聞こえた。氣のせいかと思ったが、今度は先ほどより大きく。

「何か声が聞こえたような気がしませんか。誰かいるのでしょうか？」

「そんなこと、あるわけないですよ。ここに人がいる筈は？」

でも、感じたようだ。だから雨宮上宮もアリエーラさんも躊躇つてる。ならばこちらから先手を打たなければならない。

ボクは準備ができたから、神機を構えて角から躍り出る。もちろん彼らは警告したけれど、向こうが先に来たらどうにもならないだろうし。

それにしても、銃形態のままでよかつた。騒音スキルのせいで変形するときうるさいし。今度刀身を変えようか。そう思いつつ、とびかかる彼らに対して、咄嗟に引き金を引いた。

## 【橋サクヤ】

しばらくケイスケたちと会話をしていた。それにしても、ヘリはまだ来ないのかしら。もつそろそろ来ていい時間だと思つただけど、

「…………？ いま何か音がしなかつた？」

「音？ えっと、どんな感じの」

「何か重いものを落としたような。 ら、そうね、神機を落としたような」

落としたことがないのか、首を傾げるケイスケやコウタ。

「…………気配がするな」

「今さつき倒したばかりだからじゃないのかな？」

誰か近くにいるような感じがするよ」

……教会の廃墟の、影。角の先。少し曲がれば、そこに誰かがいる。

「用心して。アラガミの可能性もあるわよ」

それを聞いたケイスケたちは、改めて神機を構えなおした。私は照準を角の左に持つてくる。何が出てきても、大丈夫だろ？

そして、突然影が動いた。

「出たわっ！」

3人が一斉に動いて、私が引き金を引こうとする。ところが、爆発とともに3人が吹き飛んで行つた。

「あれ、どうしてあなた方がここに？」

「しゃ、シャムロックさん！ いきなり飛び出さないでください！」

！」

「お、おこウイル。隊長の指示にちやんと従ってくれないと、」

「り、……リンドウ？」

物陰から出てきたのは、先日入隊したウイラード。そして一緒にいたのはアリサと、リンドウだった。

「お、お前ら、一体どうして」

「それはこっちが聞きたいわよ。どうして同一図画に2つのチームが？」

「……詳しく訊く必要がありそうだな」

ソーマがそう言いながら立ち上がり、続いて転がっていた2人が立ち上がる。

もちろん、3人はウイラードに突っかかる。

「いきなり撃つなよ、しかも放射つてありかよつ！！」

「そちらが3人で襲ってきたので、反射的に。すみません」

お互い様　いや、3対1だから人数的にもウイラードの方が理あり、といったところね。それよりも、なぜリンドウたちがここにいるのか気になる。

「ちよいと、……な。とにかく俺たちは教会の中を探索する。お前らは外で哨戒してくれ」

その軽い言葉とは裏腹に、ただならぬ重要さを湛えた表情から察して、私は縦に首を振った。

「中はこいつなつていたんですね。この前の任務では入らなかつたので」

「静かに。じこにアラガミがいるか分かりませんから、雨富上官は黙つてゐる。……残念ながら、ボクは比較的おしゃべり、だからなあ。

「アラガミは何度も戦つたから慣れていますよ。でも、ヘリが落ちた時に神機の高かつたパーシグがほとんどおじやんになつてしまひましたけど」

「そのくせ服はバリエーションあるんだな」

それほど多くはないと思つけどな。他の人を見ないとそういうことは分からぬ。

さて、今回のアラガミはなんだらうか。コノ「カウ、シロウ? ... ボルグ・カムランが出る可能性も否定できない。はたまた、ヴァジュラやクワドリガの可能性もある。

「よし、お出ましだ」

雨富上官がそう言つた。だからボクは窓の方を向く。そこにはステンドグラスがあつたのだろう。でもそこには虚空、逆光。そして光を背にアラガミが降り立ち、咆哮を発す。それは亡き神への鎮魂歌のように、教会中に響き渡つた。レクイエムというにはとても粗暴すぎるそれは、ラプソディとも言えた。教会にはふさわしくない。

「ヴァジュラ ではありませんね。これは墮天種でしょうか?」

「... だけど、... 何か違う」

「そのようだな。よし、アリサとウィルは援護を頼む。.....アリサ？」

立ちすくむ彼女の顔に浮かんでゐるのは、極端な恐怖。戦慄、と言つべきかもしない。

「どうかしましたか？ アリサさん

「 や……いや……」

わなわなと震えだし、彼女はとつとつ頭を抱えて座り込んでしまつた。そんなことも構わず、ヴァジュラに似たアラガミは、襲い掛かつてくる。ボクは彼女のことが気がかりで、雨宮上官にまで気が回らなかつた。どう見ても危険な状態だ。彼女を教会の外へ連れ出すべきだろうか。

「アリサあ、どうしたあつ！？ う、ウイルフ、アリサを教会の外へ ぐうッ？！」

雨宮上官が壁に叩き付けられた。この雨宮上官が、である。……不利であることは目に見えてくる。

「しつかりしてぐだれー、アリーラさんっ……」

「やだ、やだつ、パパあ、ママあ、やめてつ……、食べひやだよ  
う……お願いだからつ、食べないでえつ……！」

完全に錯乱している。はやく彼女を連れださないと。雨宮上官に外へ連れて行きます、と田配せをする。だけど、突然地面からせり出した氷壁がボクの行く手を阻んだ。

こんな攻撃は、見たことがない。まさかあのアラガミの攻撃だろうか？

「な、なんだこれ！？ ハッ、壊れる！」

「できるだけ早くしてくれ、俺一人じゃ間に合つてもない」

「そちらも、できるだけ持ちこたえてくださいよー」

3発バレットを撃ちこんで、時間差で爆破。氷壁は粉々に砕け散つた。今がチャンスだ。ボクは小脇に彼女を抱えよつとして、

「 ジン、……バ、……ライ……」

「えつ？……今、なんて言いました？」

気にする必要はない。だけど、彼女のそれが、とても重要な思えた。だから一言一言を聞き逃さないように、しっかりと耳を傾けた。

「……アジン……」

彼女は立ち上がる。よかつた、錯乱状態から立ち直ったのか。そして彼女は虚ろな瞳で神機を構え、照準を定めた。

……だけど、その銃口は、雨宮上宮に向いていた。  
「ま、まさか、まだ混乱しているんですか！？ や、やめてください、正気に戻ってください！」

「……ドウバ……」

瞳に光は戻らない。その照準は上宮に合つたままだつた。  
彼女に手を上げることなど、ボクにはできない。  
上官に避けるよう言ひにはアラガミをどうにかしなければならない。

い。

どうしようか、どうこもできない。

どうしようもないから、どうもしない。

どうかしなければ、どうにもならない。

彼女の混乱を抑える方法、抑える方法、抑える方法は？

混乱、混乱混乱混乱混乱混乱。……混乱？

「 空。……空を見ろつー。」

「トウリイフ ！？」

その瞬間、彼女の瞳に光が戻った。そして、空を見上げれば、そこには天井があつた。それは「ぐぐ」前のことだ、ここは屋内。まだ天井は崩れてはいなかつた。

「空、空、空が見えない、そらそらそら、そらがない、そらがない、雨宮隊長、先生、パパ、ママ、ない、ないよ、ないないないないないない、いやああああ、やめてえええええええええええええええええええええええええええええ！」

「あ、アリサああああああ！」

彼女が叫ぶ。

リングドウさんが抱える。

そして、彼女の神機から、一発の弾丸が発射された。照準は、天井を向いていた。　その弾は天井に着弾し、しつかりと喰い込んだ。老朽化のため、大分もろくなっていた天井は、ぱらぱらと崩れだす。

アミヒーラさんは、マリオネットの糸が切れたように、ぱたんと座り込む。

「雨宮上官！」

ボクは彼の名を呼ぶ。このままでは、ボクたちはこの教会の中に閉じ込められてしまう。ボクは彼女を抱えた。あとは、雨宮上官だけ。

すると、答えるわけでもなく、彼は必死な顔でこつちへ腕を伸ば

した。何をするのかと思ったら、彼は、ボクタチを突き飛ばした。そして、瓦礫が頭上から雨のように降り注ぎ、……その向こう側に一瞬彼の顔が見えた。その顔は晴れやかな笑顔で。

……壁に頭を打ち付け、ボクはそのまま意識を失ってしまった。

だけど、それが最後になるなんて、思つはずが、なかつた。

### 1136 贖罪の街

#### 「睦月ケイスケ」

「あ、アリサの声がつ！」

「ケイスケ、中に行つてあげてつ！」

俺は、教会の中へ足を踏み入れて、……ウィルが壁に叩き付けられて、タカビー アリサが座り込んでいるのを見つけた。そして、……瓦礫が崩れた。

「あ、ああつ……」りや、一体どうこうことだよ なんだよこれ、……なんだよこれつ！？」

「どうしたの、ケイス ああつ……！」

サクヤさんたちも、見た。彼らがそこにいることを。瓦礫で道がふさがれたことを。

『彼』がないことを。

続いて獣の声が聞こえた。それは外から。1匹じゃない、2匹、3匹、4匹。

「や、やっぱー、困まれるよ、このままだと！」

「くそつ、なんだこのアラガミはつーー？」

外の様子をうかがつた彼らは慄く。そこにはアラガミはつと

恐ろしいに違いない。

そして、アリサが話した。いや、言った。

「ちがう、ちがうよ……わたしじゃない、わたしじゃないの……！　わたしは、やつてないよう……」

その眼に俺たちは映らない。これがアリサとはとても言えない。それは恐らく抜け殻。彼女の精神は、どこにもない。

「ロンドウ、ロンドウー！」

「サクヤ、そこにいるか？」

まず彼女はほっとしたに違いない。彼が生きていたということ。そして彼女は神機を手に、瓦礫へ向かって1発、2発。だけど瓦礫は少し爆ぜるだけで、びくともしなかった。だから、俺も爆発系のバレットを使って1発。2発3発。それでも全く手じたえがなかつた。

「サクヤ、聞いてくれ。俺はこいつらの相手をする。その間にアリサやウイルたちを連れてアナグラへ戻れ」

「お、おい。ロンドウさんは？　ロンドウさんはずちゃんと戻つてくるのか？」

彼は一瞬黙つて、悲しそうな声で言った。

「配給のビール、ちゃんととつておいてくれよ」

「ダメよ、私も残つて戦うわー！」

そして彼女は絶望する。彼が帰るつもりのないこと。

「聞こえないのか？　もう一度指示を出す。サクヤはアリサを。ケイスケはウイルを連れて行つてくれ。コウタは誘導、ソーマは退路

を開け。

…………そして、これだけは守れ。……全員必ず、生きて帰れッ！

これは命令だ、サクヤあツー！」

「いやああああアツー！ やよ、リングドウ！？ 私を、私を置いていかないで！」

瓦礫にすがり、掻き集める。彼女のきれいな爪が割れて、そこから血があふれて瓦礫に赤い線が走る。

「サクヤさん、早く行こう！ このままじゃ共倒れだよー！」

「いやあ、……私を、一人にしないでよ、……リングドウ、……リン

ドウツー！」

「のままだと、本当に、みんな死んでしまう。何一つ、命令を守れない。……誰も、守れない。

だから覚悟を決めた。

「行くぜ、コウタ。しつかりサクヤさん引っ張つて行け。絶対に離すなよ？ 俺はこいつら一人を背負つていくから。……火事場の馬鹿力を舐めるな！

……全員生き延びる。その全員ってのは、リングドウさん。あんたも含まれているんだ。

「だから、……生きるよー！」

俺の声が届いた。だから彼は希望を持って答えた。

「…………了解ツー！」

俺たちは教会を飛び出す。ソーマがしばらく耐えていてくれて、どうにか時間稼ぎができたようだ。

「！」の際だからパーティと使わせてもらひつか。雨唄リンゴウモの生還を祈つてスタングレネード全部！

よし、しつかり目をつぶつてうよーっ？！ 1、2の、3つ！－！」ソーマやコウタも察して、ピンを抜いてありつたけのスタングレンードを呪き付けた。目をつぶつても眩しい閃光。アラガミは昏倒し、退路はできた。そして奇跡的なタイミングでヘリは急降下していく。

「ジャストミートだ、ヘリ！ よし、早く乗るぜ！－！」

ドアがばかっと開いて、そこへアリサとウィルを放り込む。そしてコウタがサクヤさんを無理やり乗せ、コウタが乗った。そして、アラガミが起きよつとしている様子が見えた。

「うおっ、もう正氣を取り戻しやがった！ 急がないと」

少しずつヘリが上昇していく。ソーマがヘリに飛び乗つて、俺はヘリの戸をつかんだ。その時、……左腕の力がすつと抜ける。

「あつ

」

左腕を、やられていた。どうしてさつきまで気付かなかつたんだろ？－ どうして、今になつて気付いてしまつたのだろう。トにはアラガミ。落ちれば確實に、俺は奴らの餌食になるだろう。必死に俺は、戸を掴んでいたけれど……ふつと、手が離れて。

その手を、誰かが掴んでくれた。

「じつかりしろつ－ これだから仲間つてのは嫌いなんだよつ……！」

そう言いながらも、ソーマは俺の手を握り、引っ張り上げてくれ

た。

「……ごめん。……ありがとな」

俺の言葉に反応せず、彼はそっぽを向いた。

……教会の屋根が見えて、そこから中が少しだけ見えた。だけど、やつぱり何も見えなかつた。

……だから、俺たちが最後に見た、リングドウさんの顔は。

……笑顔のまま変わらなかつた。

1140 教会内部

### 〔雨露リンクドウ〕

「 行つたか」

……懐から煙草を取り出しだが、……箱の中には、一本しか残されていなかつた。これを吸つてしまえば、恐らくもう、吸うことはできない。一瞬躊躇つて、……だけど俺は火をつけて、咥える。吸わずに後悔するよりは、マシだ。

……悲しみを抑え、心を落ち着かせ。……俺は煙を吐き出した。

「 サクヤ……俺は、……」

……口にするのもバカバカしくて、恥ずかしくて、いそばゆい言葉を呑み込む。もう一度煙草を咥え、吸う。

そんな言葉を伝える筈の通信機も、天井の崩落で壊れてしまった。  
俺は、自分の不運さを今だけ、恨む。

……転がる、3体のヴァジュラのようなアラガミの屍。すでに体力は、尽きかけている。アイテムを使い果たした俺に、もはや回復する術はなかつた。

その時、新しいアラガミの気配を感じた。

「……お次は誰だ？ できれば、もう少し休ませてほしいんだがな

……」

黒いヴァジュラ。……きっと、奴らの親玉に違ひなかつた。

『……全員生き延びる。その全員つてのは、リンクドウさん。あんたも含まれているんだ。』

だから、……生きようよ?』

「ああ、……分かつてるぞ。……俺は、生きるぜ」

煙を吐いて、もう、走馬灯を見る時間が終わったことを惜しむ。

先ほど呑み込んだ言葉を、伝えたかった。 でも、もう遅い。

俺は、神機を握りしめ、立ち上がる。

煙草を捨てて、荒神の咆哮を浴びて。

そして、

煙草の火が消え、幕は降ろされた

。

## 6 · COME TO THE END (後書き)

体験版パートはこれにて終了です。ああ、長かった。いや、短い方かもしだれないとつてはいいまでがとても長く感じた気がする。

……と、いうことは、次回からは体験版プレイヤーにとつてネタバレの嵐というわけですな。おお、気を付けた方がよさそうだ。  
次回は、オリキャラの紹介も入れさせていただこう。さすがに説明がないと分かりにくいですしね。結構細かく書くつもり。  
それでは次回まで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2274z/>

---

GOD EATER -PL/RAYERS-

2011年12月21日18時47分発行